九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書（17）

瀬戸墳墓群
瀬戸遺跡
帆足城跡

2000
大分県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書（17）

瀬戸墳墓群
瀬戸遺跡
帆足城跡

瀬戸墳墓群・瀬戸遺跡・帆足城跡遠景（西から）

瀬戸墳墓群・瀬戸遺跡・帆足城跡遠景（西から）

序　文

本書は大分県教育委員会が日本道路公団福岡建設局の委託を受けて、平成３年８月から平成５年３月までの間に実施した九州横断自動車道(日田～玖珠間)建設に伴う瀬戸墳墓群・瀬戸遺跡・帆足城跡にかかる埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

大分県の東西を結ぶ九州横断自動車道（大分自動車道）は、平成８年11月の大分～大分米良間の完成をもって全線開通しましたが、県教育委員会では自動車道の建設に伴い、埋蔵文化財の発掘調査を順次実施し、その成果を報告書として発行してまいりました。

今回、報告する瀬戸墳墓群・瀬戸遺跡・帆足城跡からは弥生・古墳時代と中世を中心とする貴重な遺構・遺物が発見されており、いずれも玖珠盆地の歴史の変遷を知るうえで、大変貴重でかつ重要な資料であります。

今後、本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発並びに学術研究の一助となれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大なる御協力をいただきました関係各位に対して、衷心より感謝申し上げます。

平成12年３月31日

大分県教育委員会教育長

田　中　恒　治

例　言

1．本報告書は九州横断自動車道（日田～玖珠間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は日本道路公団福岡建設局の委託事業として大分県教育委員会が実施した。

3．調査対象となったのは瀬戸古墳（遺跡台帳番号652068）・瀬戸遺跡（遺跡台帳番号652066）・帆足城跡（遺跡台帳番号652067）である。瀬戸古墳と瀬戸遺跡は広大な帆足城跡のなかに点在するものであるが、本編では遺跡の性格及び報告の手順上、瀬戸古墳を「瀬戸墳墓群」、瀬戸遺跡とこれに連続する調査区を「瀬戸遺跡」、帆足城跡東部の独立丘陵上に所在する調査区を「帆足城跡」、帆足城跡北部（瀬戸遺跡北東側に広がる調査区）の調査区を「平田山土塁」とした。

4．遺物の整理作業は大分県教育庁文化課文化財資料室整理補佐員がおこない、遺物の実測・トレースは大分県教育庁文化課職員及び同資料室整理補佐員があたった。

5．出土遺物及び関係資料は、大分県教育庁文化課文化財資料室で保管している。

6．挿図に使用した座標系は昭和43年建設省告示第3059号の規定による第Ⅱ座標系である。図郭に表示してある座標値はキロメートル単位である。

7．付論の執筆は九州大学大学院 教授 田中良之、同助手 金宰賢に依頼した。

8．瀬戸1号墳出土遺物に付着した布痕の同定については、奈良県立橿原考古学研究所 泉森皎、今津節夫、宮内庁正倉院事務所 吉松茂信の諸先生方の協力を得た。

9．「瀬戸墳墓群」については大分県教育庁文化課 副主幹 村上久和、同文化課 主査 原田昭一、「瀬戸遺跡」と「帆足城跡」及びその他の部分については同文化課 主任 梁矢和徳がそれぞれ編集・執筆を行なった。瀬戸遺跡の第1図と第72図に用いた縄張図は平成11年度中世城館調査に伴い同文化課 主査 小柳和宏及び梁矢が作製した図（残存している瀬戸遺跡と平田山土塁の縄張図）に瀬戸遺跡調査区内の縄張りを付け加えたものである。

本　文　目　次

Ⅰ．調査の概要 …… 1
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．調査の組織 …… 2
　3．調査の経過 …… 2
Ⅱ．地理的歴史的環境 …… 3
　1．地理的環境 …… 3
　2．歴史的環境 …… 3
Ⅲ．瀬戸墳墓群 …… 13
　1．歴史的概要 …… 13
　2．調査の概要 …… 14
　3．調査の成果 …… 15
　　a．瀬戸1号墳 …… 15
　　イ）墳丘 …… 15
　　ロ）1号主体部 …… 16
　　ハ）2号主体部 …… 16
　　ニ）3号主体部 …… 20

ホ）4号土体部 …… 20
ヘ）北側周溝 …… 24
ト）南側周溝 …… 25
b．墳墓群 …… 29
イ）1号方形墓 …… 29
ロ）2号方形墓 …… 29
ハ）3号方形墓 …… 29
ニ）4号方形墓 …… 30
ホ）1号円形墓 …… 30
ヘ）1号土坑 …… 30
4．まとめ …… 32
5．付論 …… 34
Ⅳ．瀬戸遺跡 …… 51
1．調査の概要 …… 51
2．調査の成果 …… 51
a．瀬戸遺跡の縄張り …… 51
b．瀬戸遺跡と平田山土塁の縄張り …… 52
c．A区の調査 …… 52
イ）竪穴住居跡 …… 56
ロ）大型竪穴 …… 61
ハ）竪穴 …… 72
ニ）土坑 …… 73
ホ）掘立柱建物跡 …… 78
ヘ）柵状遺構 …… 84
ト）方形溝状遺構 …… 86
d．B区の調査 …… 86
イ）溝状遺構 …… 89
ロ）ピット群 …… 89
e．C区の調査 …… 89
イ）竪堀状遺構 …… 89
ロ）石列 …… 94
f．D区の調査 …… 94
イ）石積 …… 95
ロ）土坑 …… 96
g．E区の調査 …… 96
h．F区の調査 …… 96
イ）堀切 …… 96
i．G区の調査 …… 97
イ）整地層 …… 97
j．表面採取遺物 …… 102
3．小結 …… 104
Ⅴ．帆足城跡 …… 133
1．調査の概要 …… 133
2．調査の成果 …… 133
3．小結 …… 134

挿 図 目 次

第１図　調査遺跡位置図 …… 1
第２図　瀬戸墳墓群・瀬戸遺跡・帆足城跡周辺遺跡分布図 …… 5～6
第３図　瀬戸墳墓群・瀬戸遺跡・帆足城跡周辺地形図（１） …… 7～8
第４図　瀬戸墳墓群・瀬戸遺跡・帆足城跡周辺地形図（２） …… 9～10

瀬戸墳墓群
挿 図 目 次

第１図　瀬戸墳墓群周辺地形図 …… 13
第２図　瀬戸墳墓群遺構配置図 …… 14
第３図　瀬戸１号墳遺構配置図 …… 15
第４図　瀬戸１号墳断面図 …… 16
第５図　瀬戸１号墳１号主体部平面・断面図 …… 17～18
第６図　瀬戸１号墳２号主体部平面・断面図 …… 19
第７図　瀬戸１号墳３号主体部平面・断面図 …… 21
第８図　瀬戸１号墳４号主体部平面・断面図 …… 22
第９図　瀬戸１号墳出土土器実測図 …… 24
第10図　瀬戸１号墳出土鉄器実測図 …… 25
第11図　瀬戸１号墳出土玉類実測図 …… 26
第12図　瀬戸１号墳３号主体部出土銅鏡実測図 …… 26
第13図　瀬戸１号墳墳丘出土遺物実測図 …… 26
第14図　瀬戸墳墓群方形墓・円形墓遺構配置図 …… 27～28
第15図　瀬戸墳墓群１号方形墓主体部平面・断面図 …… 29
第16図　瀬戸墳墓群１号方形墓周溝内墓平面・断面図 …… 29
第17図　瀬戸墳墓群２号方形墓主体部平面・断面図 …… 29
第18図　瀬戸墳墓群３号方形墓主体部平面・断面図 …… 30
第19図　瀬戸墳墓群４号方形墓主体部平面・断面図 …… 30
第20図　瀬戸墳墓群１号円形墓主体部平面・断面図 …… 31
第21図　瀬戸墳墓群１号土坑平面・断面図 …… 31
第22図　瀬戸墳墓群出土土器実測図 …… 31
第23図　瀬戸墳墓群出土玉類実測図 …… 31

表　目　次

表1　瀬戸1号墳出土土器観察表 …… 23
表2　瀬戸1号墳出土鉄器観察表 …… 25
表3　瀬戸1号墳出土玉類観察表 …… 25
表4　瀬戸墳墓群出土土器観察表 …… 30
表5　瀬戸墳墓群出土玉類観察表 …… 31
表6　瀬戸墳墓群出土遺物一覧表 …… 33
表7　瀬戸1号墳4号主体部出土人骨頭蓋骨計測値 …… 36
表8　頭蓋骨計測値（男性） …… 36

図　版　目　次

図版1　瀬戸墳墓群全景
図版2　瀬戸1号墳1・2号主体部
瀬戸1号墳1号主体部北西壁面南側
瀬戸1号墳1号主体部南西壁面
図版3　瀬戸1号墳1号主体部南西壁南東隅コーナー
瀬戸1号墳1号主体部南東壁中央部
瀬戸1号墳1号主体部北側
瀬戸1号墳1号主体部北東隅
図版4　瀬戸1号墳2号主体部
瀬戸1号墳3号主体部
図版5　瀬戸1号墳4号主体部
瀬戸1号墳4号主体部蓋石
瀬戸1号墳北側周溝
図版6　瀬戸墳墓群全景
瀬戸墳墓群1号方形墓
瀬戸墳墓群1号方形墓主体部
瀬戸墳墓群2号方形墓
図版7　瀬戸墳墓群2号方形墓
瀬戸墳墓群3号方形墓
瀬戸墳墓群4号方形墓主体部
瀬戸墳墓群1号円形墓
図版8　瀬戸墳墓群出土土器類
瀬戸1号墳1号主体部出土銅鏡（表）
瀬戸1号墳3号主体部出土銅鏡（裏）
瀬戸1号墳2号主体部出土鉄剣
瀬戸1号墳2号主体部出土鉄剣柄部
図版9　瀬戸1号墳2号主体部出土鉄剣柄X線写真
瀬戸1号墳3号主体部出土銅鏡X線写真
瀬戸1号墳2号主体部出土鉄剣鞘木質拡大顕微鏡写真
瀬戸墳墓群出土土器
瀬戸墳墓群出土鉄器
図版10　瀬戸1号墳4号主体部出土人骨

瀬戸遺跡
挿図目次

第1図　瀬戸遺跡・平田山上墓域張図 …… 53～54
第2図　A区遺構配置図 …… 55
第3図　1号竪穴住居跡実測図 …… 56
第4図　1号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 57
第5図　2号竪穴住居跡実測図 …… 58
第6図　2号竪穴住居跡石庖丁出土状況実測図 …… 58
第7図　2号竪穴住居跡出土遺物実測図（1） …… 59
第8図　2号竪穴住居跡出土遺物実測図（2） …… 60
第9図　3号竪穴住居跡実測図 …… 60
第10図　1号大型竪穴実測図 …… 61
第11図　1号大型竪穴出土遺物実測図（1） …… 63
第12図　1号大型竪穴出土遺物実測図（2） …… 65
第13図　1号大型竪穴出土遺物実測図（3） …… 67
第14図　1号大型竪穴出土遺物実測図（4） …… 69
第15図　1号大型竪穴出土遺物実測図（5） …… 70
第16図　1号大型竪穴出土遺物実測図（6） …… 71
第17図　1号・2号竪穴実測図 …… 72
第18図　1号竪穴出土遺物実測図 …… 72
第19図　2号竪穴出土遺物実測図 …… 72
第20図　1号土坑実測図 …… 73
第21図　1号土坑出土遺物実測図 …… 73
第22図　2号土坑実測図 …… 73
第23図　3号土坑実測図 …… 74
第24図　4号土坑実測図 …… 74
第25図　5号土坑実測図 …… 74
第26図　6号土坑実測図 …… 75
第27図　6号土坑出土遺物実測図 …… 75
第28図　7号土坑実測図 …… 75
第29図　8号土坑実測図 …… 75
第30図　9号土坑実測図 …… 76
第31図　10号土坑実測図 …… 76
第32図　11号土坑実測図 …… 76
第33図　12号土坑実測図 …… 76
第34図　13号土坑実測図 …… 77
第35図　14号土坑実測図 …… 77
第36図　15号土坑実測図 …… 77
第37図　1号掘立柱建物跡実測図 …… 78
第38図　2号掘立柱建物跡実測図 …… 78
第39図　3号掘立柱建物跡実測図 …… 79

第40図　3号掘立柱建物跡出土遺物実測図 …… 79
第41図　4号掘立柱建物跡実測図 …… 80
第42図　5号掘立柱建物跡出土遺物実測図 …… 80
第43図　5号掘立柱建物跡実測図 …… 81
第44図　6号掘立柱建物跡実測図 …… 81
第45図　6号掘立柱建物跡出土遺物実測図 …… 82
第46図　7号掘立柱建物跡実測図 …… 83
第47図　7号掘立柱建物跡出土遺物実測図 …… 83
第48図　1号柵状遺構実測図 …… 84
第49図　1号柵状遺構出土遺物実測図 …… 84
第50図　2号柵状遺構実測図 …… 85
第51図　3号柵状遺構実測図 …… 85
第52図　4号柵状遺構実測図 …… 85
第53図　5号柵状遺構実測図 …… 85
第54図　1号方形溝状遺構出土遺物実測図 …… 86
第55図　B区遺構配置図 …… 86
第56図　1号方形溝状遺構実測図 …… 87～88
第57図　1号溝状遺構実測図 …… 89
第58図　1号溝状遺構出土遺物実測図 …… 89
第59図　1号竪堀状遺構実測図 …… 90
第60図　1号竪堀状遺構出土遺物実測図（1） …… 91
第61図　1号竪堀状遺構出土遺物実測図（2） …… 93
第62図　1号石列位置図 …… 95
第63図　1号石列実測図 …… 95
第64図　1号石棺実測図 …… 96
第65図　1号土坑実測図 …… 96
第66図　1号土坑出土遺物実測図 …… 96
第67図　1号堀切実測図 …… 97
第68図　1号整地層土層実測図 …… 99～100
第69図　1号整地層出土遺物実測図 …… 101
第70図　表面採取遺物実測図 …… 103
第71図　玖珠盆地内主要城郭分布図 …… 104
第72図　瀬戸遺跡・帆足城跡・平田山土量縄張図及び周辺字図 …… 107～108

図　版　目　次

図版1　瀬戸遺跡遠景（北から）　瀬戸遺跡遠景（南から）
図版2　瀬戸遺跡遠景（東から）　瀬戸遺跡遠景（垂直）
図版3　瀬戸遺跡A区全景（垂直）
図版4　瀬戸遺跡A区・D区遠景（西から）　瀬戸遺跡D区・E区遠景（西から）　瀬戸遺跡E区遠景（西から）
図版5　瀬戸遺跡B区帯曲輪（西から）　瀬戸遺跡G区整地層（東から）
図版6　瀬戸遺跡A区遠景（東から）　瀬戸遺跡A区遠景（北から）

図版7　瀬戸遺跡A区1号竪穴住居跡　瀬戸遺跡A区2号竪穴住居跡
図版8　瀬戸遺跡A区2号竪穴住居跡石皿出土状況　瀬戸遺跡A区3号竪穴住居跡
図版9　瀬戸遺跡A区1号大型竪穴　瀬戸遺跡A区1号・2号竪穴
図版10　瀬戸遺跡B区1号溝状遺構　瀬戸遺跡C区竪堀状遺構
図版11　瀬戸遺跡D区東側切岸・帯曲輪　瀬戸遺跡D区西側切岸
図版12　瀬戸遺跡D区1号土坑遺物出土状況　瀬戸遺跡E区全景
図版13　瀬戸遺跡F区堀切（東から）　瀬戸遺跡F区堀切（南から）
図版14　A区1号竪穴住居跡出土遺物　A区1号竪穴住居跡出土遺物
A区1号竪穴住居跡出土遺物　A区1号竪穴住居跡出土遺物
図版15　A区2号竪穴住居跡出土遺物　A区2号竪穴住居跡出土遺物
A区2号竪穴住居跡出土遺物　A区2号竪穴住居跡出土遺物
A区2号竪穴住居跡出土遺物　A区2号竪穴住居跡出土遺物
A区2号竪穴住居跡出土遺物　A区2号竪穴住居跡出土遺物
A区2号竪穴住居跡出土遺物
図版16　A区1号大型竪穴出土遺物　A区1号大型竪穴出土遺物
A区1号大型竪穴出土遺物　A区1号大型竪穴出土遺物
A区6号掘立柱建物跡出土遺物　A区6号掘立柱建物跡出土遺物
A区6号掘立柱建物跡出土遺物　A区7号掘立柱建物跡出土遺物
図版17　A区7号掘立柱建物跡出土遺物　A区7号掘立柱建物跡出土遺物
A区7号掘立柱建物跡出土遺物　C区1号竪堀状遺構出土遺物
C区1号竪堀状遺構出土遺物　C区1号竪堀状遺構出土遺物
C区1号竪堀状遺構出土遺物　D区1号土坑出土遺物
図版18　A区1号大型竪穴出土遺物　A区1号大型竪穴出土遺物
A区1号大型竪穴出土遺物
A区1号大型竪穴出土遺物　A区1号大型竪穴出土遺物
A区1号大型竪穴出土遺物　A区1号大型竪穴出土遺物
図版19　A区1号大型竪穴出土遺物　A区1号大型竪穴出土遺物
A区1号大型竪穴出土遺物　A区6号掘立柱建物跡出土遺物
A区1号竪穴出土遺物
図版20　C区1号竪堀状遺構出土遺物　C区1号竪堀状遺構出土遺物
G区1号整地層出土遺物　G区1号整地層出土遺物
G区1号整地層出土遺物　G区1号整地層出土遺物
G区表面採取遺物　D区　表面採取遺物

帆足城跡
挿図目次

第1図　帆足城跡縄張図 …… 133

図版目次

帆足城跡遠景（西から） …… 134

Ⅰ．調査の概要

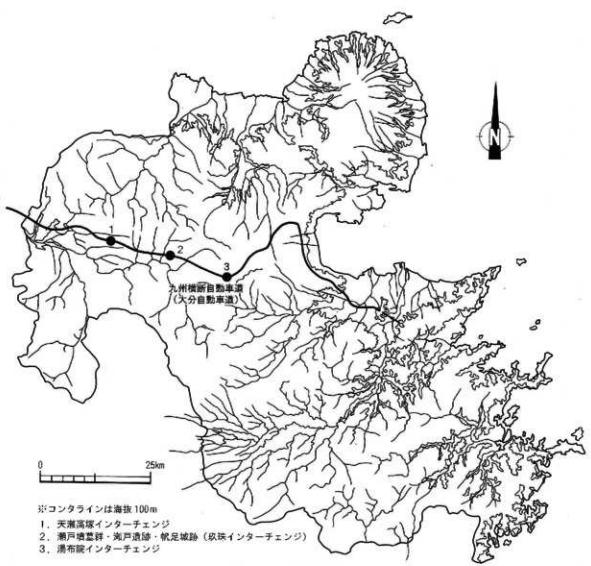
1．調査に至る経緯

九州横断自動車道は長崎市から大分市までの全長約252kmの高速自動車道で、昭和44年1月、長崎県大村から大分県日田市間（全長149km）の基本計画が決定され、続いて昭和47年6月、大分県日田市から同県大分市間（全長約103km）の基本計画が打ち出された。これをうけ、昭和58年から昭和61年まで日本道路公団福岡建設局の委託により日田～玖珠間道路建設予定地内の分布調査を実施し、結果、試掘及び本調査を必要とする地点が28箇所にのぼった。昭和63年以降、調査条件が整った地区より試掘調査及び本調査を順次開始した。玖珠町内では、平成2年4月より原田遺跡の本調査がはじまり、つづいて、岩塚古墳、玖珠ＳＡ地区遺跡群、谷ノ瀬遺跡、自岩遺跡、下綾垣遺跡、四日市上ノ原横穴墓群、治別当遺跡、瀬戸墳墓群、瀬戸遺跡、帆足城跡の発掘調査が順次開始された。

今回報告する瀬戸墳墓群（大分県玖珠郡玖珠町大字帆足字瀬戸）・瀬戸遺跡（字瀬戸・西）・帆足城跡（字獅子洞）は、平成3年8月5日から平成5年3月30日に実施した本調査に伴うものである。

参考文献

『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報-Ⅰ・Ⅱ-玖珠町-』第1集・第4集 大分県教育委員会 1991～1994
『大分県埋蔵文化財年報』1～3 大分県教育委員会 1993～1995
『京園遺跡 原川遺跡 志塚古墳 玖珠SA地区遺跡群 谷ノ瀬遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 大分県教育委員会 1995
『日田条里遺跡群 佐寺横穴墓群 大迫遺跡 日岩遺跡 下綾垣遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 大分県教育委員会 1997



第1図　調査遺跡位置図

2．調査の組織

平成３年度

調査主体　大分県教育委員会
教 育 長　宮本高志
文化課長　秋葉正嗣（大分県教育庁管理部文化課長）
調査指導　賀川光夫（大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授）
　　後藤宗俊（別府大学教授）
調査主任　渋谷忠章（同文化課埋蔵文化財第２係長）
調 査 員　村上久和（同文化課主査：調査担当）
　　染矢和徳（同文化課主事）
　　永松みゆき（同文化課嘱託）
　　須原　緑（同文化課嘱託）

平成４年度

調査主体　大分県教育委員会
教 育 長　宮本高志
文化課長　秋葉正嗣（大分県教育庁管理部文化課長）
調査指導　賀川光夫（大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授）
　　後藤宗俊（別府大学教授）
　　田中良之（九州大学院教授）
　　佐々木章（大分短期大学助教授）
　　千田嘉博（国立歴史民俗博物館助手）
調査主任　渋谷忠章（同文化課主幹兼埋蔵文化財第２係長：調査担当）
調 査 員　江田　尋（同文化課主任）
　　染矢和徳（同文化課主事）
　　須原　緑（同文化課嘱託）

3．調査の経過

平成３年度調査

調査は平成３年８月５日から平成４年３月30日に実施した。瀬戸墳墓群については、遺跡の広がる尾根筋の表土を全て除去した結果、周溝を有す円墳１基（竪穴式石室）と溝を共有する方墳及び円墳を数基確認した。瀬戸遺跡については最も高所に位置する平坦地約1500㎡の表土を除去した。精査の結果、溝状遺構、掘立柱建物跡、大型竪穴などを確認した。帆足城跡は試掘坑15条（１号～15号トレンチ）を設定し遺構・遺物の確認を実施したが、成果をあげるには至らなかった。各遺跡ともに次年度継続調査とした。

平成４年度調査

調査は平成４年４月７日から平成５年３月30日に実施した。瀬戸墳墓群は調査の結果、竪穴式石室に関係すると考えられる小児用石棺等を墳丘北側から新たに確認した。瀬戸遺跡は最高所よりのびる尾根筋３箇所と尾根間をつなぐ緩斜面の表土を全て除去した。調査の結果、南北約200ｍ、東西約150ｍの曲輪群（曲輪は調査区外にも展開しており南北約300ｍ、東西約250ｍの規模を持つ）を確認した。この他、瀬戸遺跡周辺の尾根筋及び谷部に遺跡の広がりが想定されたため試掘溝を７条設定（16号～22号トレンチ）したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。帆足城跡で確認された切岸、帯曲輪などについては測量を実施した。各遺跡とも年度内に全ての調査を終了した。

参考文献
『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報-日田-玖珠間-』第２・３集 大分県教育委員会 1992・1993
『大分県埋蔵文化財年報』１・２ 大分県教育委員会 1993・1994

Ⅱ．地理的歴史的環境

1．地理的環境

今回報告する遺跡は、大分県玖珠郡玖珠町大字帆足字瀬戸・西・獅子河に所在する。玖珠町は大分県西部に位置するもので、北を下毛郡耶馬渓町、南を直入郡久住町、西を日田郡天瀬町、東を大分郡湯布院町及び玖珠郡九重町に接している。玖珠町の位置する玖珠盆地は筑後川の上流、久重連山瀬の本付近を源流とする玖珠川中流域にできた三日月形の盆地である。この盆地を取り巻くように耶馬渓溶岩、万年山溶岩がつくる溶岩台地が高原状に広がっており、浸食を受けた台地は溶岩メサ、ビュートといった厳麗な景観をみせている。盆地内の標高は300 m～350 m、溶岩台地上で標高600 m前後である。これらの地形が当地方独特の気象を生み出しており、気候的には内陸山地型に属し寒暖の差が激しく、夏期は高温で、冬期は気温が低いとされる。

盆地を東西に流れる玖珠川南岸には扇状地、微高地、河成堆積地が発達し、これらに、当地域を代表する集落跡、墳墓群を遺している。北岸は玖珠川に注ぐ松木川、森川、太田川等、小河川の浸食による小規模な河成堆積地、河岸段丘、微高地がみられ、小河川間には比高差50 m前後の丘陵が連なっている。丘陵上には墳墓群、山城等を随所にみることができ、玖珠川南岸と併せて盆地内で最も遺跡密度を示している。現在の集落及び水田は扇状地、河成堆積地、河岸段丘、微高地上に広がっており生活の場となっている。遺跡は玖珠川の支流である森川の東岸に位置しており、第2図（瀬戸墳墓群・瀬戸遺跡・帆足城跡周辺遺跡分布図）から明らかなように森川流域に広がる沖積地から立ち上がる丘陵上及び尾根筋上に広がっている。森川は前記の丘陵間を南北に流れるもので、流域には氾濫原と狭小な河成堆積地及び河岸段丘が散在し、調査区付近の丘陵との比高差は40 m～50 m前後とやや低くなっている。瀬戸墳墓群の調査前標高は372.620～376.400 m前後、瀬戸遺跡は標高350.000～389.800 m、帆足城跡は標高は365.000 m～389.000 mである。

2．歴史的環境

調査区の周辺は前述したとおり、高い遺跡密度を持つ地域である。しかしながら、旧石器時代の遺跡は数少なく、発掘調査の事例が増加するのは縄文時代以後となる。九重町二日市浜大遺跡では草創期から後期に至る文化層、部原遺跡では後期の集石炉を持つ竪穴住居跡等が確認されている。弥生時代になると遺跡数は急増する。瀬戸墳墓群・瀬戸遺跡・帆足城跡西方の名草台遺跡は集落と墓地が併存する遺跡で、石棺群と祭祀跡が確認している。白岩遺跡は環濠を持つ高地性集落で、当時の緊張関係を如実に物語るものである。さらに、近年、河成堆積地上から抜口遺跡（弥生時代後期終末～古墳時代初頭）が確認されたことから、今後、低地への進出を示唆する興味深い事例となろう。この他、盆地南部のおごもり遺跡、小田遺跡群でも同時代の住居跡を確認している。古墳時代に至ると遺跡は随所でみられるようになる。盆地内での墳墓の分布をみると、東部のおごもり方形低墳古墳・船岡山古墳・亀都起古墳の大隈グループ、北部の瀬戸墳墓群・千人塚古墳・鬼ケ城古墳の帆足グループ、西部の陣ケ台古墳群・鬼塚古墳の小田グループに分けられる。これらのグループのうち、4世紀後半から5世紀前半では帆足グループ、5世紀中葉から6世紀中葉後では亀都起古墳（前方後円墳）を有する大隈グループ、そして、6世紀末から7世紀初頭にかけては帆足グループ及び小田グループの興隆がみられるが、概して鼎立した状態であったと考えられる。並行して四日市上ノ原横穴墓群、鷹巣横穴墓群などに代表される横穴墓が点越した存在として登場する。集落跡についてみると小田遺跡群、原田遺跡、谷ノ瀬遺跡、下綾垣遺跡、治別当遺跡など、地形にとらわれることなく盆地内の各所で確認されている。

古代では小田遺跡群から円面硯が出土しており、太宰府木簡の『久須評』、『豊後国正税帳』及び『豊後国風土記』の「球珠郡」という記載から、当期はすでに大和政権下にあったことが推測できる。その後は豊後清原氏の勢力下に組み込まれ、中世に入ると長野荘、帆足郷、山田郷、古後郷が成立し、玖珠郡衆と呼ばれる武士団の勢力下におかれる。鎌倉期に守護大名となった大友氏は、この玖珠郡衆と主従関係を強め、戦国期には大友の軍事力として大きな位置を占めるようになり、末期には豊薩戦の舞台となる。現在でも16箇所余りの城跡が知られていることから、当時の緊張関係が窺い知れる。大友氏改易後は岩部氏・毛利氏の支配下となる。慶長6年（1601）には久留島康親が盆地北部に入府し、盆地南部は日田天領となる。以来、近代に至るまで同支配が続く。

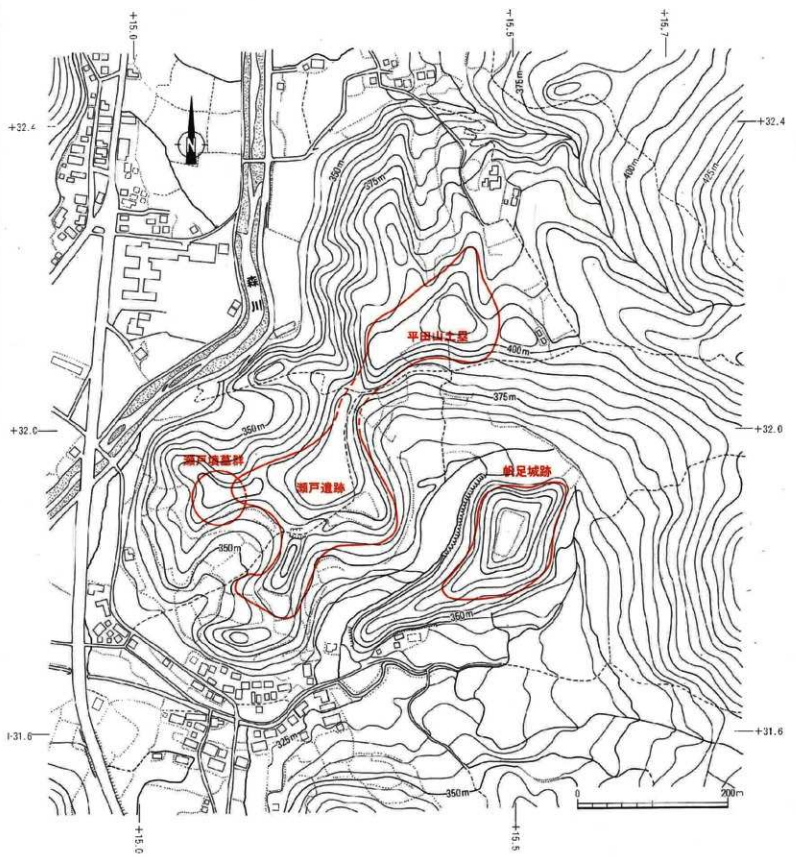
参考文献
『大分県史』地誌篇 大分県 1989
『大分県史』先史篇Ⅱ 大分県 1989
『大分県の地名』日本歴史地名体系45 平凡社 1995

番号	遺跡名	時代
1	瀬戸墳墓群	古墳
2	瀬戸遺跡	中世他
3	帆足城跡	中世他
4	平田山土塁	中世
5	治別当遺跡	弥生～古墳他
6	平台遺跡	古墳
7	西辺跡	弥生～古墳
8	鬼ケ城古墳	古墳
9	平原横穴墓群	古墳
10	本村遺跡	弥生～古墳
11	伏原立石	中世
12	角牟礼城跡	中世
13	太田巨石遺跡	旧石器他
14	太田中学校遺跡	旧石器他
15	太田本村横穴墓群	古墳
16	太田遺跡	弥生
17	古後城跡	中世
18	中原古墳	古墳
19	上ノ原遺跡	弥生～古墳
20	千人塚古墳	古墳
21	名草台遺跡	弥生～古墳
22	鹿巣横穴墓群	古墳
23	四日市上ノ原横穴墓群	古墳
24	井ノ尻古墳	古墳

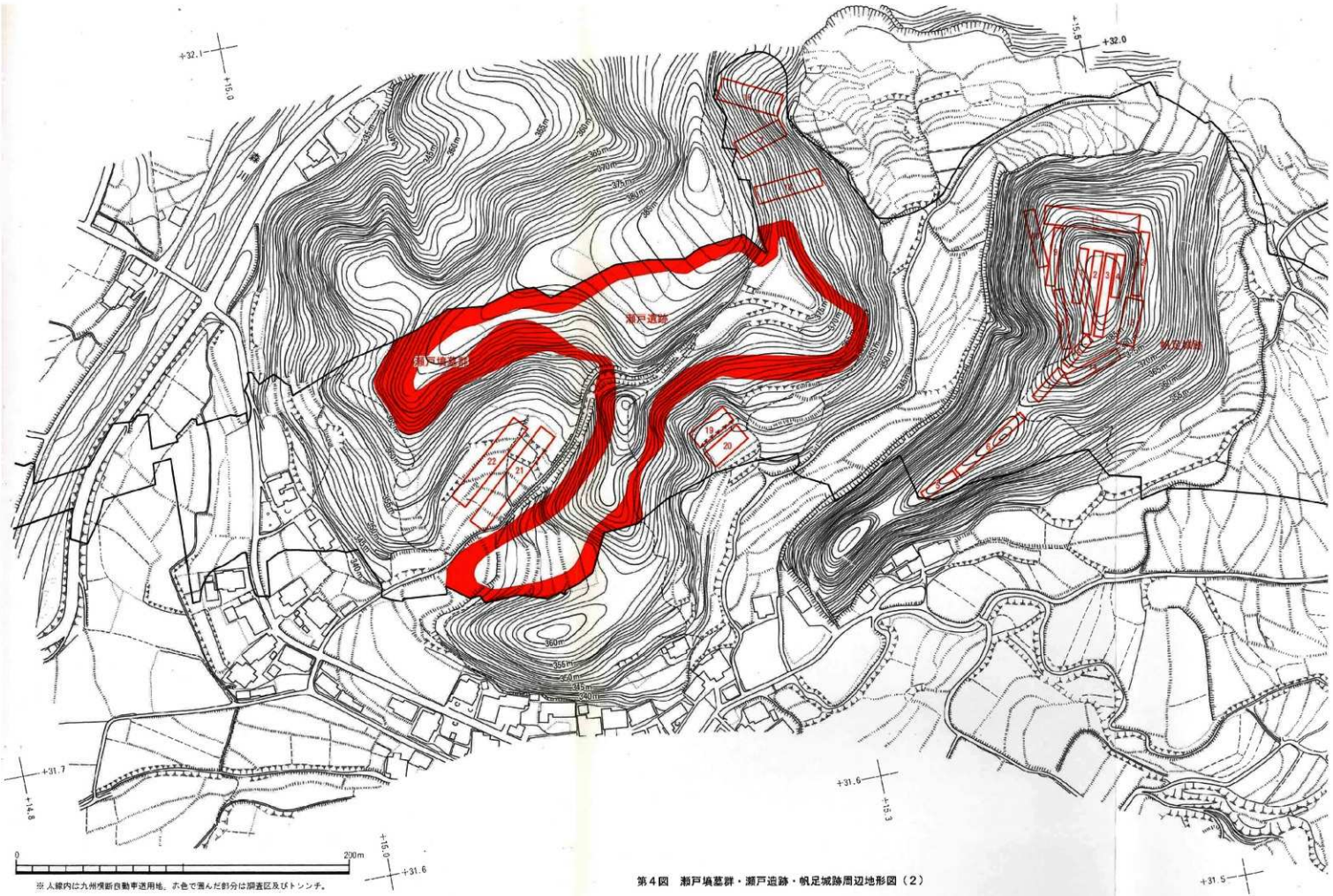
番号	遺跡名	時代
25	十ノ釣辺跡	古墳
26	十ノ釣古墳	古墳
27	井ノ尻遺跡	弥生
28	四日市遺跡	弥生
29	下鍬塚遺跡	古墳
30	白岩遺跡	弥生
31	谷ノ瀬遺跡	古墳他
32	野田古墳	古墳
33	野田山遺跡	古墳
34	野田城跡	中世
35	妙大寺A遺跡	縄文他
36	妙大寺B遺跡	縄文～弥生
37	鬼塚古墳	古墳
38	鬼塚周辺石棺群	古墳
39	中山田遺跡	古墳
40	小竿遺跡	古墳・近世
41	早水野中遺跡	弥生・近世
42	将軍塚古墳	古墳
43	陣ケ台姫塚古墳	古墳
44	陣ケ台遺跡	古墳
45	陣ケ台原塚古墳	古墳
46	伏株山城跡	中世
47	下横尾遺跡	古墳・中世
48	山王古墳	古墳

番号	遺跡名	時代
49	寺山古墳	古墳
50	坂口遺跡	弥生～古墳
51	般若寺2号墓	古墳
52	般若寺1号墓	古墳
53	岩屋敷跡	中世
54	旦ノ原遺跡	弥生
55	五行塚古墳	古墳
56	払川古墳	古墳
57	井尻古墳	古墳
58	船岡山古墳	古墳
59	船岡山石棺群	古墳
60	鎗水遺跡	古墳
61	船岡山横穴墓群	古墳
62	亀都起古墳	古墳
63	祇陶遺跡	弥生他
64	雲曲遺跡	弥生
65	二日市横穴墓群	古墳
66	二日市洞穴	縄文
67	松木遺跡	古墳～古代
68	下馬原遺跡	旧石器
69	樋ノ口遺跡	縄文
70	宝山遺跡	弥生

第２図　瀬戸墳墓群・瀬戸遺跡・帆足城跡周辺遺跡分布図（国土地理院二万五千分の一地形図「豊後森」より転載）



第３図　瀬戸境墓群・瀬戸遺跡・帆足城跡周辺地形図（１）



※人線内は九州横断自動車道用地。赤色で塗んだ部分は調査区及びトレンチ。

第4図　瀬戸墳墓群・瀬戸遺跡・帆足城跡周辺地形図（2）

瀬戸墳墓群

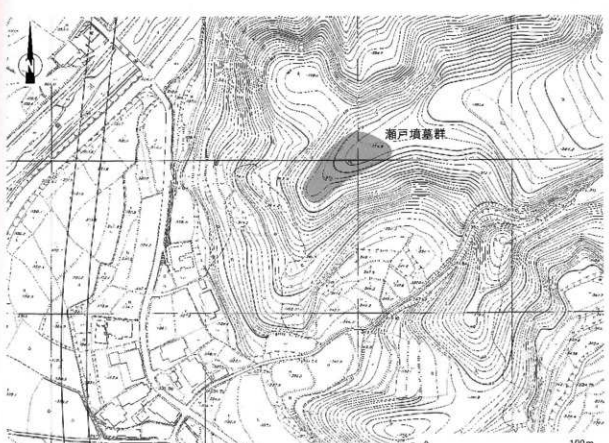
Ⅲ．瀬戸墳墓群

1．歴史的環境

瀬戸墳墓群は玖珠盆地北部の玖珠川の一支流である森川東岸375ｍの丘陵頂部にある。

遺跡の立地する丘陵は岩屑岳より南西に延びる丘陵の先端部で眼下に盆地の谷部を望み、盆地の平坦地との比高差は約40ｍを測る。この墳墓群の周辺の遺跡としては、森川を挟んで南西側の丘陵上には獣帯鏡片を副葬し主体部が箱式石棺である名草台石棺群が所在し、同丘陵斜面部には玄室奥壁に朱彩による円文等を描いている鷹巣横穴墓群がある。また、丘陵間の低地部においては弥生時代終末～古墳時代初頭の水田・水路や住居跡を検出した祇別当遺跡がある。

玖珠盆地全体の古墳時代の様相は、近年、陣ヶ台遺跡や瀧ノ原古墳の調査によって古墳時代前期の様相が次第に明らかになりつつある。玖珠盆地は地形的な条件で玖珠盆地東部（四日市台地周辺）、同中央部（陣ヶ台周辺）、森川流域、太田川上流域、玖珠盆地西部の６小地域に分けられそれぞれの地域ごとにその特徴が認められる。まず、弥生時代終末前後に盆地中央に小竪穴石棺群が出現する。この石棺群はめぼしい遺物の出土はなく突出した特定個人は認められない。ついで、弥生時代終末～古墳時代初頭にかけて森川周辺に名草台千人塚古墳を中心とした名草台石棺群が出現する。この墳墓群の実態はあまり明確でないが、獣帯鏡片を副葬した大型石棺を中心に石棺墓群が展開したものと推定され、突出した特定個人が認められ、玖珠盆地内の有力首長がこの地域に発生したことが解る。また、玖珠盆地西部地域で瀧ノ原古墳が認められる。このように見ていくと玖珠盆地では北部と西部から古墳時代の始まりが認められる。ついで、４世紀末から５世紀前半にかけては盆地中央に陣ヶ台方形周溝墓群、盆地東部におごもり方形周溝墓群などが認められ、盆地内の首長権がこれらの地域に移動したことが解る。５世紀中頃～６世紀前半前後についての古墳の動向はあまり明確でないが盆地中央の船岡山古墳では珠文鏡や陶



第１図　瀬戸墳墓群周辺地形図

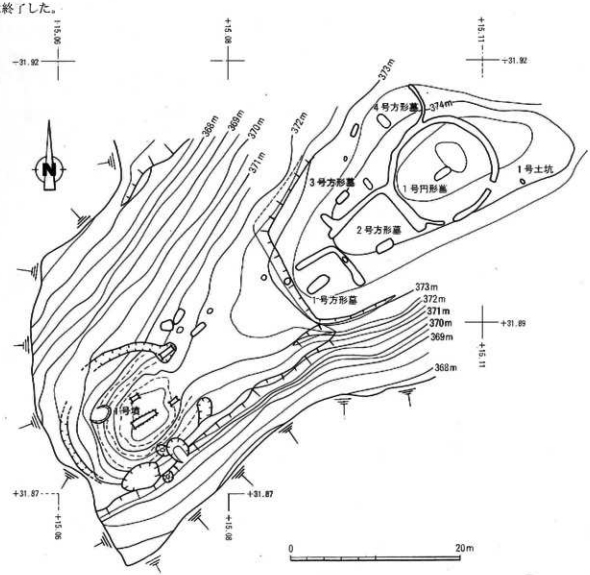
質土器の高坏が出土したと伝承されていたり、東部には墳輪を持つ前方後円墳である亀都起古墳が存在することなどから６世紀前半頃まではこの地域に首長権が継続していたと想定される。さらに６世紀後半から７世紀初頭にかけては盆地西部に鬼塚古墳と駅東横穴墓群、森川地域に鬼ヶ城古墳と鷹巣・四日市上ノ原横穴墓群などの装飾を持つ横穴式石室と装飾横穴を含む横穴墓群で構成される地域が２地域で認められることから盆地内ではこの時期に２大勢力があったことを示している。

なお、これら古墳群の集落としては、盆地西部に６世紀後半の原田遺跡や小田遺跡などが認められる。しかしながら総じて古墳に対応する集落の発見は少なく今後の調査の課題となろう。

２．調査の概要

本古墳群の調査は、1991年（平成３年）の５月に用地買収が終わり、周辺の立ち木処理が終わった時点で分布調査を行った結果、丘陵の先端部で円墳状の高まりが認められた。そこで、梅雨明けの８月５日から墳丘測量に入り、同月に１号墳の確認トレンチ調査を行った。その結果１号墳の主体部が盗掘を受けた竪穴式石室であることが確認された。そこで丘陵全体の表土を剥ぎ遺構の検出を試みた。その結果丘陵東側で円状あるいは円形の周溝を持つ区画墓が検出された。その後、９月に入ると日本道路公団の工事計画上、弥生時代の高地性集落である白岩遺跡などの調査を行ったためこの遺跡の調査は一時中断した。

翌1992年（平成４年）の４月７日から調査を再会し、１号墳１～３号主体部の調査、周溝および周溝内の石棺や周辺土壙墓等の調査、２～６号区画墓の主体部および周溝の調査を行い1993年（平成５年）３月30日に調査は終了した。



第２図　瀬戸墳墓群遺構配置図

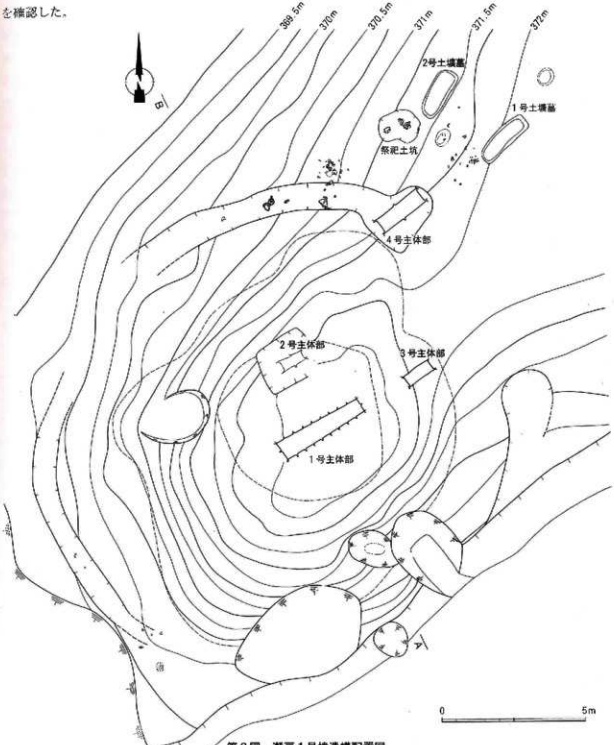
3．調査の成果

a．瀬戸１号墳

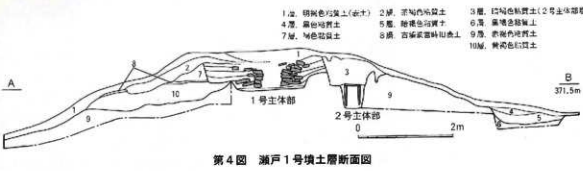
イ）墳丘

１号墳は、南西に延びる舌状丘陵の先端に位置する。丘陵先端部の南側は後世の削平を受けておりこの部分の周溝は検出できなかった。周溝は墳丘の北部と西部のみで確認され、その規模は最大幅 1.2 m、最大深さ 0.9 m を測る。周溝の規模から推定して本古墳は径 18 m前後、高さ 2.5 mの円墳状を呈するが北東部の墳裾をバチ状に地山成形しているところから古式の前方後円墳の可能性も捨てきれない。

主体部は、墳丘状に竪穴式石室１基、箱形石棺２基、周溝北側で箱形石棺１基が検出された。また、周溝北側のさらに北側で土壙墓２基、祭祀土坑１基、ピット２基が集中する遺構群とその周辺において土師器片集中個所を確認した。



第３図　瀬戸１号墳遺構配置図



第４図　瀬戸１号墳土層断面図

ロ）１号主体部

１号主体部は墳頂中央をわずかに北東によった位置に構築されている竪穴式石室である。石室は墳丘上の土層から掘り込まれた赤褐の土壌内に構築されている。

墓壙は上縁で長辺４.５m、短辺２.３m、下縁で長辺４.２m、短辺２.０mの隅丸長方形を呈している。

石室は主軸方向をＮ３５°Ｅにとり、内法は長さ３４０cm、東端幅６０cm、西端幅７５cmと頭位にあたる西端幅が若干広い。石室東西端のレベルは、壁体上面と石室床面のいずれにおいても約５cmの差で北側が高くなっている。石室の形態的な特徴としては、幅が狭いこと、高さが低いこと、西側小口が弧状に外側に張り出すこと、持ち送りがあまり顕著でないことなどが指摘できる。蓋石は盗掘によってほとんど散失していた。唯一、主体部東側で長さ１５０cm、幅３０cm前後の大形の蓋石が検出されたが原位置は留めてない。蓋石裏面には赤色顔料が塗布されている。

壁体の構築はまず頭位側の小口に３枚の板石を、足位側小口に６枚の板石を決め板石の小口を石室面にそろえて足位側から両側壁を並べるが、小口隅では小口石の端に側壁石の端がかかる。石室の壁体を構成する石材には赤色顔料の付着が認められる。顔料は壁面から奥深い部分まで付着している例があり、石室構築後にハケなどで一様に塗布しただけとは考えがたいところから、石材を積み上げる時点ではすでに顔料を付けていたものと考えられる。

石室壁体の石は側壁の一部をのぞいて最上段まで残存している。使用石材は安山岩であり、これは岩屋岳に露頭しており、近傍からの供給と考えられる。

この石室でいま一つ注目したいのは、石室の壁体から約３０cm外側に離れた位置でちょうど石室の輪郭を縁取るように長軸４０～６０cm程の扁平な石が並べられている点である。この石列は主体部壁体より３０cm程高く積み上げている。これは、レベル的に見て天井石を取り巻くように並べていたと推定される。石列は西側小口部には認められなかったが、すでに削平に伴って取り去られた可能性が高い。

なお、石室内の調査では木棺などの痕跡は確認できず、遺体は直葬されたものと考えられる。

石室床面には黄灰色粘土を用いて造った粘土床がある。その規模は長さ３２０cm、西端幅約８０cm、東端幅約６０cmを測る。粘土床上には厚さ４cm前後の赤色顔料を塗布している。この粘土床の縁が壁体下部まで延びている。石室内は前述したように攪乱を受けており、遺物の出土は少ないが、栗玉・管玉・小玉・鉄鏃・鉄剣・刀子などが確認できた。棺中央の北側壁付近で柳葉形の鉄鏃が１本先端部を足位方向に向けた状態で検出した。

出土遺物は第９～１１図に示した。出土土器は中世のものと思われる土師器皿が撹乱土中から出土している。第９図の９は本来の石室に伴うものであると考えられるが、１５・１６は中世期の山城造作に伴う遺物と考えられる。

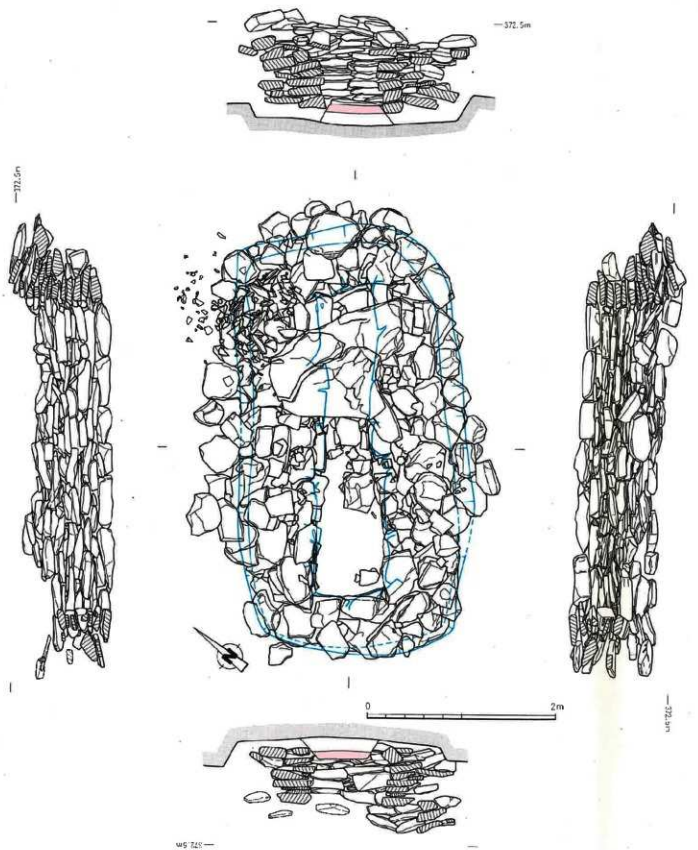
鉄器は鉄剣のみ腐食が著しく図化できなかったが、図化できるものは、第１０図１～４・６に示した。鉄器はいずれも石室壁付近からの出土であり、玉類の出土地点は明確でない。

ハ）２号主体部

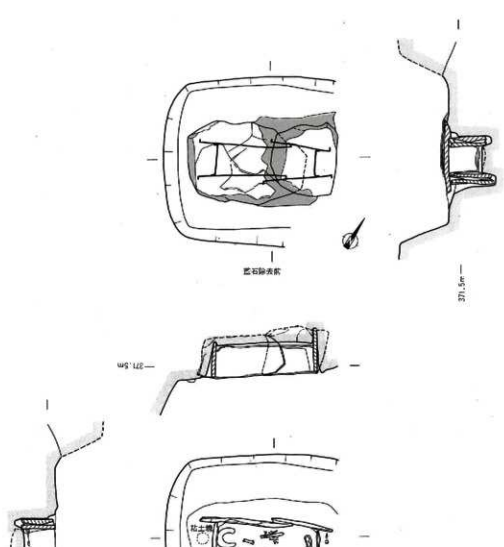
内部構造は、墳丘頂中央をわずかに北側によった位置（１号主体部の北側）に構築されている箱形石棺である。石棺は１号主体部を覆った墳丘墳の上層から掘り込まれた赤褐の土壌内に構築されている。（第４図参照）

墓壙は上縁で長辺４.５m、短辺２.３m、下縁で長辺４.２m、短辺１.５mの隅丸長方形を呈している。墓壙内には赤色顔料、白色粘土、黄褐色土の混じった土が填っていた。

石棺は、蓋石が幅７５cm、長さ７０cm、厚さ３cmのものと幅８５cm、長さ１３０cm、厚さの３cmの安山岩製板石２枚を



第５図　瀬戸１号墳１号主体部平面・断面図



第６図　瀬戸１号墳２号主体部平面・断面図

南西側から順に積み重ねるいわゆる鏡重状態のものである。棺は、６枚の肉厚な板状の石を側壁に２枚ずつ、両小口壁に１枚ずつたて並べていた。両側壁は、２枚の大型の板石を合わせている。南東側接合部付近にはやや小型の板石を２枚裏から組み込ませていた。全体にやや内傾して立っていた。両小口の石は、側石の内側に組み込まれ岩盤に安定する。棺床は白色粘土で構成されその上面全体を赤色顔料で塗布している。なお、棺蓋裏、棺内面全体にも赤色顔料を塗布しているのが認められた。棺内内法は、長軸長106cm、最大幅32cm、深さ34cmを測る。棺中央南西側に白色粘土で逆U字状の粘土枕を敷設している。

この主体部は、盗掘等の撹乱を受けた痕跡はなく、蓋石を開けた時、その内部は赤色顔料の鮮やかな朱色が目立った。遺物は木質の柄が完全に残っている鉄剣の基部及び剣身部が離れて、中央やや北西側寄りから出土した。これらはその出土状況から剣を関節で真っ二つに折り、剣身を左手先端付近に剣茎を胸付近に置いていたもので

あると考えられる。また、右手首付近で碧玉製管玉1個とガラス製小玉2個、右足首付近よりガラス小玉1個をそれぞれ検出した。

出土遺物は第10・11図に示した。第10図8は木製杷にきちんと挿入されているのでX線写真で法量を推定した。茎長6.2cm、茎幅1.2～1.5cmを測り、2個の目釘穴を持つ。関部は鈍角に開いている。木製杷はほぼ完全に残っており、一本で細かい細工を用いて作っている。全長11.8cm、柄頭最大幅3.4cm、中央幅1.6cm、柄縁幅3.0cm、断面は桃種状を呈している。内側面に長さ7cm幅0.7cmの透穴が認められる。本来これは茎を挿入するため木内部を刳り貫くために作られたもので最終的にはこの穴に埋木がなされている。この杷にも布痕が認められ吉松茂信の同定[21]では杷木の上に木綿（ユウ）に似た繊維を巻いており部分によっては異なる方向の二重の重なりが認められる。部分的には平絹の付着が認められ各平絹の糸目方向はやや異なるもののほぼ一定方向で同製と考えられる。

また、福田さよこ氏による杷木の樹木同定[22]は広葉樹散孔材であることが判明した。第10図9は全長25.5cm、最大身幅3.5cmを測る。断面観察では鎬がほとんど認められず切先は鋭く尖っている。中央より下方に木製鞘が残存している。鞘の一部に平絹の付着が認められる。古松の同定[23]ではこの平絹は杷に付着したものとは異なることから鞘に付着した平絹は、埋葬時に鞘に巻き付けたものもしくは鞘を装飾するために使用した可能性が考えられる。福田さよこ氏よる鞘木の樹木同定[24]は針葉樹系のものであることが判明した。

ニ）3号主体部

内部構造は、墳丘頂中央をわずかに北東によった位置（1号主体部の北東）に構築されている箱形石棺である。石棺は1号主体部を覆った墳丘盛土の上層から掘り込まれた素掘の土壙内に構築されているが、2号主体部との前後関係は不明である。墓壙は検出面で長辺4.5m、短辺2.3mの隅丸長方形を呈している。墓壙内には白色粘土、黄褐色土の混じった埋土が填っていた。

石棺は、蓋石が幅93cm、長さ156cmの安山岩製板石1枚で覆っている。棺は、4枚の肉厚な板状の石を側壁に1枚づつ、両小口壁にも1枚づつたて並べていた。両側壁はほぼ垂直に立っている。両小口のうち、側石の内側に組み込まれ若干内傾する。棺床は白色粘土で構成され、その上面全体を赤色顔料で塗布している。なお、棺蓋裏、棺内面全体にも赤色顔料を塗布しているのが認められた。棺内内法は、長軸長100cm、最大幅41cm、深さ45cmを測る。南西側小口中央に掘して白色粘土で逆U字状の粘土枕を敷設している。

この主体部は、盗掘等の攪乱を受けた痕跡はなく、蓋石を開けた時、その内部は赤色顔料の鮮やかな朱色が目立った。遺物は棺南西側頭骸骨付近で小型の翡翠製勾玉2個と棺中央の北西側で布にくるまった仿製変形五乳文鏡を検出した。鏡は背面を上面にしており、鏡面には小型の翡翠製勾玉2個が付着していた。

出土遺物は第11・12図に示した。

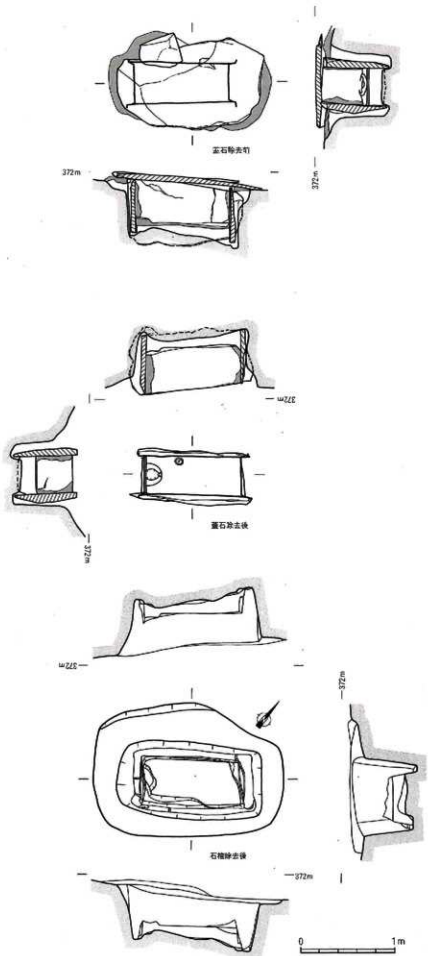
第12図は直径6.0cmの完形銅鏡で鏡縁が若干反っている。銅鏡の文様構成は、中央に円紐、その外に一重珠文帯を巡らす。紐座の外回りに圏帯があってここには5乳を配しその間に「≡‖≡」状の文様を4個所に、「≡‖≡‖」状の文様を1個所に配している。その外側に鋸歯文帯を巡らしその外周が素文平縁の鏡縁となる。各部の法量は、紐径16mm、紐部厚推定4mm、紐孔幅推定5.5mm、紐孔高推定3mm、珠文帯幅3.5mm、乳文帯幅5.2mm、鋸歯文帯幅5mm、縁厚3mmを測る。

鏡は鏡面、鏡背ともに平絹の付着が認められる。吉松茂信氏の同定[25]によると鏡面の繊維の重なりは勾玉付近では2枚の平絹の重なりが、左下方においては4枚の平絹が重なっているのが観察される。また、勾玉の付着層は、2枚の平絹の上に位置し勾玉の穿孔内には10数本の右撚りの糸が穴に通った状況が確認できる。

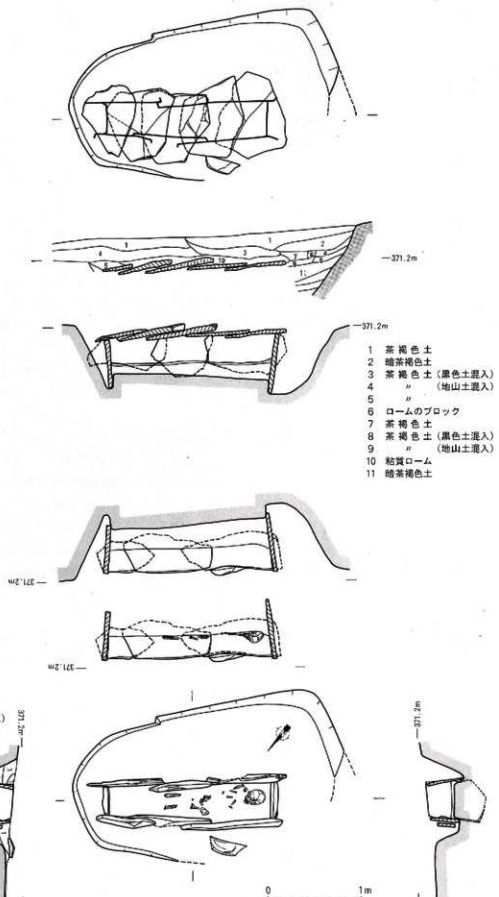
鏡背には2枚の平絹の重なりが認められ、その糸目方向と裂の付着状況から平絹で巾着状に鏡を包んだと考えられる。鏡面の勾玉に使用されているものと同じ手と考えられる糸が鏡背にも一部に付着している。元来、糸が連続しているものと仮定すれば、これは巾着の口を糸で絞るために用いたと考えられ、勾玉はその飾りとしていたと推定される。

ホ）4号主体部

内部構造は、墳裾北側周溝内の東端部に構築されている箱形石棺である。石棺は周溝の埋土上層から掘り込ま



第７図　瀬戸１号墳３号主体部平面・断面図



第８図　瀬戸１号墳４号主体部平面・断面図

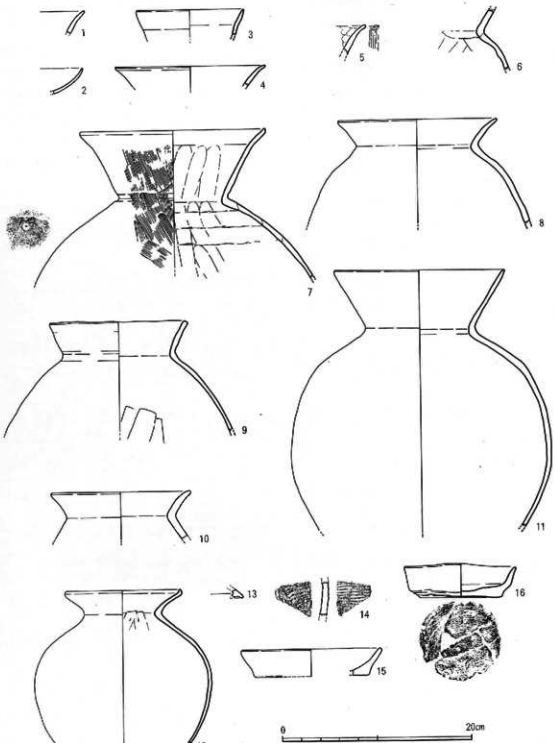
れた墓壙の土壙内に構築されている。墓壙は上縁で長辺 3.1m、短辺 1.7m、下縁で長辺 2.7m、短辺 1.6mの隅丸長方形を呈している。墓壙内には白色粘土、黄褐色土の混じった埋土が填っていた。

石棺は、蓋石が幅 75 ～ 90cm、長さ 55 ～ 80cmの安山岩製板石 4 枚を南西側から順に積み重ねているいわゆる鎧直状態のものである。棺は 6 枚の肉厚な板状の石を側壁に 3 枚づつ、両小口壁に 1 枚づつたて並べていた。両側壁は 2 枚の大型の板石を合わせている。東南側接合部付近にはやや小型の板石を 2 枚裏から組み込ませていた。全体にやや内傾して立っていた。両小口の石は、側石の内側に組み込まれ岩千内傾する。棺床は白色粘土で構成されその上面全体を赤色顔料で塗布している。なお、棺蓋裏、棺内面全体にも赤色顔料を塗布しているのが認められた。棺内内法は、長軸長 170cm、最大幅 40cm、深さ 25cmを測る。南西側小口中央に接して白色粘土で逆U字状の粘土枕を敷設している。

この主体部は、盗掘等の攪乱を受けた痕跡はなく、蓋石を開けた時その内部は赤色顔料の鮮やかな朱色が目立った。遺物は出土していないが、1 体分の人骨が確認できたため九州大学の田中良之・金宰賢両氏に取り上げ・鑑定を依頼し、その分析結果は別項付論のとおりである。

表 1　瀬戸 1 号墳出土土器観察表

遺構番号	写真図版番号	出土地点	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴最大径 ・底径 ・( )は復元値	形態の特色	技法の特色	色調	胎土	焼成	備考
第 9 図 1	—	3 号主体部	土師器甕	・— ・— ・—	口縁部は外反しながらナナメ上方にのび、端部は若干面を持つ。	内外面とも横ナデおり、器面調整は不明である。外面に黒斑あり。	黒褐色	赤関石・白色砲を多く含み、長石、茶色粒を若干含む。	良好	
第 9 図 2	—	3 号主体部	土師器甕	・— ・— ・—	口縁部に内反しながらナナメ上方にのび、端部は丸る。	内外面とも横ナデおり、器面調整は不明である。	黄褐色	茶色粒・白色粒を多く含み、長石・角閃石を若干含む。	良好	
第 9 図 3	—	3 号主体部	土師器甕	・(11.6cm) ・— ・—	口縁部は内反しながら上方にのび、端部は丸く仕上げる。	内外面とも横ナデおり、器面調整は不明である	明茶褐色	角閃石・白色粒を多く含み、長石・茶色粒を若干含む。	良好	
第 9 図 4	—	3 号主体部	土師器甕	・(16cm) ・— ・—	口縁部は外反しながらナナメ上方にのび、端部は上方に丸る。	内外面とも横ナデおり、器面調整は不明である	灰茶褐色	石英・角閃石・白色粒を多く含み、長石・茶色粒を若干含む。	良好	口縁内面に炭素の吸着が見られる。
第 9 図 5	—	3 号主体部	土師器甕	・— ・— ・—	口縁部は外反しながらナナメ上方にのび、端部は丸く仕上げる。	内面にナナメ方向のヘラミガキ、外面にタテ方向のミガキ、口縁部内面にヨコ方向のヘラミガキがみられる。	暗赤色	角閃石を多く含み、石英を若干含む。	良好	
第 9 図 6	—	1 号主体部	土師器甕	・— ・— ・—	口縁部は外反しながらナナメ上方にのびる。	胴部内面にはナナメ方向のヘラケズリが顕著であるが、その他は斜横ニケズリ、胴部調整は不明である。外面に黒斑あり。	黄褐色	長石・茶色粒・白色粒を多く含み、角閃石を若干含む。	良好	
第 9 図 7	図版 9 2	4 号干板部北側	土師器甕	・(29.4cm) ・— ・—	口縁部は外反しながらナナメ上方にのび、端部は上方に丸る。	内面にナナ方向の指ナデ痕が見られ、外面にナナメ方向のハケ目が残る。若干外面に煤が付着する。器面調整できる。	黄褐色（外面）黒灰色（内面）	長石・茶色粒・角閃石・白色粒を多く含む。	良好	口縁外面煤付着が顕著に確認付着である。
第 9 図 8	図版 9 4	西側周溝	土師器甕	・(16.8cm) ・— ・—	口縁部は外反しながらナナメ上方にのび、先端はやく仕上げる。長胴器形は若干面取りをもつ。	内外面とも横ナデおり、器面調整は不明である。	淡黄褐色	長石・赤関石・白色粒を若干含む。	良好	
第 9 図 9	図版 9 5	北側周溝	土師器甕	・(14.8cm) ・— ・—	口縁部は直線的にナナメ上方にのび、端部は面を持つ。精製器形は若干内傾をもつ。	内外面とも横ナデおり、器面調整は不明であるが精製部内面にタテ方向のヘラケズリが見られる。	淡黄褐色	長石・角閃石・白色粒・茶色粒を多く含む。	良好	口縁部内面に黒斑が見られる。
第 9 図 10	—	西側周溝	土師器甕	・(14.8cm) ・— ・—	口縁部は外反しながらナナメ上方にのび、端部は丸く仕上げる。	内外面とも横ナデおり、器面調整は不明である。	淡褐色	長石・角閃石・白色粒・茶色粒を多く含む。精製を赤雲に多く含む。	良好	
第 9 図 11	図版 9 1	南西側周辺遺物	土師器甕	・(18cm) ・— ・(27cm)	口縁部は実線的にナナメ方にのび、端部は丸く仕上げる。	内外面とも横ナデおり、器面調整は不明である。	淡黄褐色	長石・角閃石・白色粒・茶色粒を多く含む。精製を若干含む。	良好	
第 9 図 12	図版 9 3	北側周溝	土師器甕	・(12cm) ・— ・(19cm)	口縁部は3号主体にナナメ上方にのび、端部は上に突っ立る。	内外面とも横ナデおり、胴部調整は不明である。胴部内面にタテ方向のヘラケズリがみられる。胴部外面下半に黒斑がみられる。	淡黄褐色	石英・茶色粒を多く含む。細砂系粒子に多く含む。長石・角閃石を若干含む。	良好	
第 9 図 13	—	1 号主体部埋土中	須恵器甕	———	———	内外面とも回転ナデ。	暗灰色	精選されている。石英を含む。	良好	
第 9 図 14	—	1 号主体部埋土中	須恵器壺	———	———	外面にタテ方向のタタキの後ヨコ方向のカキ目が施されている。内面に同心円文当ての良跡の上からナナ消しが施されている。	暗灰色	精選されている。	良好	
第 9 図 15	—	1 号主体部埋土中	土師質坏	・(15cm) ・(3cm) ・—	———	体部内外面に同転ヨコナデが施されている。底部外面には回転糸切り痕が残る。	淡褐色	砂粒を若干含む。	良好	
第 9 図 16	図版 9 6	1 号主体部埋土中	土師質坏	・(12cm) ・(3.5cm) ・—	底部から体部にかけて底状をなし、未調整である。	底部外面には回転糸切り痕が残る。底面内面は指ナデ状を呈する。	明黄褐色	砂粒を多く含む。	良好	



第９図　瀬戸１号墳出土土器実測図

へ）北側周溝

墳丘の北側部分に長さ約８ｍ、最大幅 1.2 ｍ、最大深さ 0.9 ｍを測る周溝が巡る。北側周溝の東端は、１号墳から東北方向に伸びる尾根を掘削せず、４号主体部の位置で終わり、また、西南端は次第に浅くなり消滅する。１号墳は中世に山城造成により、部分的な墳丘の削平が行われているが、墳丘レベルから見て、その際に墳丘の削平に伴い周溝が削平消滅した可能性も考えられる。

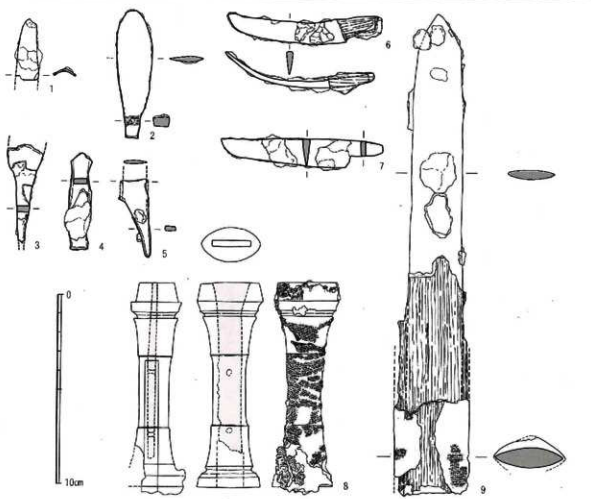
出土遺物は土器・鉄器が確認できたが、図化できるものは第９・10 図にあらわした。

ト）西側周溝

墳丘の西側部分に長さ約７ｍ、最大幅 0.8 ｍ、最大深さ 0.55 ｍを測る周溝が巡る。西側周溝の両端は、次第に浅くなり消滅する。特に、南側の消滅部分は地形を平坦な段状に整地していることから、本来から溝は作られていなかったものと考えられる。山土遺物は土器が確認できたが、図化できるものは第９図にあらわした。

表２　瀬戸１号墳出土鉄器観察表

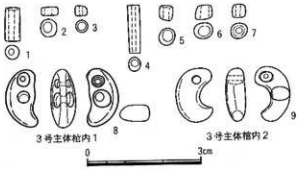
挿図番号	写真図版番号	器　種	全長（）は残存長	頭部長（刃部長）	刃　幅	頭　幅	刃部厚	背　厚	備　考
第10図1	――	ヤリガンナ	(3.2cm)	―	1.2cm	―	0.1cm	―	1号主体部
第10図2	図版９－６	鉄鏃	(6.7cm)	5.5cm	1.9cm	0.8cm	0.3cm	0.4cm	1号主体部
第10図3	図版９－４	鉄鏃	(5.2cm)	―	―	0.9cm	―	0.3cm	1号主体部
第10図4	――	ヤリガンナ？	(5.1cm)	―	―	0.8cm	―	0.3cm	1号主体部
第10図5	図版９－３	鉄鏃	(4.1cm)	―	―	0.5cm	0.2cm	0.25cm	1号墳西側周溝
第10図6	図版９－１	刀子	8.2cm	6.3cm	1.3cm	0.8cm	0.4cm	0.25cm	1号主体部 柄の木質が残る。刃部を敢盲に曲げている。
第10図7	図版９－２	刀子	8.6cm	6.8cm	1.5cm	0.8cm	0.4cm	―	1号方形墓主体部
第10図8･9	図版８	鉄剣	37.3cm	25.5cm	3.5cm		0.5cm		関部で人工的に割る



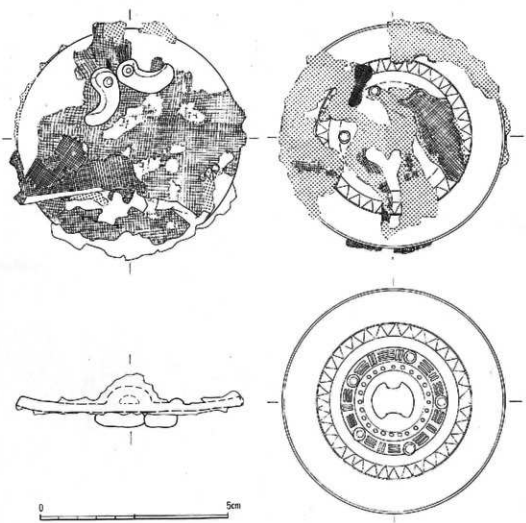
第10図　瀬戸１号墳出土鉄器実測図

表３　瀬戸１号墳出土玉類観察表

挿図番号	写真図版番号	出土地	種　類	材　質	色　調	全長（mm）	直径（mm）	孔形（mm）	備　考
第11図1	図版８－３	１号主体部	管玉	碧玉	淡緑色	9	4	1.3	両面穿孔
第11図2	図版８－５	１号主体部	小玉	ガラス	スカイブルー	2	4.5	2	
第11図3	図版８－６	１号主体部	臼玉	ガラス	スカイブルー	2.5	3	2	
第11図4	図版８－４	２号主体部	算玉	碧玉	淡緑色	13	3	1	
第11図5	図版８－７	３号主体部	小玉	ガラス	スカイブルー	4	4	2	
第11図6	図版８－８	２号主体部	小玉	ガラス	スカイブルー	4	3.5	2	
第11図7	図版８－９	２号主体部	小玉	ガラス	スカイブルー	3.5	3.5	2	
第11図8	図版８－１	３号主体部	勾玉	碧翠	淡緑色	15	―	1.2	２孔あり
第11図9	図版８－２	３号主体部	勾玉	碧翠	淡緑色	14	―	1	両面穿孔

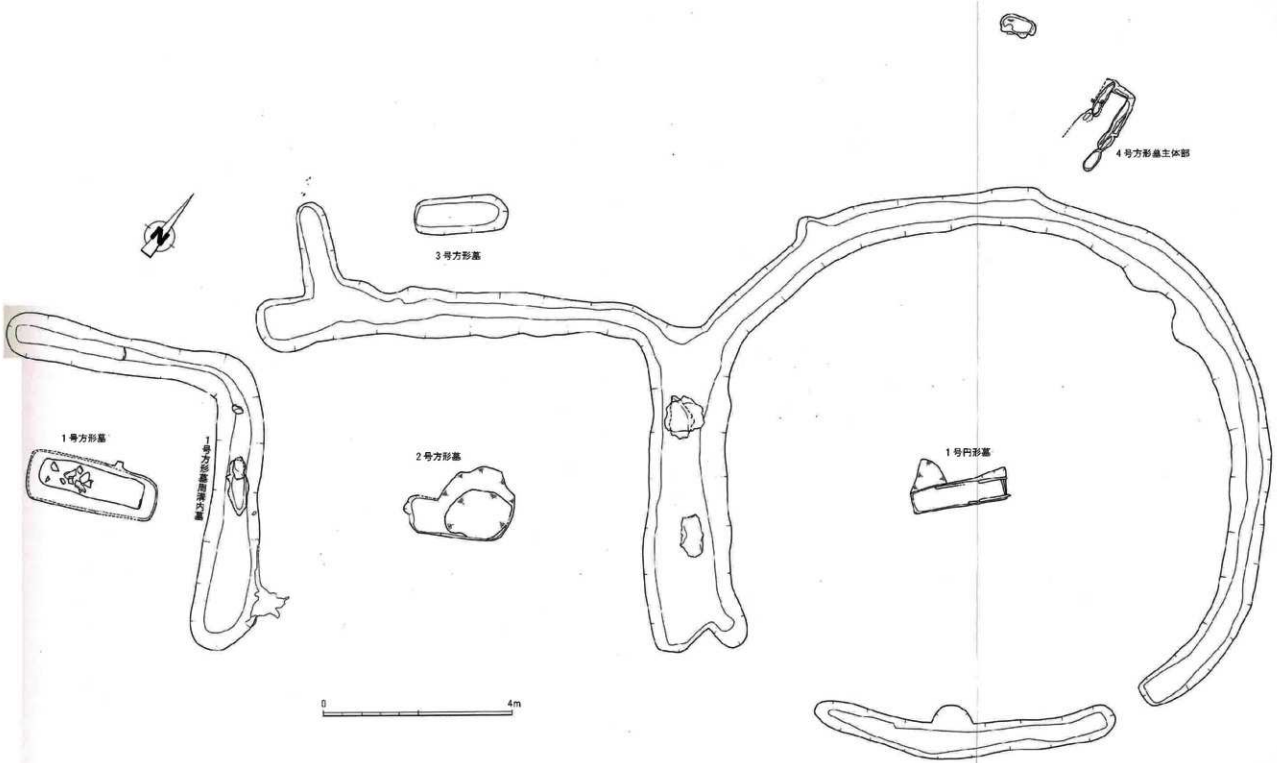


第11図　瀬戸1号墳出土玉類実測図
（1～3、1号主体部　4～7、2号主体部　8～9、3号主体部）



第12図　瀬戸1号墳3号主体部出土銅鏡実測図

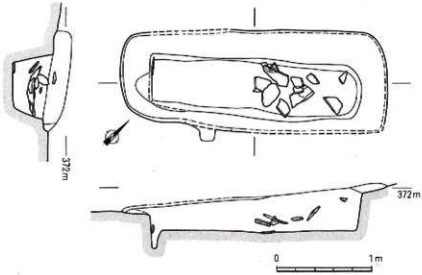
第13図　瀬戸1号墳墳丘出土遺物実測図



第14図　瀬戸墳墓群方形墓・円形墓遺構配置図

b．墳墓群

1号墳の尾根上方に円形・方形の低墳丘墳墓が5基確認できた。最高位に円形周溝を持つ石棺墓があり、周溝を共有する形で4基の方形墓が低位部分にのびている。最も低位に位置する1号方形墓については1号墳方向を段切り状に削平し、その段下にベンガラピットが1基見られる以外は、1号墳との間に遺構は確認できない。なお、1号円形墓の東側に1基土坑が確認でき、1号方形墓の東側斜面部において土器が1点出土した。

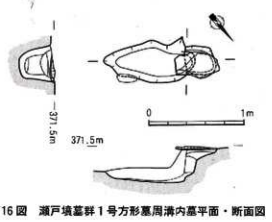


第15図　瀬戸墳墓群1号方形墓主体部平面・断面図

イ）1号方形墓

1号墳の北東20mの所に位置する。北西側と北東側に長さ5.5m、幅0.5m、深さ5～65mの溝が北側にL字状を呈している。北東側周溝内に安山岩板石の蓋石を持つ土壙墓が検出されている。

主体部は土壙墓であり、土壙内に安山岩板石の砕片が見られるため、石蓋土壙墓であった可能性が高い。墓壙は上縁で長辺2.8m、短辺1.1mの隅丸長方形を呈している。土壙は長辺2.35m、短辺0.63m、深さ0.4mの隅丸長方形を呈している。西南側小口部には板石あるいは木板を填めたものと考えられる痕跡が残る。なお、主体部からガラス製小玉1点が出土した。



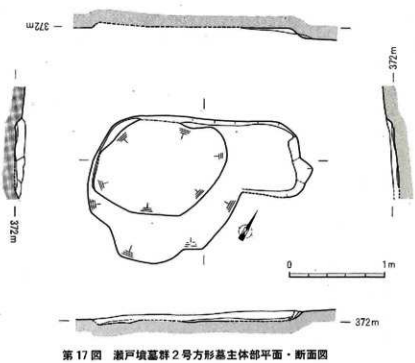
第16図　瀬戸墳墓群1号方形墓周溝内墓平面・断面図

ロ）2号方形墓

1号方形墓の北東側にほぼ軸を同じにして位置する。1号方形墓同様に北西側と北東側にL字状の溝を掘っている。南西～北東に延びる溝は長さ7.0m、幅1.0m、深さ0.25mで、溝北東肩は1号円形墓の南西側溝によって切られている。東南～北西にのびる溝は長さ8.0m、幅0.5m、深さ0.3mを測る。

ハ）3号方形墓

2号方形墓の北西斜面部に位置する。周溝は南東側を2号方形墓と共有する形で存在し、また、南側部分において、長さ2mのみ確認できた。



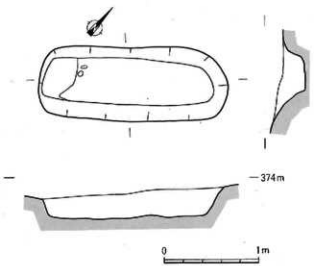
第17図　瀬戸墳墓群2号方形墓主体部平面・断面図

主体部は１基で隅丸長方形の土壙で主軸は、南西～北東方向である。土壙上面は削平を受けており、土壙は長辺2.05m、短辺１m、深さ23cmを測る。なお、主体部からの遺物の出土は見られなかった。

ニ）４号方形墓

１号円形墓の北西斜面部に位置する。周溝は南東側を１号円形墓と共有する形で存在し、また、北側部分において、長さ８mが確認できた。

主体部は１基でそのほとんどが削平されており、底部の石棺棺材抜き取り痕のみ確認できた。主軸は、南西～北東方向である。土壙上面は削平を受けており、石棺棺材抜き取り痕から観察できる石棺内法は、長辺170cm、短辺40cmを測る。なお、主体部からの遺物の出土は見られず、棺材片の安山岩板石の砕片が確認できた。

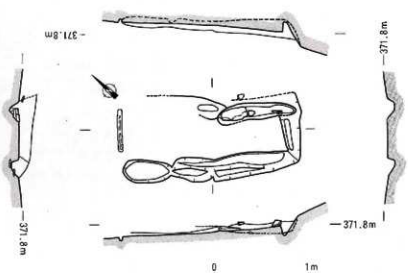


第18図　瀬戸墳墓群３号方形墓主体部平面・断面図

ホ）１号円形墓

周溝を連続させる墳墓群の最も高位に位置する。円形の周溝は幅約１m、深さ40cmを測る。周溝内は径10.8m、高さ50cmの低墳丘を持つ円墳状を呈する。

主体部は１基でそのほとんどが削平されており、土壙底部と石棺棺材抜き取り痕のみ確認できた。主軸は、南西～北東方向である。土壙上面は削平を受けており、石棺棺材抜き取り痕から観察できる石棺内法は、長辺190cm、短辺35cmを測る。なお、主体部から棺材片の安山岩板石の砕片が確認できたほか、ガラス製小玉８点が出土し、第23図に示した。



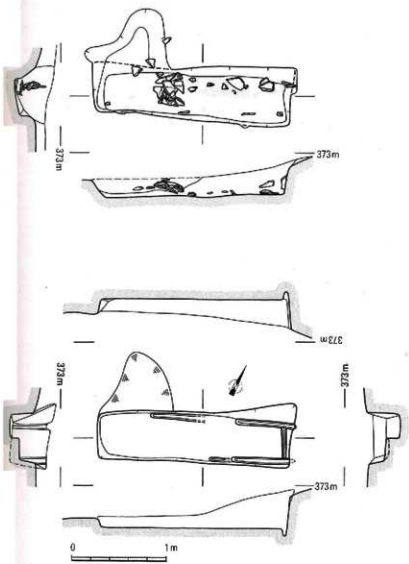
第19図　瀬戸墳墓群４号方形墓主体部平面・断面図

ヘ）１号土坑

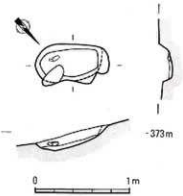
１号円形墓の３m東から土坑 が１基検出できた。長辺80cm、短辺40cm、深さ12cmを測る楕円形土坑であるが、その機能は明らかにできなかった。

表４　瀬戸墳墓群出土土器観察表

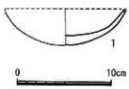
挿図番号	写真図版番号	出土地点	器種	法量	形態の特色	技法の特色	色調	胎土	焼成	備考
第22図1	図版9-7	1号方形墓	土師器椀	―	丸く内湾し、上方にのびる。	内外面とも底離しており、器面調整は不明である。	茶褐色	角閃石・長石・石英・白色粒を多く含み、砂粒を非常に多く含む。	良好	



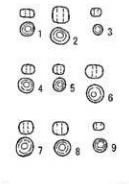
第20図　瀬戸墳墓群1号円形墓主体部平面・断面図



第21図　瀬戸墳墓群1号土坑
平面・断面図



第22図　瀬戸墳墓群出土土器実測図



第23図　瀬戸墳墓群出土玉類実測図

表5　瀬戸墳墓群出土玉類観察表

挿図番号	写真図版番号	出土地	種類	材質	色調	全長 (mm)	直径 (mm)	孔形 (mm)	備考
第23図1	図版8－10	1号方形墓	管玉	ガラス	スカイブルー	2	3.5	1.5	
第23図2	図版8－14	1号円形墓	小玉	ガラス	スカイブルー	4.5	5	1.2	
第23図3	図版8－17	1号円形墓	棗玉	ガラス	スカイブルー	2.2	3	1.5	
第23図4	図版8－15	1号円形墓	管玉	ガラス	スカイブルー	3	4	1	
第23図5	図版8－18	1号円形墓	棗玉	ガラス	スカイブルー	2.8	3	0.8	
第23図6	図版8－11	1号円形墓	小玉	ガラス	スカイブルー	4	5	1	
第23図7	図版8－12	1号円形墓	小玉	ガラス	スカイブルー	4	5.2	1.7	
第23図8	図版8－13	1号円形墓	小玉	ガラス	スカイブルー	3.5	4	1.8	
第23図9	図版8－16	1号円形墓	丸玉	ガラス	スカイブルー	2	4	1.3	

4．ま と め

1）瀬戸墳墓群出土土器について

瀬戸古墳群は、低丘陵上に1基のマウンドを持つ古墳と5基のほとんどマウンドもたない墳墓で構成されている。この内で土器の出土した地点は、1号墳北東側・南側周溝およびその周辺や3号土体部周辺である。ここでは土師器壷、甕、鉢、埦などが出土している。

玖珠盆地における土師器の編年は、近年坂本嘉弘によってなされている[25]。これでは、古墳時代前期の土器を古墳時代初頭、4世紀代、5世紀代の3期に分け編年を行っている。これを参考に1号墳出土土師器を検討すると土器組成に鉢、埦などが出土していることから坂本編年の古墳時代初頭に位置づけている。鉢や埦の素朴を引くものと考えられる。しかしながら底部やセレンズ底で表面調整に叩き痕のある長胴甕は認められずこの時期より新しいものである。では、坂本が4世紀代に設定された土器群と比較してみると小型丸底壺や長頸壺などが認められないことや瀬戸1号墳の土器には跳ね上がり口縁を呈す甕が認められること。この形態の土器は、近畿地方の庄内式新段階あるいは布留式古段階に比定されるものである。また、これは田中裕介の土師器編年[26]小迫辻原4期に比定されるものである。また、現時点でこの期の絶対年代を示すならば3世紀末～4世紀初頭前後と推定される。

2）瀬戸墳墓群の性格とその変遷

瀬戸古墳群は、前述したように大きくは次の二つのグループに分けることができる。すなわち、1号墳＋1・2号土壙墓と2～6号区画墓とに分けられる。この空間的グループピングが時間的同時性を満たすかどうかは2～6号区画墓よりほとんど土器が出土していないため不明な部分が多い。しかしながら、1号墳周溝南側で土師器壷および甕がそれぞれ1点ずつ周溝北側で土師器直口壷、壷、甕などが3号主体部周辺で土師器埦および鉢がそれぞれ1点ずつ出土している。また、E3区のボ色顔料の詰まったピット周辺より土師器埦が出土している。さらに1号墳北側の祭祀土坑や4号周溝、3号周溝と1号円形墓が共有する溝より土師器が若干出土したが図示できなかった。これらの土師器は前述したように近畿地方の庄内式新段階あるいは布留式古段階に並行する土器群であり、時間的にはほぼ同時期のものと考えられる。とすれば1号墳＋1・2号土壙墓と2～5号区画墓＋1号円形墓はほぼ同時に存在していた可能性は高く、出土遺物の検討からこの墳墓群は1号墳を中心にして造られた墳墓群であることが解る。さらに、平面空間的に見れば1号墳と1号区画墓との間にバチ形に開く空間がありその先端に赤色顔料の詰まったピットが認められる。この平面地形がほぼ旧状を保っているとすれば1号墳は全長50m前後の前方後円墳であった可能性は大きい。このような墳墓のあり方は、大分県内では、九州最古の前方後円墳の一つである赤塚古墳を含む川部高森古墳群と同様であり、時期的にも赤塚古墳および周辺の方形周溝墓と近似している。

3）主体部と副葬品からみた墳墓群の被葬者について

瀬戸墳墓群では、1号墳を中心に墳墓群は形成されるがその主体部についてもバラエティーに富んでいるとともに副葬品ともに考え合わせると被葬者の性別や階層を考える上で有効である。また、1号墳における主体部の築造順位は、1号主体→2・3号主体の順で3号主体の周辺から3世紀末～4世紀初頭の土器が出土しており、少なくとも1号墳の主体部全部は前述した時期に成立したものであろう。

このうち1号墳の中心主体部（1号主体）は、内法3.2mほどの竪穴式石室で盗掘を受けていたが、鉄剣、鉄鏃、刀子、ヤリガンナ、碧玉製管玉、ガラス製小玉などの出土品がみられ、鉄鏃の出土からこの被葬者は成人以上の男性と推定される。

副主体部である2号主体部および3号主体部は、長さ1.1mと1.0mを測る箱式石棺である。2号主体部からは、刀身部分と柄部分を意図的に折って副葬した鉄剣と右手首付近に碧玉製管玉ガラス製棗玉などが出土している。石棺の規模から推定してこの石棺の被葬者は小児の可能性が高い。3号主体部の棺内からは、左手上腕骨付

近で翡翠を装飾に用いた袋に入れ経背を表にした小型鏡1面および右首付近で翡翠製の小型勾玉2点がそれぞれ検出された。この石棺の規模あるいは副葬品から見て被葬者は小児女性の可能性が高い。

4号主体部は墳丘北東隅の端部に構築されている箱式石棺で全長1.7mを測る。棺内から副葬品は無く、熟年男性の人骨が検出された。さらに墳丘外の北東側に2基の土壙墓が検出されている。

以上のような主体部の様相からみてやや大型の竪穴式石室を中心として箱式石棺群がその下位の階層として存在するが、そのあり方は副葬品等から推定して瀬戸1号墳では、竪穴式石室の被葬者と石棺墓の被葬者はそれぞれ親子一兄弟のような血縁的親族関係を持つものと推定されよう。また、2・3号主体部の被葬者は主体部内の遺物のあり方から推定してマジカルな力を強く持っているのがその特徴である。4号主体部については1～3号主体部と同族的な関係にありながらより下位の階層のものと推定される。

表6　瀬戸墳墓群出土遺物一覧表

遺構大分類	遺構小分類	出土遺物
1号墳	北側周溝	土師器甕2点
1号墳	南側周溝	土師器甕
1号墳	墳丘	礫石・寛永通宝・土師器甕
1号墳	1号主体部	ヤリガンナ・鉄鏃2点・鉄剣・刀子・管玉・小玉・棗玉
1号墳	2号主体部	鉄剣身・鉄剣柄・管玉・小玉3点
1号墳	3号主体部	土師器甕3点・土師器埦・土師器鉢・銅鏡・勾玉2点
1号墳	4号主体部	土師器甕・人骨1体
1号方形墓	主体部	棗玉
1号方形墓	南西部被土	土師器埦
1号円形墓	主体部	小玉4点・棗玉4点

4）玖珠盆地における古墳の発生期について

今回調査した瀬戸墳墓群は、3世紀末～4世紀初頭に築造されたものであり、これらは玖珠盆地でも最も古いものである。前述したように玖珠盆地の古墳分布の特徴は、坂本が指摘するように(註7)細かくは6地域に分けることができる。この内、最も古い墳墓は名草台遺跡の石棺群で獣帯鏡を副葬した石棺が弥生時代終末（3世紀後半）前後のものである。ついで、3世紀末～4世紀初頭に森川地域に瀬戸1号墳、玖珠盆地西部地域に瀧ノ原古墳がそれぞれ築造される。ともに盆地の縁辺に位置し、瀬戸古墳は院内、安心院方面、瀧ノ原古墳は日出方面への交通の要地にあるのが特徴である。ついで、4世紀中頃～後半になると盆地中央部に陣ヶ台方形周溝墓群が出現するが副葬遺物から見て地域首長クラスのものではない。4世紀末～5世紀前半には四日市地域に名草台千人塚、玖珠盆地東部におごもり方形周溝墓群が出現する。副葬遺物からともに地域首長墳と考えられる。

このように見てくると玖珠盆地における発生期の墳墓は、四日市・森川地域のある森川流域に地域盟主墳が弥生時代後期終末以来認められ、古墳時代初頭に瀬戸1号墳に見られるように初期前方後円墳が出現するのである。

註1　宮内庁正倉院事務所　西藤　清信氏の同定による。
註2　奈良県立橿原考古学研究所　福田　さよ子氏の同定による。
註3　註2に同じ
註4　註1に同じ
註5　坂本　憲弘『陣ヶ台遺跡』　玖珠町教育委員会　1999年
註6　田中　琢介『小迫辻原遺跡』日田市教育委員会　1998年
註7　註5に同じ

なお、鉄剣、銅鏡に付着した布および剣の木質についての同定および保存処理については、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館長景森皎氏ならびに同研究所保存科学研究室長今津節生氏に多大なる協力を得た。

5．付　論

瀬戸１号墳第４主体部出土の人骨

金宰賢・田中良之

1．はじめに

大分県玖珠郡玖珠町瀬戸墳墓群（瀬戸１号墳第４主体部）から人骨が出土し、大分県教育委員会より九州大学文学部九州文化史研究施設比較考古学部門（当時）へ人骨の調査が依頼され、田中が検出から実測・取上げまで、現地で作業を行った。その後、人骨を九州大学へと搬入し、九州大学の組織改編によって同研究施設比較考古学部門が大学院比較社会文化研究科基層構造講座となったことから、本講座において人骨の整理・分析を行った。以下、その結果について報告する。なお、人骨は現在大学院比較社会文化研究科基層構造講座に保管されている。

2．出土状態

石棺からは１体分の人骨が確認された。人骨は頭蓋骨を除き、保存は不良であったが、上・下肢ともほぼ原位置を保った位置関係である。右上肢は、上腕骨と橈骨・尺骨の位置関係からみて回内位で強く腕を曲げた姿勢であり、左前腕骨の位置から見て左上肢も同様であると考えられる。したがって、両手を合わせるようにして胸の前に置いた姿勢であったと考えられる。これに対して、下肢は左右大腿骨の位置関係からみて伸展葬の状態であったと考えられる。

3．人骨所見

人骨の遺存状態は、頭蓋骨が比較的に良好であることに比して、四肢骨は不良である。

まず、頭蓋骨は、上顎骨・口蓋骨・左右頬骨・前頭骨・左右頭頂骨・右側頭骨・右側頭鱗などが認められ、下顎骨は左オトガイ孔を含む下顎体および左筋突起が遺存する。なお、前頭骨は眉弓が発達する。上・下顎骨から確認される残存歯式は次のとおりである。

×	×	M^1	○	○	C	○	I^1	I^1	I^2	C	P^1	P^2	×	×	×
／	／	／	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	×	×	／	／

（凡例）○歯槽開放　×歯槽閉鎖　／欠損　△歯根のみ
・遊離歯　c う蝕

上肢は右上腕骨の近位と左右尺骨の骨体片、左橈骨の骨片が認められ、下肢は左右腸骨・恥骨片と左右大腿骨の骨体遠位部が遺存するくらいである。恥骨片から推定される恥骨下角は小さい。また、上腕骨の三角筋粗面は発達している。

・性別
恥骨下角が小さく、眉弓と三角筋粗面が発達していることから男性と判定される。
・年齢は、歯牙咬耗度が栃原の２°ｂを示すことから熟年以上と推定される。
・特記事項
上顎右第１・２大臼歯、左第１～３大臼歯、下顎左第２小臼歯・第１大臼歯は脱落し、歯槽が閉鎖しているが、表面は多孔質となっており、歯周症によるものと考えられる。

4．考　察

瀬戸古墳の人骨は男性１体のみであり、頭蓋骨のいくつかの計測値・示数でしか比較はできないが、人骨形質のイメージを得るために、あえて比較群の平均値との比較を行ってみた（表２）。

まず、上顔高は65㎜と最も低い一群に近く、頬骨弓幅は144㎜と比較群と比べても最も広いため、コルマン（K）の上顔示数が45.1と最も低い値となる。これに対して、中顔幅は98㎜と小さいが、上顔高じたいが低いため、ウィルヒョウ（V）の上顔示数も66.3と豊後古墳人の平均値と比べてもさらに低く、南九州古墳人や西北九州弥生人との中間の値をとる。

眼窩高34㎜と眼窩幅43㎜は、比較群の中でも大きい値であり、眼窩示数79.1という値は北部九州の群に近い。また、鼻は、比較したどの群よりも鼻高が45㎜と低く、鼻幅もまた30㎜と広い。そのため、鼻示数は45と比較群よりも小さい。

したがって、瀬戸１号墳第４主体部の被葬者は、顔が低くて迫作が小さく、頬骨は張った顔であり、鼻も広く低いが、眼窩だけは高いという特徴をもつといえよう。これは、これまでやや低顔で低眼窩・広鼻であるとされてきた豊後古墳人（Doi and Tanaka 1987）の特徴そのものではない。西日本古墳人の頭蓋形質については永井昌文（1985）やDoi and Tanaka（1987）において明らかにされてきたが、その後、豊後地方においてもややこれまでとは傾向の異なる個体も知られるようになっており（田中・大森1999）、今後、資料的に整備された段階で豊後古墳人の再検討あるいは地域的細分が可能となるかもしれない。その意味でも１体だけの出土ではあったが本人骨の出土は有意義であるといえよう。

5．おわりに

瀬戸１号墳第４主体部からは男性人骨１体が出土し、年齢は熟年以上であった。その形質的特徴は、低顔・広鼻という豊後古墳人の特徴を備えつつも、眼窩は比較的高いというものであった。これは、この地方の古墳人の変異におさまるものと考えられるが、今後の再検討や地域的細別の可能性を示唆するものかもしれない。今後の資料の増加に期待したい。

最後に、出土人骨を調査・研究するにあたって、機会を与えていただいた玖珠町教育委員会各位に感謝したい。また、大分県教育委員会 渋谷忠章・村上久和・友岡信彦の各氏には現地での調査段階から様々なご教示をいただいた。さらに、九州大学大学院比較社会文化研究科某屋構造講座の諸氏には人骨の整理等で協力いただいた。記して謝意を表したい。

参考文献

Doi,N.andY.Tanaka, 1987: A geographical cline in metrical characteristics of Kofun skulls from westem Japan.J.Anthrop.Soc.Nippon, 95-3
原田忠昭，1954：現代西南日本人頭骨の人類学的研究．人類学研究，1
Martin-Saller,1957: Lehrbuch der Anthropologie.Bd.I.Gustav Fischer Verlag.Stuttgart.
永井昌文，1985：北部九州・山口地方一国家成立前後の日本人．李刊人類学，16－3
内藤芳篤，1971：西南九州出土の弥生時代人骨．人類学雑誌，79－3
内藤芳篤，1985：南九州およびその離島一国家成立前後の日本人．李刊人類学，16　3
中橋孝博・永井昌文，1989：弥生人の形質．弥生文化の研究１．雄山閣
栃原博，1957：日本人歯牙咬耗に関する研究．熊本医学会雑誌，31（補冊４）

表7　瀬戸1号墳4号主体部出土人骨頭蓋骨計測値　(mm)

マルチン　No.	北俣石棺人骨♂
9. 最小前頭幅	92
26. 正中矢状前頭弧長	101
29. 正中矢状前頭弦長	115
43. 上顔幅	110
44. 両眼窩幅	105
45. 頬骨弓幅	(144)
46. 中顔幅	98
48. 上顔高	65
51. 眼窩幅L	43
眼窩幅R	43
52. 眼窩高L	34
眼窩高R	34
54. 鼻幅	30
55. 鼻高	45
48/45 上顔示数（K）	45.1
48/46 上顔示数（V）	66.3
52/51 眼窩示数L	79.1
54/55 鼻示数	66.7

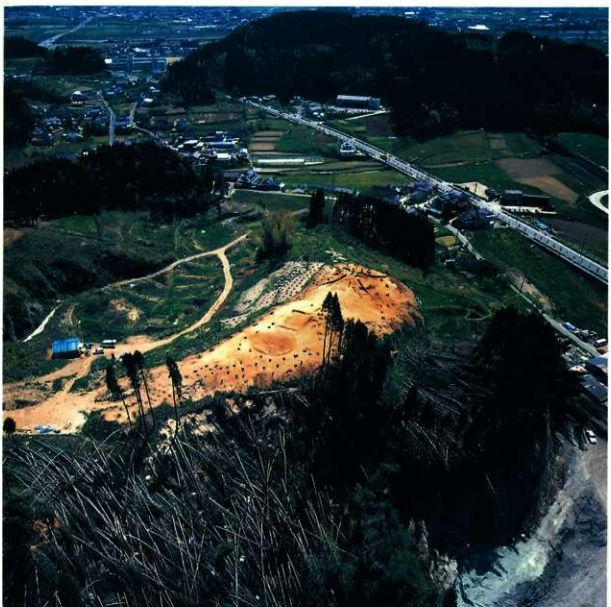
表8　頭蓋骨計測値（男性）

	瀬戸古墳		北谷前(古墳)[1]		豊後(古墳)[2]		北九州(古墳)[3]		南九州(古墳)[4]	
	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
45 頬骨弓幅	144		11	136.9	10	138.5	39	140.2	8	139.5
46 中顔幅	98		18	104.6	16	101.8	48	104.8	15	101.5
48 上顔高	65		16	72.9	17	69.4	49	73.3	23	64.9
48/45 上顔示数（K）	45.1		10	54.0	10	49.7	34	52.4	7	45.9
48/46 上顔示数（V）	66.3		16	69.5	16	68.2	43	70.2	13	62.8
51 眼窩幅（左）	43		17	42.6	13	42.8	42	43.4	21	43.1
52 眼窩高（左）	34		17	34.2	13	33.0	49	33.9	26	33.0
52/51 眼窩示数（左）	79.1		17	80.4	13	77.1	41	78.2	21	77.0
54 鼻幅	30		16	25.9	16	26.8	55	26.7	26	27.5
55 鼻高	45		16	50.5	18	49.7	51	52.0	25	50.2
54/55 鼻示数	66.7		15	51.5	16	54.2	51	51.6	24	54.9

	北部九州(弥生)[5]		西北九州(弥生)[6]		西南日本(現代)[7]	
	N	M	N	M	N	M
45 頬骨弓幅	103	140.0	12	138.4	106	135.5
46 中顔幅	114	104.7	17	105.0	107	99.9
48 上顔高	114	74.8	17	68.1	92	71.8
48/45 上顔示数（K）	95	53.3	12	49.3	90	53.5
48/46 上顔示数（V）	105	71.5	17	64.8	91	71.8
51 眼窩幅（左）	89	43.2	15	43.1	108	43.0
52 眼窩高（左）	93	34.5	15	32.8	108	34.4
52/51 眼窩示数（左）	86	79.9	16	76.2	108	80.2
54 鼻幅	117	27.1	16	27.8	108	25.9
55 鼻高	116	52.8	16	51.0	108	52.2
54/55 鼻示数	113	51.4	16	54.4	108	49.8

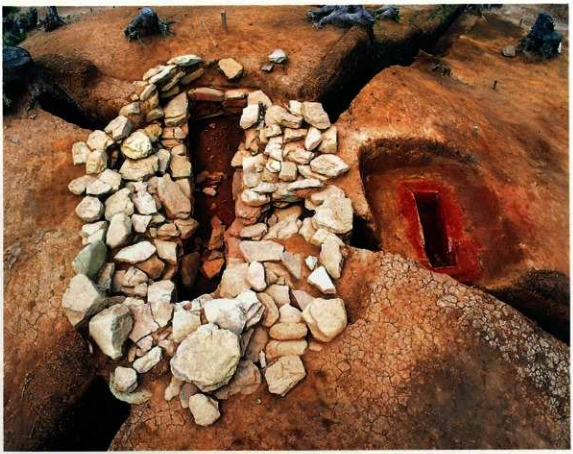
(1(2))Doi and Y Tanaka 1987　(3)永井 1985　(4)内藤 1985　(5)中橋・永井 1989　(6)内藤 1971　(7)原田 1954

写　真　図　版



瀬戸墳墓群全景

図 版 2



瀬戸１号墳１・２号主体部

瀬戸１号墳１号主体部南西壁面

瀬戸１号墳１号主体部北西壁面南側

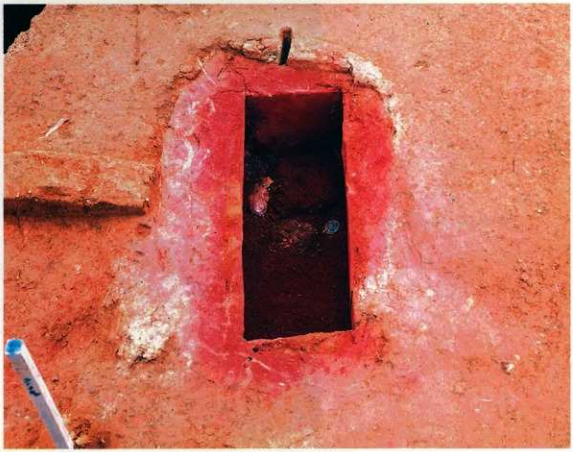
瀬戸１号墳１号主体部南西壁南東壁コーナー

瀬戸１号墳１号主体部南東壁中央部

瀬戸１号墳１号主体部南東壁北側

瀬戸１号墳１号主体部北東壁

瀬戸１号墳２号主体部



瀬戸１号墳３号主体部

瀬戸１号墳４号主体部

瀬戸１号墳４号主体部蓋石

瀬戸１号墳北側周溝

図 版 6

瀬戸墳墓群全景

瀬戸墳墓群1号方形墓

瀬戸墳墓群1号方形墓主体部

瀬戸墳墓群2号方形墓

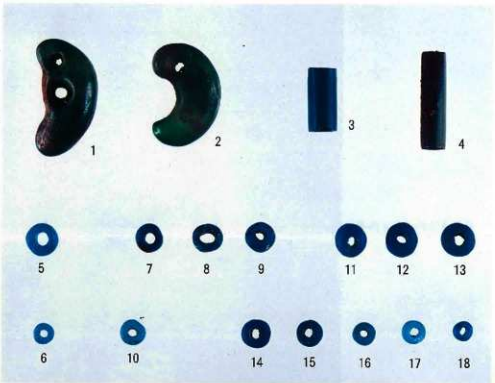
瀬戸墳墓群２号方形墓

瀬戸墳墓群３号方形墓

瀬戸墳墓群４号方形墓主体部

瀬戸墳墓群１号円形墓

図 版 8



瀬戸墳墓群出土玉類
〔長谷川正美 撮影〕

1・2、
1号墳3号主体部

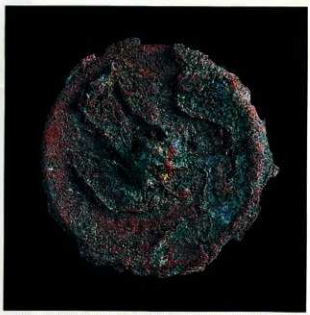
3・5・6、
同 1号主体部

4・7～9、
同 2号主体部

10、1号方形墓

11～18、1号円形墓

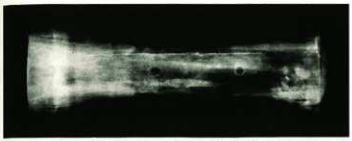
瀬戸1号墳3号主体部出土銅鏡（表）



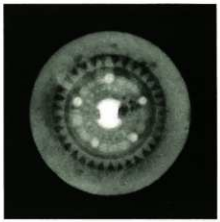
瀬戸1号墳3号主体部出土銅鏡（裏）〔長谷川 撮影〕

瀬戸1号墳2号主体部出土鉄剣

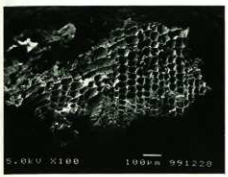
瀬戸1号墳2号主体部出土鉄剣柄部
〔長谷川 撮影〕



瀬戸１号墳２号主体部出土鉄剣柄部Ｘ線写真〔橿考研撮影〕

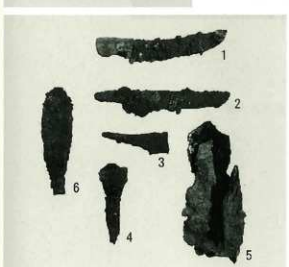


瀬戸１号墳３号主体部出土銅鏡Ｘ線写真〔橿考研撮影〕



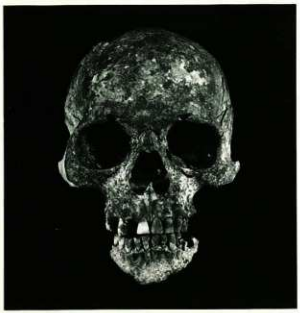
瀬戸１号墳２号主体部出土鉄剣鞘木質拡大顕微鏡写真〔橿考研撮影〕

瀬戸墳墓群出土土器

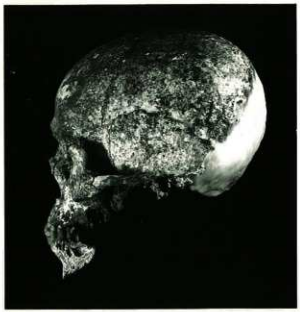


瀬戸墳墓群出土鉄器
（１・４～６は１号墳１号主体部、２は１号方形墓主体部、３は１号溝西側周溝出土）

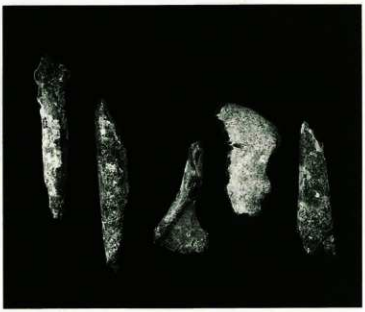
図　版　10



頭蓋骨正面観



頭蓋骨側面観



四肢骨片

瀬戸１号墳４号主体部出土人骨

瀬戸遺跡

Ⅳ．瀬戸遺跡

1．調査の概要

遺跡は大分県玖珠郡玖珠町大字帆足字瀬戸・西に所在するもので、調査期間は平成３年８月５Ｈから平成５年３月30日である。調査区は遺跡の南側の大部分をおおうものであり、現状は杉及び桧の植林地に用いられていた。調査は樹木を伐採・撤去し、重機を用いて表土の除去を実施したのち、調査補佐員の手仕事で樹根の抜き取り作業及び遺構・遺物の精査を行なった。調査区内の土砂堆積状況は腐食土（現代の表土層）を取り除くと直ちに遺構検出面である地山の褐色粘土層及び軟質の凝灰岩盤が露出する。この他にも谷部、斜面上にも遺跡の広がりが想定されたためトレンチ７条を以て遺構・遺物の確認を実施したが成果を得られなかった。調査の結果、最高所の曲輪Ａから弥生時代の竪穴住居跡３基、大型竪穴１基、竪穴２基、土坑15基、掘立柱建物跡７棟、柵状遺構５条、方形にめぐる溝状遺構１条を確認した。この他、周辺に広がる曲輪群には石棺１基、溝状遺構１条、堀切１条、禁地層１箇所、土坑１基、石列１条、竪堀状遺構１条を確認した。曲輪群については表土除去後に調査区全域について光波トランシットを用い１／100スケールで縄張図を作成、並行して空中写真撮影測量図化し、同座標写真を加え縄張りを復元（第１図 瀬戸遺跡・平田山土塁縄張図のアミ部）した。同図の調査区外北側に広がる縄張り及び平田山土塁については、原状を止めており平成11年度に現地踏査（中世城館調査）を行い作成した縄張図である。

2．調査の成果

a．瀬戸遺跡の縄張り

城跡は大岩扇山の裾野より続く尾根筋の末端部に設けられている。規模は北東－南西が約255ｍ、北西－南東が約245ｍで、森川がつくりだす河成堆積地との比高差は50ｍ前後となる。遺跡の南西から北東にかけては現代の里道が掘削されており、部分的に曲輪を削平していた。

主郭と考えられるＡは南北約110ｍ、東西約110ｍである。曲輪内には7.5%前後の勾配をもつ３段の平坦面が残存しているが、Ａの南東側は南西から北東に向かい緩やかな緩斜面となっており、明瞭な段築は確認できない。調査区内の３段の平坦面を画す２箇所の段差部には溝状遺構が並走しており、これをつなぐかたちで北東から南西に溝状の遺構が複数設けられ方形区画をなしている。Ａの最高所は調査区外の曲輪北端で標高390.000ｍ前後である。Ａは四方が切岸（南東側切岸の一部は現代の林道のため開削されていた）で囲まれており、隣接する曲輪との比高差は最大で約10ｍ、最小で約６ｍである。切岸の勾配は最大で約70度、最小で約40度である。Ａから確認された遺構は竪穴住居跡、大型竪穴、竪穴、土坑、掘立柱建物跡、柵状遺構、方形溝状遺構である。Ａの最北端の堀切Ｈから尾根筋伝いに約70ｍ北にすすむと、幾条な堀切Ｉに面し平田山土塁となる。

Ａの東側に広がる曲輪Ｂでは溝状遺構とピット群を確認した。Ｂは水田として用いられていたため、残存する平坦面が原状を止めているかは断定できない。

Ｂから曲輪Ｄをつなぐ部分は切岸と帯曲輪で構成されており、帯曲輪Ｃには竪堀状遺構と切岸の下場にそうかたちで、石列を確認している。また、Ｃの切岸の幾筋さは最大となっており、比高差は最大6.7ｍ、勾配は75度以上となる。Ｂ－Ｄ間の帯曲輪は概して整形が未熟で谷部に向かい緩斜面となる。

曲輪Ｄと下段の曲輪との比高差は最大で約5.5ｍ、最小で約2.5ｍである。切岸の勾配は最大で約80度、最小で約35度である。Ｄは南下がりの緩斜面となっており、整形が未熟でマウンド状に盛り上がっている。周辺の曲輪も整形が未熟で谷部に向かい緩斜面となる。Ｄの北側には現代の里道が曲輪を深く掘削して設けられているが、原状はＤ－整地層Ｇ－Ａが連続していたと推測される。Ｄのほぼ中央部には大きく削平をうけた石棺を確認しており、瀬戸墳墓群と同様な墳墓が同尾根筋にも広がっていた可能性を示すものである。また、Ｄの東側切岸のド場付近には土坑を確認している。

曲輪Ｅと下段の曲輪との比高差は最大で約４ｍ、最小で約3.5ｍである。切岸の勾配は最大で約70度、最小で約45度である。Ｅは南下がりの緩斜面となっており、整形が未熟でマウンド状に盛り上がっている。周囲の曲輪

も整形が未熟で谷部に向かい緩斜面となる。Eから西にのびる曲輪群は、階段状に標高を下げていき谷部にいたる。E と谷部の比高差は約 25 mである。

Fは堀切である。Fの東側には9.2 m×5.2 m、高さ3.5 mほどのマウンド状の盛り上がりが確認されている。Fの西側には明瞭な曲輪は確認されていないが、瀬戸墳墓群の残存状態から若干の削平が行なわれたものと推測できる。

Gは整地層である。トレンチを設定し整地の痕跡を確認した。整地層は瀬戸墳墓群の尾根筋と曲輪D・Eの尾根筋の間に広がる谷部を整地したものと推定できる。

当該区に係る伝承等は確認されなかったが、城跡の下に広がる集落の住民からの聴取では、当該遺跡を南西から北東にこえる行為を「シロンコシ」[(1)]と表現している。逆に東から西に移動する行為については口碑を残していない。

以上、A～Gを用い縄張りの特徴を述べてきたが、曲輪内より確認された遺構についてはA～Gを便宜上A区～G区と読み替え、調査の成果として報告する。

注)

(1) 森 義禮「中世山城跡く10>西城」『玖珠郡史談』第11号 玖珠郡史談会 1984 47頁で後述する帆足城跡を「西の城ン越し」としている。

b．瀬戸遺跡と平田山土塁の縄張り

前述したように瀬戸遺跡A最北端は急峻な堀切H（幅は約 18 m、比高差は前記空中測量からA最北端－Hが約 9 m）で遮断されている。Hの北側約 40 mには堀切I（幅は約 25 m、比高差は同様の空中測量から平田山土塁J－I は約 12 m）が設けられている。H－Iは尾根筋東側を階段状に削削しており、瀬戸遺跡から平田山土塁をつなぐ土塁状の構造を持っている。

平田山土塁は堀切Iの北東側尾根伝いに広がるものである。規模は東西約 120 m、南北は最大で約 50 m、最小で約 20 mである。土塁は部分的に消失しているが、原状は全周するものと考えられる。土塁内は中央部東側に比高差1 m程の段差を以てJとKの区画に分けられている。

J北側の土塁は原状をよく止めており、土塁内側ぞいに部分的に浅い溝を確認できる。土塁の高さは北側で1.5 m前後、北西コーナー部で2 m前後と最大に達する。これに対して西側（北西コーナー部を除く）及び南側の土塁は低く、高いもので50cm前後である。Jの最高所は標高 405.100 mである。

Kの土塁は全周にわたり原状をよく留めており、土塁内側ぞいに最大幅約2 m、最大深約 20cmの溝が残存している。土塁の高さは1 m前後であるが、南東コーナーでは高さ2 m前後に達している。K北側のLには土塁の切れ目が存在するが、北東の尾根伝いの階段状の緩斜面の昇降は極めて容易であることなどから、平田山土塁と神積地を結ぶラインとも考えられる。Kの最高所は標高 408.400 mである。

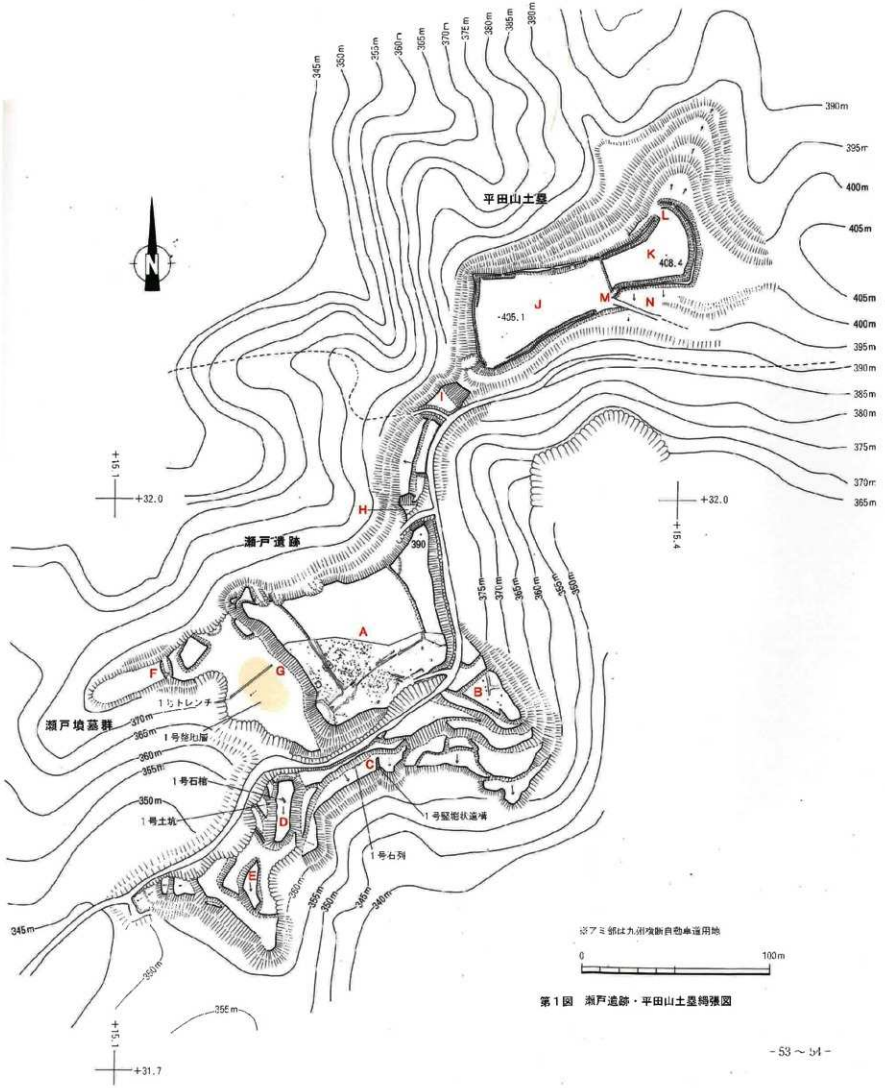
土塁中央部南側のMにも土塁の切れ目が確認された。しかしながらJの現状は畑地、Kは山林として用いられていることから、里道を介しNからMにかけて作業用の林道が開削された可能性がある。これにより土塁の途切れが発生したとも考えられ、さらに、K南西隅の土塁及び溝は南西方向に向きを変えはじめていることから、土塁の切れ目の発生は後世のものと推定される。

Nは階段状に削平されているが、土地所有者の話によれば戦後に畑地として開墾したとしている。削平は未熟で、南側の沖積谷に向かい緩斜面となっている。

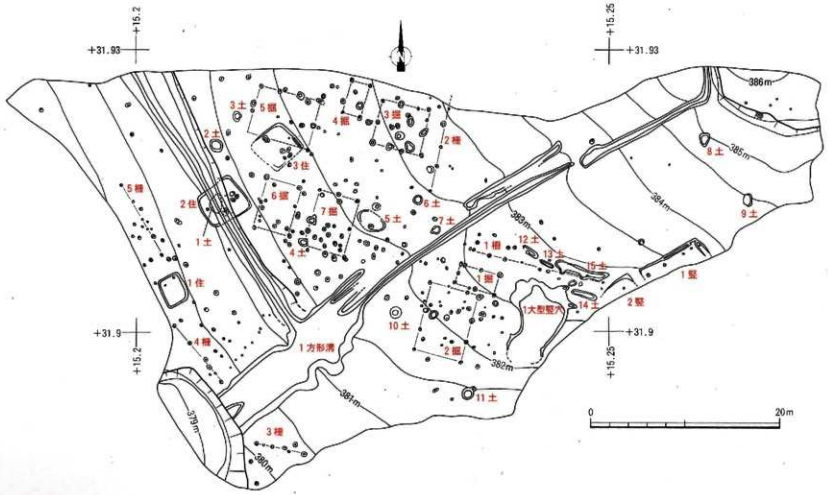
Kの東側は平坦面となっており、つづいて緩やかな尾根筋となる。尾根筋はしだいに大岩扇山に連なる峻しい尾根へと変化していく。平坦面の南側は急峻な斜面であるが、北側は尾根・谷筋ともに緩斜面を形成している。

c．A区の調査

A区は主郭と推定される範囲（約 5000㎡）の南側約 1／3（約 1800㎡）について調査を実施した。調査区内の土砂堆積状況は厚い腐植土（30cm厚）を取り除くと粘土質の前述した遺構の検出面となる。前記したように区内は3段の平坦面が形成されているが、さらに、調査区南西隅に1 mほどの段差を有す落ち込み地形を確認している。この落ち込みついては遺構・遺物など、その性格に迫る成果を得ていないことからここに記すに止める。



第1図　瀬戸遺跡・平田山土塁縄張図


+31.93
+15.2
+15.25
386m
385m
384m
383m
382m
381m
380m
379m
8土
9土
1土
2土
3土
4土
5土
6土
7土
10土
11土
12土
13土
14土
15土
1住
2住
3住
4住
5住
6住
7住
1掘
2掘
3掘
4掘
5掘
6掘
1竪
2竪
1大型竪穴
1方形溝
1柵
2柵
3柵
4柵
5柵
0
20m

第２図　Ａ区遺構配置図

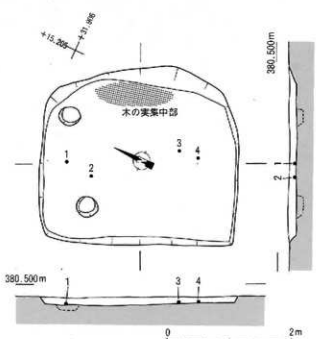
イ）竪穴住居跡

1号竪穴住居跡

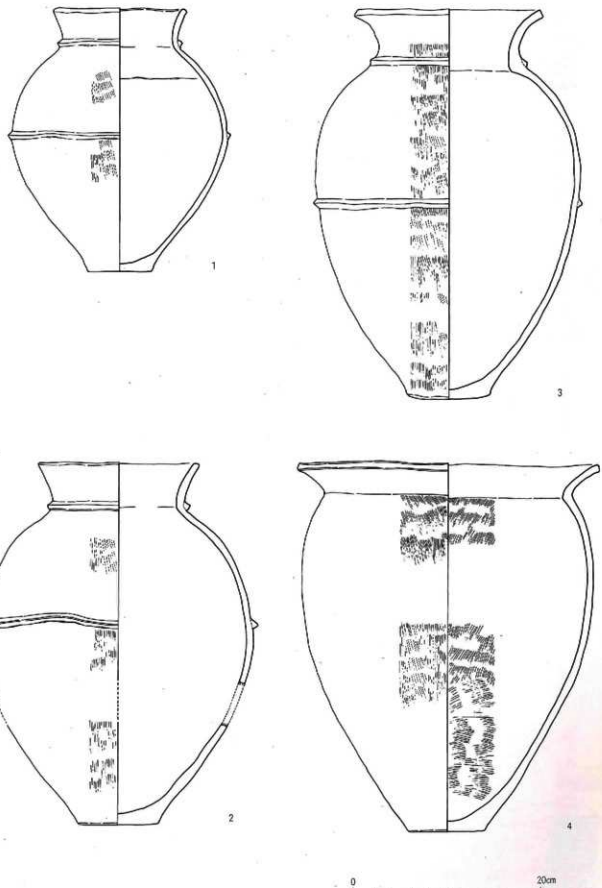
住居跡はA区の西端に位置する。平面プランは歪な長方形で、確認できる規模は2.83 m × 3.12 m、最大深13cmである。住居内からは柱穴を2基確認したが、主柱穴であるかは不明である。東壁中央部床面には炭化した木の実が散在していた。

1号竪穴住居跡出土遺物（遺物番号1～4）

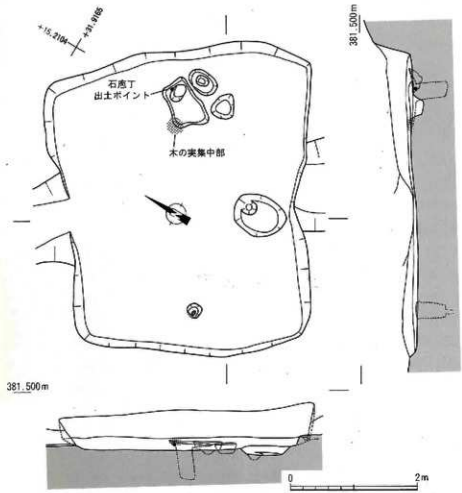
住居内からは前記した木の実ほかに1～3の壺と4の甕が出土した。1の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。頸部と胴部には横ナデされた断面三角形の凸帯がそれぞれ1条づつ設けられている。外面調整は胴部の一部にハケ目を残すほかは不明である。内面調整は劣化が著しいため不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。口径は17.0cm、胴部最大径は29.8cm、底径は8.8cm、復元器高は38.0cmである。2の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒、黒色砂粒が含まれる。頸部と胴部には横ナデされた断面三角形の凸帯がそれぞれ1条づつ設けられている。外面調整は胴部にハケ目を残すほかは不明である。内面調整は劣化が著しいため不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。口径は17.0cm、胴部最大径は29.8cm、底径は8.8cm、復元器高は38.0cmである。3の胎土には長石、角閃石、石英、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。頸部と胴部には横ナデされた断面三角形の凸帯がそれぞれ1条づつ設けられている。外面調整は口縁部が横ナデ、頸部から胴部はハケ目、底部は不明である。内面調整は劣化が著しいため不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。口縁部から胴部上半には黒斑が観察できる。復元口径は20.0cm、復元胴部最大径は28.8cm、底径は8.8cm、器高は41.0cmである。4の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれる。外面調整は口縁部が横ナデ、頸部から胴部はハケ目、底部は不明である。内面調整は頸部から胴部にハケ目を残すほかは不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。口径は39.4cm、復元胴部最大径は30.8cm、底径は8.0cm、器高は39.0cmである。遺物は弥生時代中期末から後期初頭と考えたい。



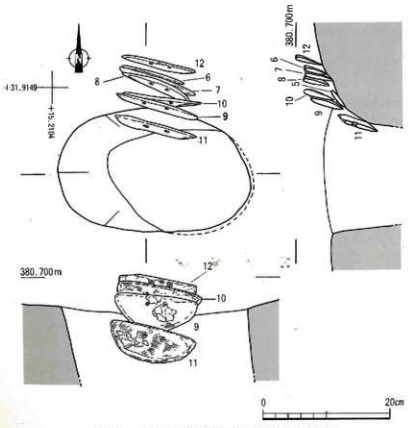
第3図　1号竪穴住居跡実測図



第４図　１号竪穴住居跡出土遺物実測図



第５図　２号竪穴住居跡実測図



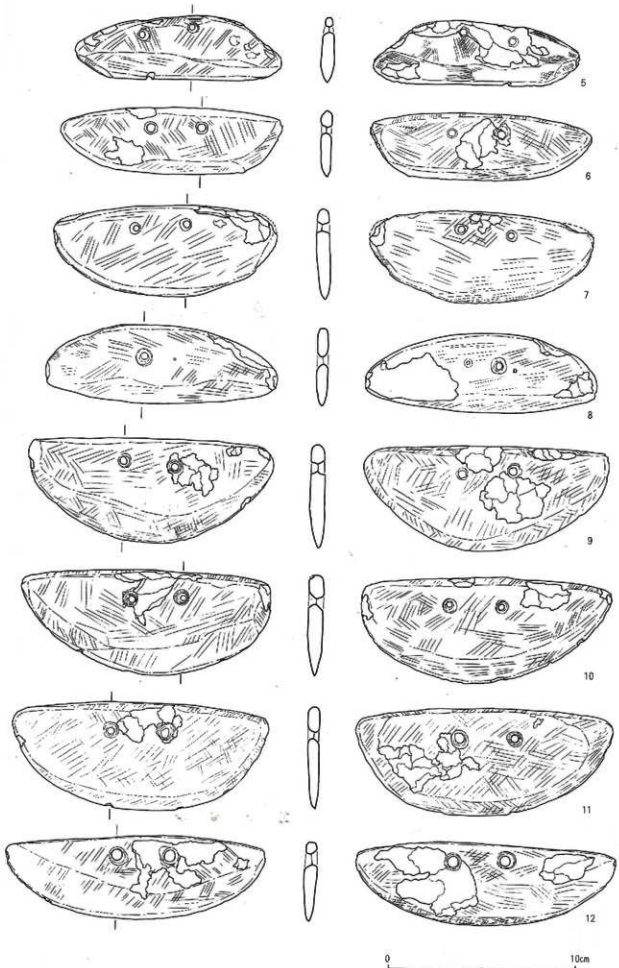
第６図　２号竪穴住居跡石庖丁出土状況実測図

２号竪穴住居跡

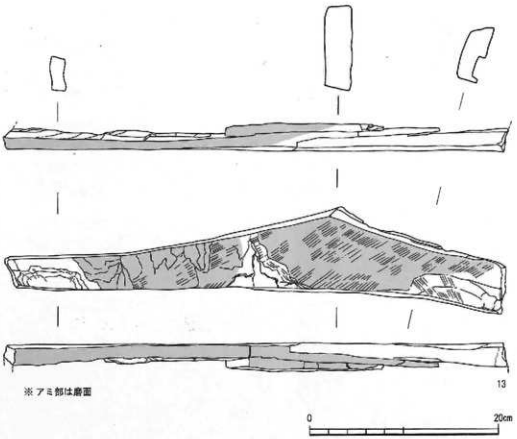
住居跡はＡ区の西側に位置するが、１号方形溝状遺構により南北壁のほぼ中央部を消失していた。平面プランは歪な長方形で、確認できる規模は4.91ｍ×4.11ｍ、最大深50cmである。主柱穴は２基で、他に柱穴２基と土坑２基を確認した。住居北側中央部床面には炭化した木の実が散在していた。特筆すべきは東側主柱穴に滑り込むようなかたちで石庖丁８点（未製品を含む）が出土した。住居と１号土坑及び１号方形溝状遺構は切り合い関係にあるが、遺構検出面の観察から２号竪穴住居跡→１号土坑→１号方形溝状遺構の前後関係にある。

２号竪穴住居跡出土遺物（遺物番号５～13）

住居内からは前記の炭化した木の実の他に砥石と石庖丁が出土している。**５**～**12**は石庖丁、**13**は砥石である。**５**は頁岩製である。縦3.40cm、横11.05cm、厚0.80cm、重さ40.0ｇである。**６**は頁岩製である。縦3.50cm、横11.80cm、厚0.55cm、重さ38.0ｇである。**７**は頁岩製である。縦4.85cm、幅11.90cm、厚0.70cm、重さ62.0ｇである。**８**は結晶片岩製である。貫通した穿孔は一箇所で、他に未完成の回転穿孔痕が３箇所に残されている。縦4.20cm、横12.30cm、厚0.60cm、重さ53.0ｇである。**９**は頁岩製である。縦5.60cm、横13.10cm、厚0.75cm、重さ82.0ｇである。**10**は頁岩製である。縦5.60cm、横13.80cm、厚0.75cm、重さ87.0ｇである。**11**は頁岩製である。縦5.70cm、横13.65cm、厚0.55cm、重さ66.0ｇである。**12**は砂岩製である。縦4.45cm、横13.85cm、厚0.70cm、重さ50.0ｇである。**13**は頁岩製である。長さ39.5cm、最大幅9.0cm、最大厚2.9cm、重さ400.0ｇである。遺物は弥生時代中期末から後期初頭を中心とした時期と考えたい。



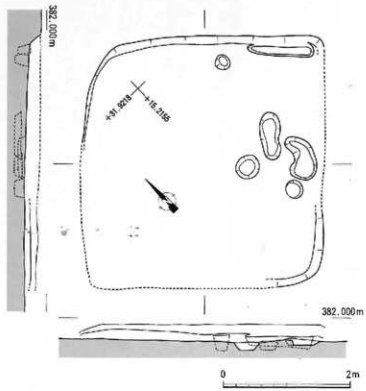
第７図　２号竪穴住居跡出土遺物実測図（１）



第８図　２号竪穴住居跡出土遺物実測図（２）

３号竪穴住居跡

住居跡はＡ区の西側に位置するが、樹根により住居西コーナー及び東コーナーの一部を失っていた。平面プランは歪な方形と推定され、確認できる規模は3.95ｍ×3.89ｍ、最大深16cmである。住居内からは柱穴３基及び土坑２基と壁溝１条を確認したが、主柱穴を断定するにはいたらなかった。遺物は出土していない。３号竪穴住居跡は１号・２号竪穴住居跡と主軸方位を同じくすることから同時期に遡る可能性がある。

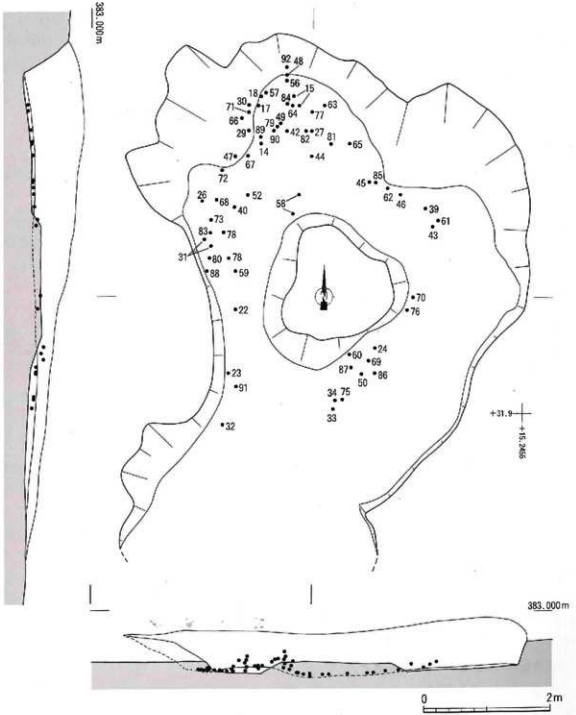


第９図　３号竪穴住居跡実測図

ロ）大型竪穴

1号大型竪穴

遺構はA区の中央部南東側に位置しているが、南側の壁面は確認できない。平面プランは不定形で、確認できる規模は8.35 m×6.42 m、最大深90cmである。遺構内中央部には、平面プランが不定形で、南北2.43 m×東西2.25 m、高さ18cmのマウンド状の高まりが存在する。



第10図　1号大型竪穴実測図

1号大型竪穴出土遺物

14～55は輸入陶磁器、56～70は土師質坏、71～84は土師質坏底部、85～87は土師質小皿、88は土師質土鍋、89は石鍋、90は東播系片口鉢、91・92は環状に加工される前の石と加工後の石である。

輸入陶磁器の分類については横田賢次郎・森田 勉（「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978）及び山本信夫（「付編・土器の分類」『太宰府条坊跡』Ⅱ 太宰府市教育委員会 1983）の分類を使用した。後述の分類についても同型式分類を用いるものである。

磁器窯系陶器（Ⅱ類－2－？：遺物番号14）

14は盤あるいは小盤である。胎土は明灰色で、口縁部を除く部分に薄く黄釉が施される。口縁部内面には重ね焼きの円あとが確認できる。

白磁水注（遺物番号15）

15は水注の一部と考えられる。胎土は灰白色で、内外面ともに淡灰オリーブ色がかった透明釉がかけられている。

青白磁合子（遺物番号16）

16は蓋である。胎土は灰白色で、外面のみに淡青色透明釉がかけられている。復元口径は5.4cm、器高は1.5cmである。

白磁碗（Ⅳ類：遺物番号17～20）

17～19は口縁部、20は底部である。17～19は口縁部を玉縁にするもので、胎土は共に灰白色で黒色の細粒が含まれている。釉は共に灰白色で厚めに施釉されている。20の胎土は灰白色で黒色の細粒が含まれている。内面の一部には灰白色の釉が残るが、ほかの部分は施釉されていない。復元高台径は6.0cmである。

白磁碗（Ⅴ類－4－a：遺物番号21）

21の胎土は灰色で、灰白色の釉が薄くかけられているが、体部外面下半は無釉である。口縁部は外反し端部を水平にするもので、体部内面上半に浅い沈線を施している。復元口径は14.8cmである。

同安窯系青磁碗（Ⅰ類－1－b：遺物番号22～28）

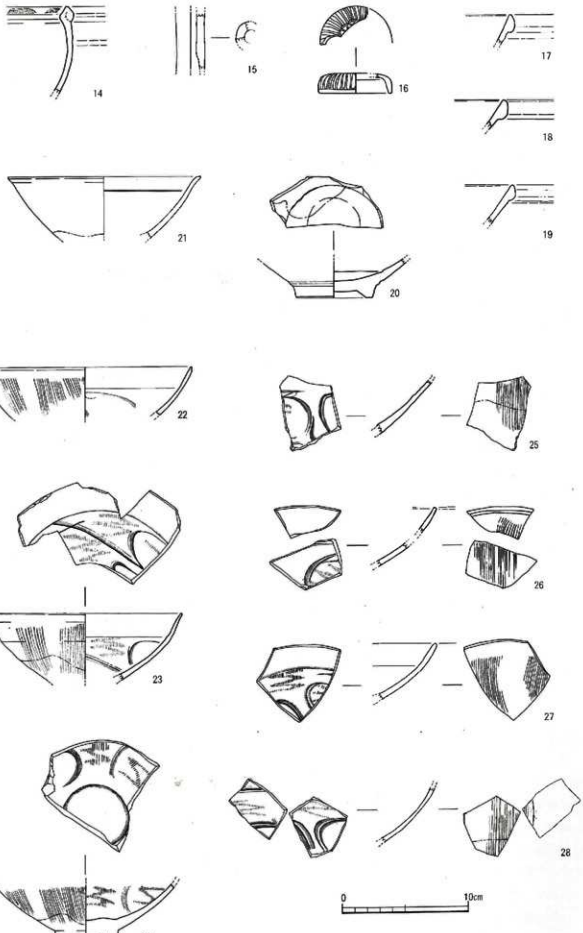
22の胎土は淡灰色で、釉色は黄色味の強い飴色ガラス質の釉である。体部上半で若干内側に屈曲しており、体部内面上半には浅い沈線を施している。内面は劃花文、外面は櫛目を確認できる。復元口径は16.5cmである。23の胎土は淡灰色である。釉色は黄色味の強い飴色ガラス質の釉で、体部外面下半は無釉である。体部上半で若干内側に屈曲しており、体部内面上半には浅い沈線を施している。内面は劃花文と櫛目、外面は櫛目を確認できる。復元口径は15.0cmである。24の胎土は淡灰色である。釉色は黄色味の強い飴色ガラス質の釉で、体部外面下半は無釉である。外底の作りは無造作な削りっぱなしである。内面は劃花文と櫛目、外面は櫛目を確認できる。復元高台径は4.9cmである。25～28は口縁部から体部上半にいたる部分である。25の胎土は淡灰色で、釉色は黄色味の強い飴色ガラス質の釉である。体部外面下半は無釉である。内面は劃花文と櫛目、外面は櫛目を施している。26の胎土は淡灰色で、釉色は黄色味の強い飴色ガラス質の釉である。内面は劃花文と櫛目、外面は櫛目を施している。27の胎土は淡灰色で、釉色は黄色味の強い飴色ガラス質の釉である。遺物は体部上半で若干内側に屈曲しており、体部内面上半には浅い沈線を施している。内面は劃花文と櫛目、外面は櫛目を施している。28の胎土は淡灰色で、釉色は黄色味の強い飴色ガラス質の釉である。内面は劃花文と櫛目、外面は櫛目を施している。

同安窯系青磁碗（Ⅲ類－1－b：遺物番号29）

29は口縁部片で、僅かに外反している。胎土は淡灰色で、釉色は黄色味の強い飴色ガラス質の釉である。内面は櫛状の施文具による花文が僅かに観察できる。外面にはヘラ状の施文具により片彫りした沈線がみられる。

同安窯系青磁碗（Ⅰ類－？：遺物番号30）

30の胎土は淡灰色で、釉色は黄色味の強い飴色ガラス質の釉である。体部上半で若干内側に屈曲しており、体部内面上半には浅い沈線を施している。



第11図　1号大型竪穴出土遺物実測図（1）

同安窯系青磁皿（Ⅰ類－１－ｂ：遺物番号 31 ～ 33）

31 の胎土は淡灰色である。釉色は黄色味の強い飴色ガラス質の釉で、外面体部下半から底部は無釉である。内面は劃花文と櫛目、外面は無文である。復元口径は 11.2cm、器高は 2.3cm である。32 の胎土は淡灰色である。釉色は黄色味の強い飴色ガラス質の釉で、外面体部下半は無釉である。内面は僅かに櫛目を残すが、外面は無文である。復元口径は 10.1cm である。33 の胎土は淡灰色である。釉色は黄色味の強い飴色ガラス質の釉で、外面体部下半から底部は無釉である。内面は劃花文と櫛目、外面は無文である。器高は 2.2cm である。

同安窯系青磁皿（Ⅰ類－２：遺物番号 34）

34 の胎土は淡灰色で、釉色は黄色味の強い飴色ガラス質の釉である。外面底部は施釉後、釉をカキ取っている。内面は劃花文と櫛目、外面は無文である。復元口径は 10.8cm、復元器高は 2.3cm である。

同安窯系青磁碗（分類不明：遺物番号 35・36）

35 の胎土は淡灰色で、釉色は黄色味の強い飴色ガラス質の釉である。内面は施釉されているが、外面は無釉である。高台径は 5.2cm である。36 の胎土は淡灰色で、釉色は黄色味の強い飴色ガラス質の釉である。内面は施釉されているが、外面は無釉である。高台径は 5.1cm である。

龍泉窯系青磁碗（Ⅰ類－１：遺物番号 37）

37 は底部片である。胎土は淡灰色で、高台部畳付及び高台内は無釉である。釉の発色は青味がかった緑色である。内外面ともに無文である。復元高台径は 6.4cm である。

龍泉窯系青磁碗（Ⅰ類－２－？：遺物番号 38・39）

38 は口縁部片である。胎土は淡灰色で、釉の発色は青味がかった緑色である。39 は底部片である。胎土は淡灰色で、高台部畳付及び高台内は無釉である、釉の発色は青味がかった緑色である。内面には草花文を僅かに確認できる。復元高台径は 6.2cm である。

龍泉窯系青磁碗（Ⅰ類－２あるいはⅠ類－３：遺物番号 40）

40 は口縁部片である。胎土は淡灰色で、釉の発色は青味がかった緑色である。内面には草花文あるいは花文を僅かに確認することができる。復元口径は 15.7cm である。

龍泉窯系青磁碗（Ⅰ類－２－ａ：遺物番号 41 ～ 46）

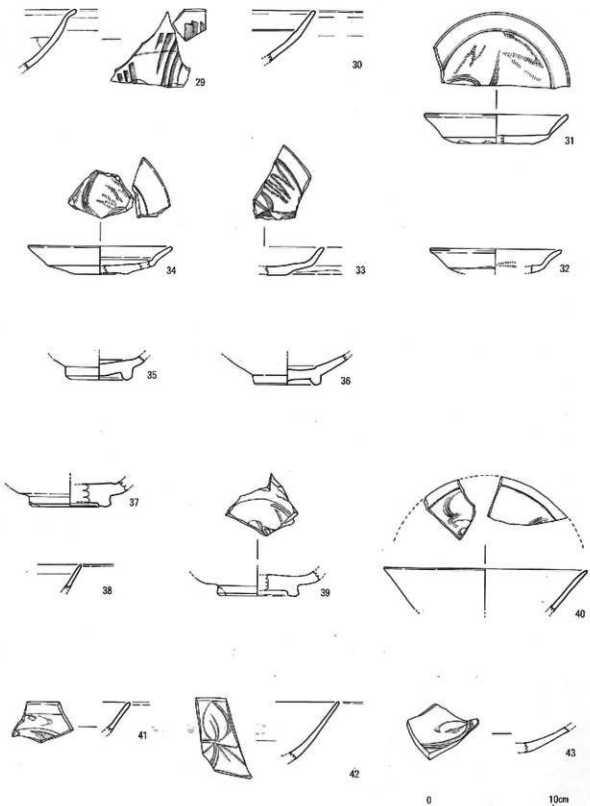
41 は口縁部片である。胎土は淡灰色で、釉の発色は青味がかった緑色である。内面には蓮華文がみられる。42 は口縁部から体部にいたる部分である。胎土は淡灰色で、釉の発色は青味がかった緑色である。内面には蓮華文がみられる。43 は体部下半片である。胎土は淡灰色で、釉の発色は青味がかった緑色である。内面には蓮華文がみられる。44 の胎土は淡灰色で、高台部畳付及び高台内は無釉である。釉の発色は青味がかった緑色である。内面には蓮華文がみられる、復元口径は 16.0cm、高台径は 5.2cm、器高は 6.5cm である。45 の胎土は淡灰色で、釉の発色は青味がかった緑色である。内面には蓮華文がみられる。復元口径は 16.0cm である。46 は体部から底部にいたる部分である。胎土は淡灰色で、釉の発色は青味がかった緑色である。高台部及び高台内は無釉で、内面には蓮華文がみられる。高台径は 5.6cm である。46 の体部片は１号方形溝状遺構内から出土している。

龍泉窯系青磁碗（Ⅰ類－２－ｂ：遺物番号 47）

47 は体部下半から底部にいたる部分である。胎土は灰色で、釉の発色は青味がかった緑色である。高台部畳付及び高台内は無釉で、内面には蓮華文がみられる。高台径は 6.4cm である。

龍泉窯系青磁碗（Ⅰ類－４－ａ：遺物番号 48 ～ 51）

48 は口縁部片である。胎土は淡灰色で、釉の発色は青味がかった緑色である。内面には飛雲文がみられる。49 は口縁部から体部下半にいたる部分である。胎土は灰色で、釉の発色は青味がかった緑色である。内面には飛雲文がみられる。50 は口縁部片である。胎土は淡灰色で、釉の発色は青味がかった緑色である。内面には飛雲文がみられる。51 は体部下半から底部にいたる部分である。胎土は灰色で、釉の発色は青味がかった緑色である。高台部及び高台内は無釉である。高台径は 5.8cm である。



第 12 図　1 号大型竪穴出土遺物実測図（2）

龍泉窯系青磁碗（Ⅰ類－5－a：遺物番号52）

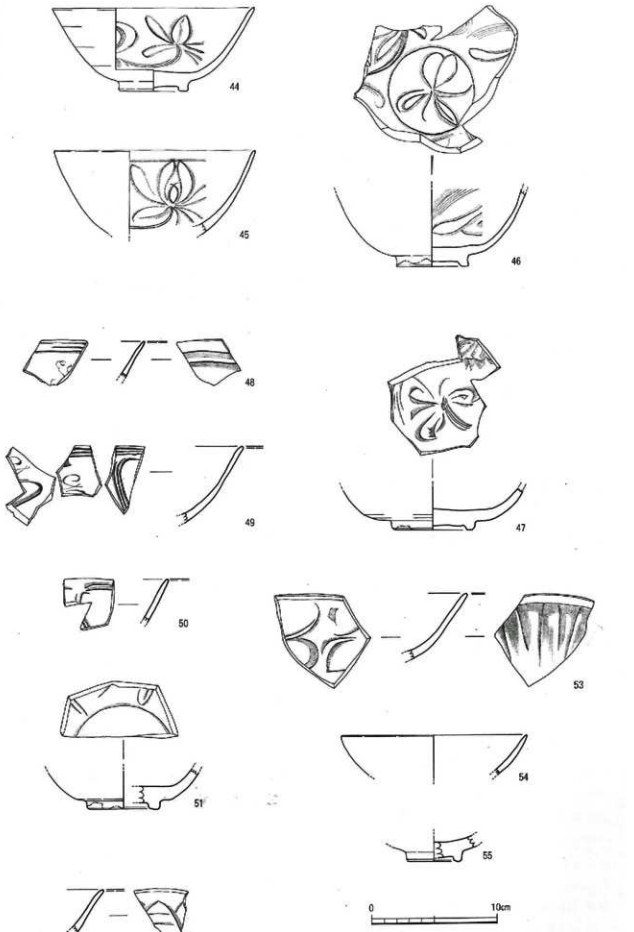
52は口縁部片である。胎土は淡灰色で、釉の発色は青味がかった緑色である。外面には蓮弁文がみられる。

龍泉窯系青磁碗（分類不明：遺物番号53～55）

53は口縁部から体部下半にいたる部分である。胎土は淡灰色で、釉の発色は青味がかった緑色である。内面は劃花文、外面はヘラ状の施文具による片彫りの沈線がみられる。**54**の胎土は灰色で、釉の発色は青味がかった緑色である。内外面ともに無文である。復元口径は14.6cmである。**55**の胎土は淡灰色で、釉の発色は青味がかった緑色である。高台部畳付から高台内は無釉である。高台径は4.5cmである。

土師質坏（遺物番号56～84）

56の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデを残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は13.8cm、器高は3.0cm、復元底径は11.9cmである。**57**の胎土には長石、角閃石、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は14.0cm、器高は3.2cm、復元底径は11.0cmである。**58**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は14.8cm、器高は3.0cm、復元底径は11.8cmである。**59**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデとロクロ目を残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。復元口径は14.0cm、器高は3.3cm、復元底径は11.2cmである。**60**の胎土には長石と茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデが残される。焼成は良好で、色調は内外面ともに明淡褐色である。復元口径は14.7cm、器高は3.2cm、復元底径は10.4cmである。**61**の胎土には長石、角閃石、茶色砂粒、白色砂粒が含まれる。外面調整は口縁部から体部が回転横ナデ、底部は不明である。内面調整は回転横ナデを残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は15.6cm、器高は3.1cm、復元底径は9.6cmである。**62**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は15.6cm、器高は3.1cm、復元底径は11.8cmである。**63**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕が僅かに確認できる。内面調整は回転横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄白色である。器高は3.3cmである。**64**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。調整は内外面ともに不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。復元口径は14.4cm、器高は2.4cm、復元底径は10.6cmである。**65**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデが確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。復元口径は14.6cm、器高は2.9cm、復元底径は11.0cmである。**66**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕を僅かに残している。内面調整は回転横ナデを僅かに確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。口径は15.0cm、器高は2.7cm、底径は11.0cmである。**67**の胎土には長石、石英、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は口縁部に横ナデを確認できるほかは調整不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。口径は15.0cm、器高は3.0cm、底径は11.0cmである。**68**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに明淡褐色である。復元口径は15.0cm、器高は3.0cm、復元底径は11.6cmである。**69**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は15.3cm、器高は2.9cm、復元底径は12.4cmである。**70**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は口縁部が回転横ナデのほかは不明である。内面調整は回転横ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。復元口径は15.5cm、器高は3.0cm、復元底径は12.2cmである。**71**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、



第 13 図　1 号大型竪穴出土遺物実測図（3）

茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕が僅かに確認できる。内面調整も回転横ナデと指ナデを僅かに残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。復元底径は10.0cmである。**72**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれる。外面調整は糸切り痕を確認できるほかは不明である。内面調整も劣化が著しく不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰褐色である。復元底径は11.0cmのある。**73**の胎土には長石、角閃石、茶色砂粒、白色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切りの後、板状圧痕を確認できる。内面調整は回転横ナデ及び指圧痕と指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰褐色である。復元底径は9.8cmである。**74**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕,内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で,色調は内外面ともに淡褐色である。復元底径は10.5cmである。**75**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデを観察できる。焼成は良好で,色調は内外面ともに淡黄褐色である。復元底径は11.2cmである。**76**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデを残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。復元底径は11.4cmである。**77**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は指ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰褐色である。復元底径は10.4cmである。**78**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。底径は10.5cmである。**79**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと不定方向ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。復元底径は10.0cmである。**80**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は剥離のため不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。復元底径は10.8cmである。**81**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。調整は内外面ともに剥離のため不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに明淡褐色である。復元底径は10.4cmである。**82**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと不定方向ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。復元底径は11.4cmである。**83**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。底径は10.5cmである。**84**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。底径は11.2cmである。

土師質小皿（遺物番号85～87）

85の胎土には長石、角閃石、茶色砂粒が含まれる。外面調整は横ナデと糸切り痕、内面調整は指ナデと回転横ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面が赤変している。復元口径8.4cm、器高は1.1cm、底径は7.4cmである。**86**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は劣化が著しく不明、内面調整は指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。底径は8.0cmである。**87**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。口径は8.6cm、器高は0.7cm、底径は8.0cmである。

土師質土鍋（遺物番号88）

88の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。内外面の調整は劣化が著しいため不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着が僅かにみられる。

石鍋（遺物番号89）

89は口縁部片で、穿孔が1箇所に確認できる。滑石製で、外面に煤の付着がみられる。

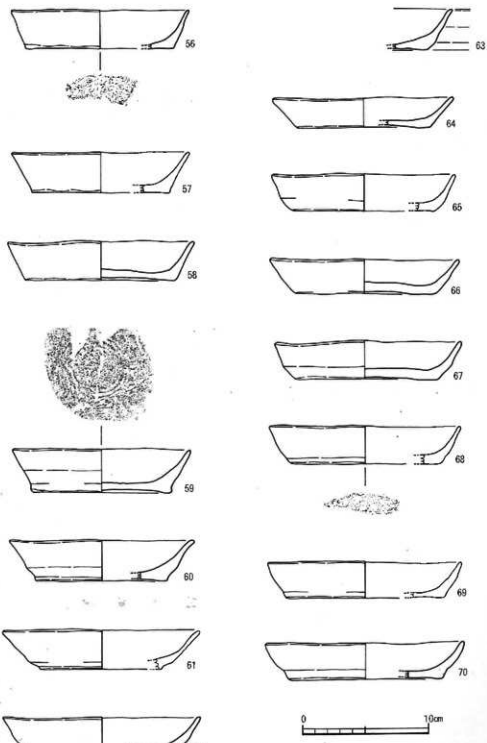
東播系片口鉢（遺物番号 90）

90 の胎土は灰色で、内外面ともに不定方向ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰色である。

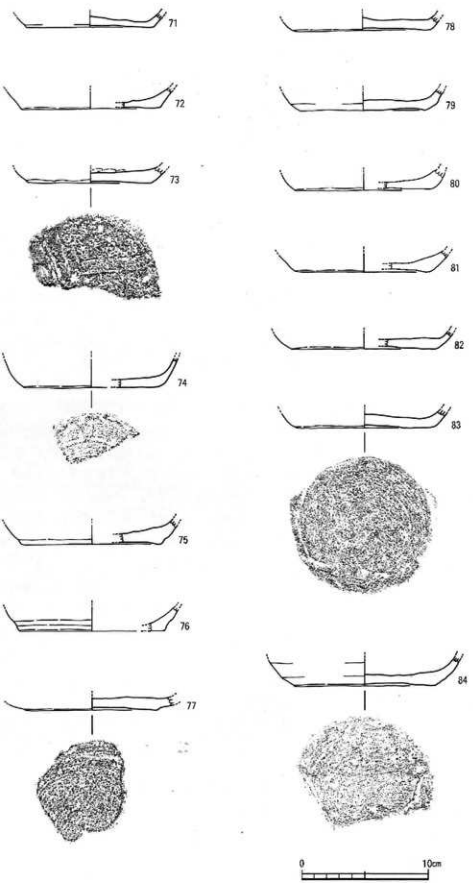
環状に加工した石及び未製品（遺物番号 91・92）

91 は安山岩製である。縦 24.3cm、横 18.0cm、厚さ 7.0cm、重さ 3410 g である。**92** は安山岩製である。縦 30.0cm、横 30.0cm、厚さ 13.4cm、重さ 9900 g である。

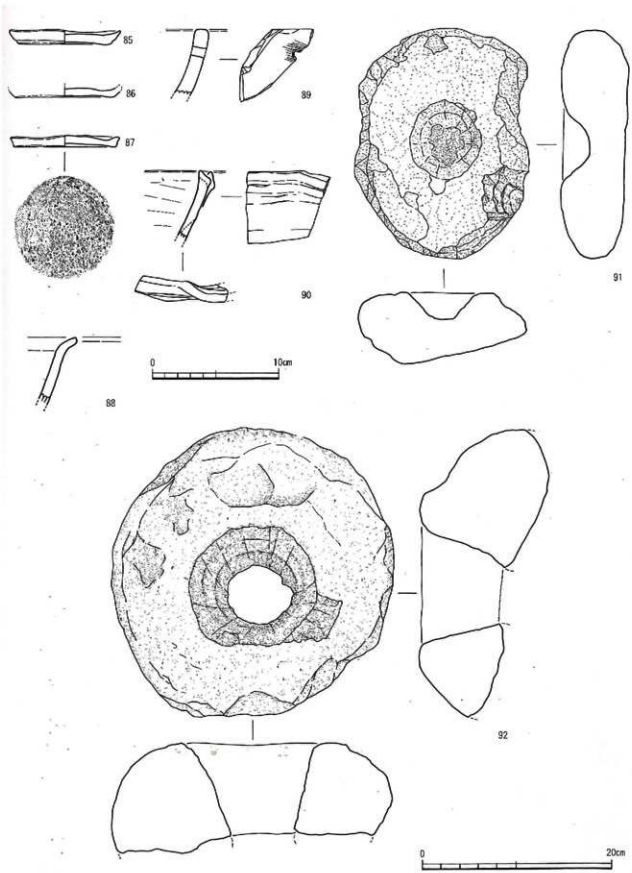
1 号大型竪穴の遺物群は龍泉窯系青磁 I 類－ 5 － a の出現及び土師質土器などから 13 世紀前半の遺物構成と考えたい。



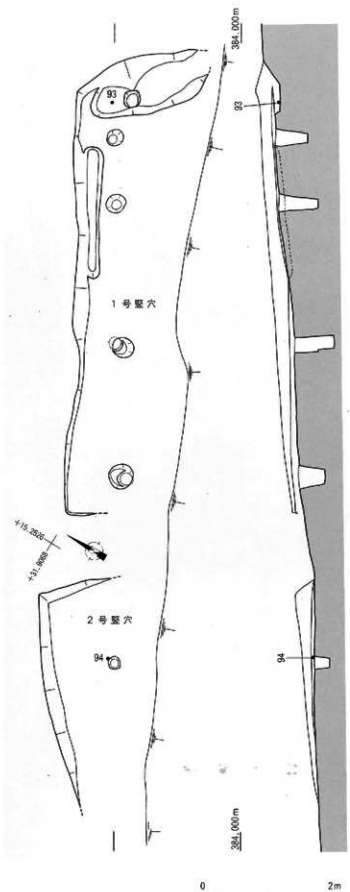
第 14 図　1 号大型竪穴出土遺物実測図（4）



第15図　1号大型竪穴出土遺物実測図（5）



第16図　1号大型竪穴出土遺物実測図（6）



第17図　1号・2号竪穴実測図

ハ）竪穴

1号竪穴

遺構は調査区の東側に位置するが、竪穴の南側は消失している。平面プランは長方形と推定され、確認できる規模は2.23 m×8.21 m、最大深25cmである。遺構内からは柱穴5基と壁溝を2箇所に確認している。柱穴は2号竪穴の柱穴とあわせ棚状遺構となる可能性がある。

2号竪穴

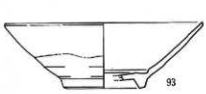
遺構は調査区の東側に位置するが、竪穴の南側は消失していた。平面プランは長方形と推定され、確認できる規模は3.61 m×1.33 m、最大深26cmである。遺構内には柱穴1基を確認している。柱穴は1号竪穴の柱穴とあわせ棚状遺構となる可能性がある。

1号竪穴出土遺物（遺物番号93）

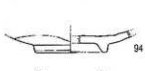
93は白磁碗Ⅷ類－2である。胎土は灰白色で黒色粒が含まれ、灰白色の釉が施されている。体部は直線的に外上方に延びるもので、見込みに段を有しており、段内側の釉を輪状にカキ取っている。体部外面下半から高台内は無釉である。復元口径は15.6cm、器高は5.2cm、復元高台径は6.4cmである。遺物は12世紀中頃から後半に増加する遺物である。

2号竪穴出土遺物（遺物番号94）

94は白磁碗Ⅷ類－？の底部片である。胎土は灰白色で黒色粒が含まれ、灰白色の釉が施されている。見込みに段を有しており、段内側の釉を輪状にカキ取っている。体部外面下半から高台内は無釉である。復元高台径は5.4cmである。遺物は12世紀中頃から後半に増加する遺物である。



第18図　1号竪穴出土遺物実測図



第19図　2号竪穴出土遺物実測図

ニ）土坑

1号土坑

土坑はA区の西側に位置する。平面プランは歪んだ長楕円形で、規模は2.13 m×1.19 m、最大深16cmである。遺構は2号竪穴住居跡及び1号方形溝状遺構と前後関係にあるが、遺構検出面の観察から2号竪穴住居跡→1号土坑→1号方形溝状遺構の新旧関係を確認した。

1号土坑出土遺物（遺物番号95・96）

95・96は土師質小皿である。**95**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれる。外面調整は横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着と赤変が観察できる。復元口径は8.6cm、器高は0.9cm、復元底径は8.0cmである。**96**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着と赤変がみられる。口径は9.2cm、器高は0.8cm、底径は8.4cmである。遺物は13世紀前半を中心とした時期と考えたい。

2号土坑

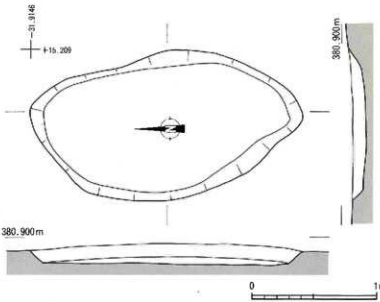
土坑はA区の西側に位置する。平面プランは円形で、規模は1.49 m×1.51 m、最大深41cmである。遺物は出土していない。

3号土坑

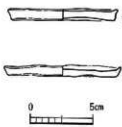
土坑はA区の西側に位置する。平面プランは不定形で、規模は1.06 m×98cm、最大深39cmである。遺物は出土していない。

4号土坑

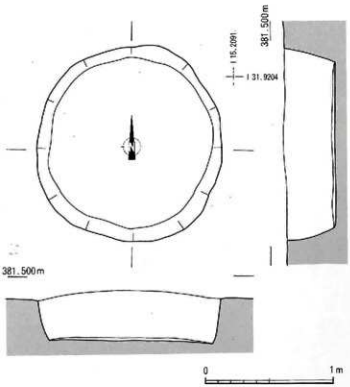
土坑はA区の中央部西側に位置する。平面プランは不定形で、規模は87cm×1.18 m、最大深15cmである。遺物は出土していない。



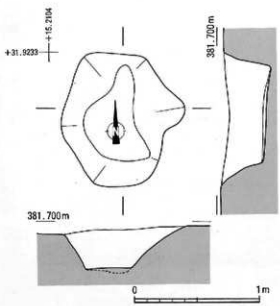
第20図　1号土坑実測図



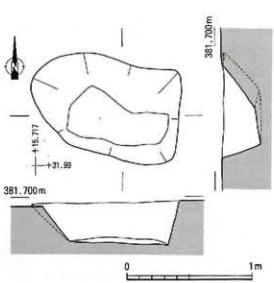
第21図　1号土坑出土遺物実測図



第22図　2号土坑実測図



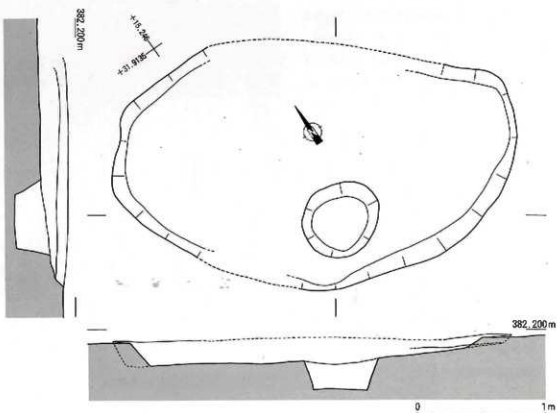
第 23 図　3号土坑実測図



第 24 図　4号土坑実測図

5号土坑

土坑はA区の中央部に位置するが、樹根のため北壁と南壁を消失していた。平面プランは歪な短楕円形で、確認できる規模は1.96 m× 3.17 m、最大深17cmである。土坑内には遺構に伴う短楕円形の掘り方を確認しており、規模は64cm× 58cm、最大深21cmである。遺物は出土していない。



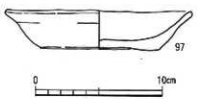
第 25 図　5号土坑実測図

6号土坑

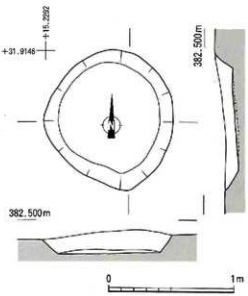
土坑はA区の中央部に位置する。平面プランは歪んだ円形で、規模は1.12 m×1.05 m、最大深18cmである。

6号土坑出土遺物（遺物番号97）

97は土師質坏である。胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。復元口径は14.8cm、器高は3.0cm、復元底径は9.4cmである。遺物は13世紀前半を中心とする時期と考えたい。



第27図　6号土坑出土遺物実測図



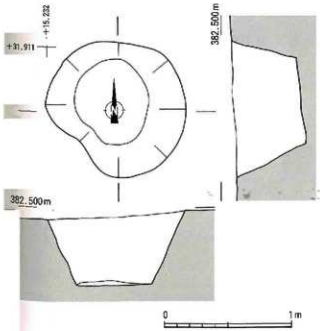
第26図　6号土坑実測図

7号土坑

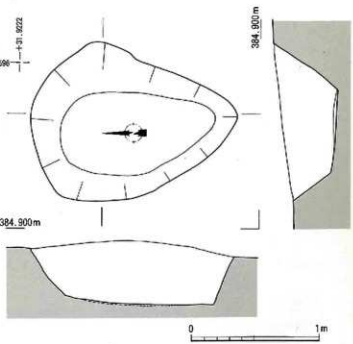
土坑はA区の中央部に位置する。平面プランは歪んだ円形で、規模は1.06 m×1.08 m、最大深56cmである。遺物は出土していない。

8号土坑

土坑はA区の東側に位置する。平面プランは歪んだ短楕円形で、規模は1.22 m×1.62 m、最大深50cmである。遺物は出土していない。



第28図　7号土坑実測図



第29図　8号土坑実測図

9号土坑

土坑はA区の東側に位置する。平面プランは不定形で、規模は1.02 m×1.29 m、最大深42cmである。遺物は出土してない。

10号土坑

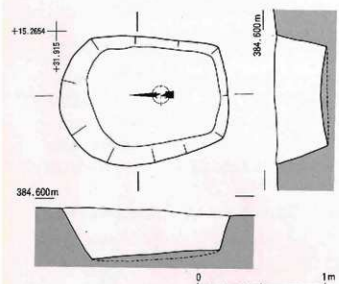
土坑はA区の中央部南側に位置するが、樹根のため南西壁を消失していた。平面プランは短楕円形で、確認できる規模は1.06 m×1.16 m、最大深34cmである。遺物は出土していない。

11号土坑

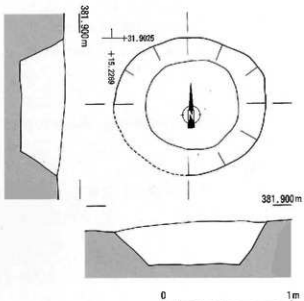
土坑はA区の南側に位置する。平面プランは短楕円形で、規模は1.26 m×1.31 m、最大深34cmである。遺物は出土していない。

12号土坑

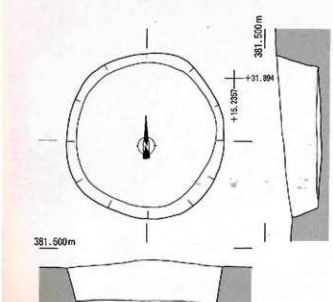
土坑はA区の中央部東側に位置するが、樹根のため南西コーナー部を消失していた。平面プランは歪んだ長方形で、規模は60cm×1.75 m、最大深20cmである。遺物は出土していない。



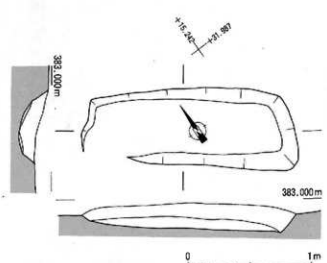
第30図　9号土坑実測図



第31図　10号土坑実測図



第32図　11号土坑実測図



第33図　12号土坑実測図

13号土坑

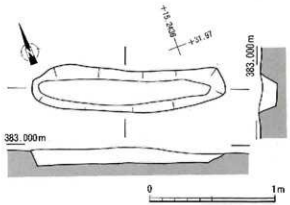
土坑はA区の中央部東側に位置する。平面プランは歪んだ長楕円形で、規模は38cm×1.52m、最大深15cmである。遺物は出土していない。

14号土坑

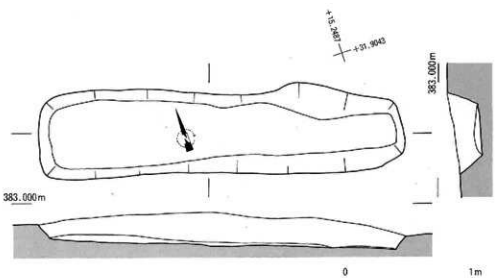
土坑はA区の中央部東側に位置する。平面プランは歪んだ長方形で、規模は70cm×2.91m、最大深26cmである。遺物は出土してない。

15号土坑

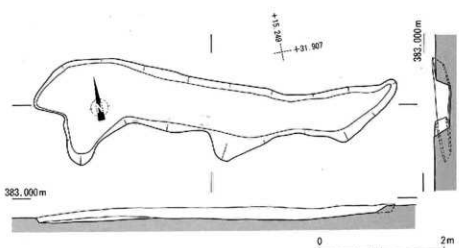
土坑はA区の中央部東側に位置する。平面プランは不定形で、規模は1.70m×5.81m、最大深20cmである。遺物は出土していない。



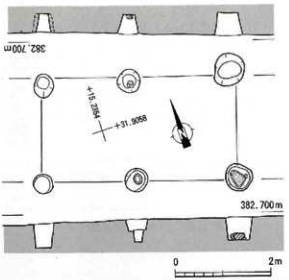
第34図　13号土坑実測図



第35図　14号土坑実測図



第36図　15号土坑実測図



第 37 図　1 号掘立柱建物跡実測図

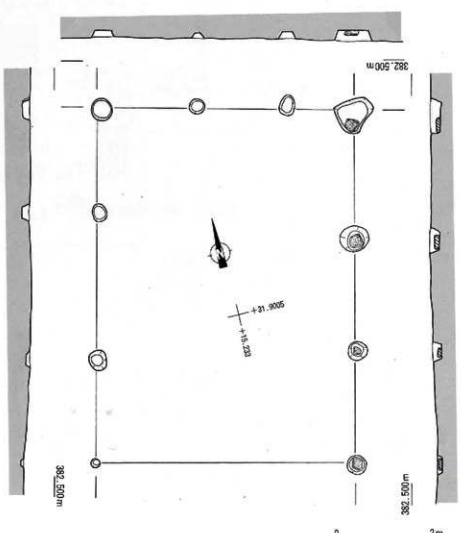
ホ）掘立柱建物跡

1 号掘立柱建物跡

遺構はA区の中央部に位置する。平面プランは長方形で、規模は桁行 4.12 m、梁行 2.18 mである。柱穴内には2箇所に根石を残しており、各柱穴の深さは 45cm前後となる。遺物は出土していない。

2 号掘立柱建物跡

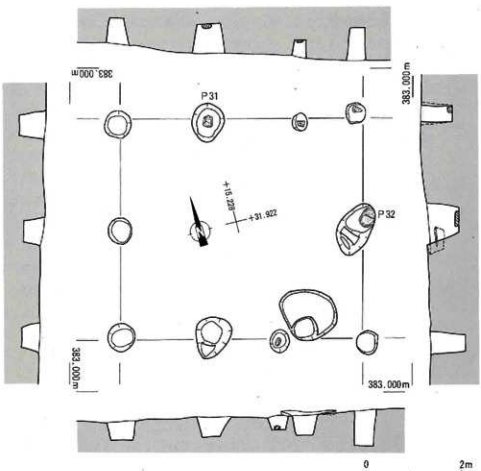
遺構はA区の中央部南側に位置する。平面プランは長方形で、規模は桁行 7.52 m、梁行 5.56 mである。柱穴内には4箇所に根石を残しており、各柱穴の深さは 10～20cm前後となるが、南側梁行の柱穴2基を確認できない。遺物は出土していない。



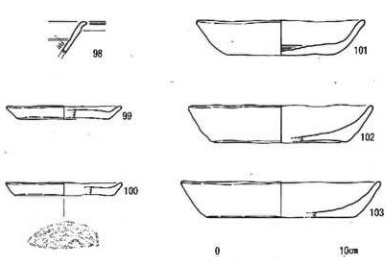
第 38 図　2 号掘立柱建物跡実測図

3号掘立柱建物跡

道構はA区の中央部北側に位置する。平面プランは長方形で、規模は桁行5.12m、梁行4.72mである。柱穴内には5箇所に根石を残しており、各柱穴の深さは30～75cm前後となる。



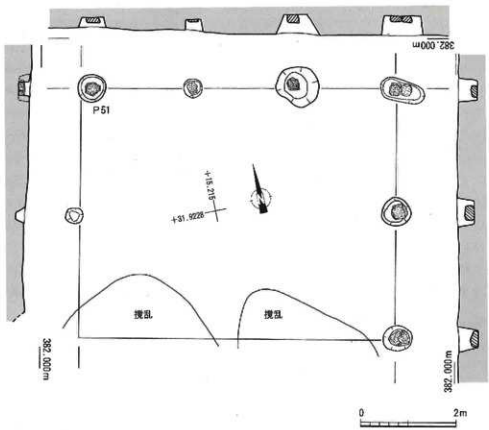
第39図　3号掘立柱建物跡実測図



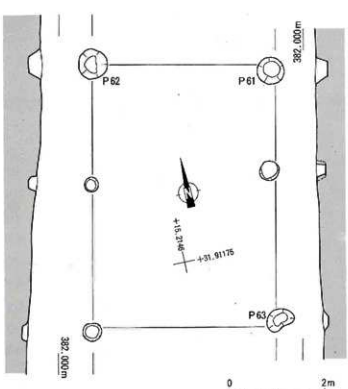
第40図　3号掘立柱建物跡出土遺物実測図

3号掘立柱建物跡出土遺物（遺物番号98～103）

98は白磁碗Ⅵ類－1－bの口縁部片、99・100は土師質小皿、101～103は土師質坏である。98～100はP31から、101～103はP32から出土した。98の口縁部はくの字状に外反する。胎土は灰白色で黒色粒が含まれる。釉は灰白色で薄めに施釉されている。体部内面上半には沈線1条と櫛目がみられる。99の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙褐色である。復元口径は9.2cm、器高は1.0cm、復元底径は7.2cmである。100の胎土には長石、角閃石、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙褐色である。復元口径は9.2cm、器高は1.0cm、復元底径は7.8cmである。101の胎土には長石、角閃石、白色砂粒



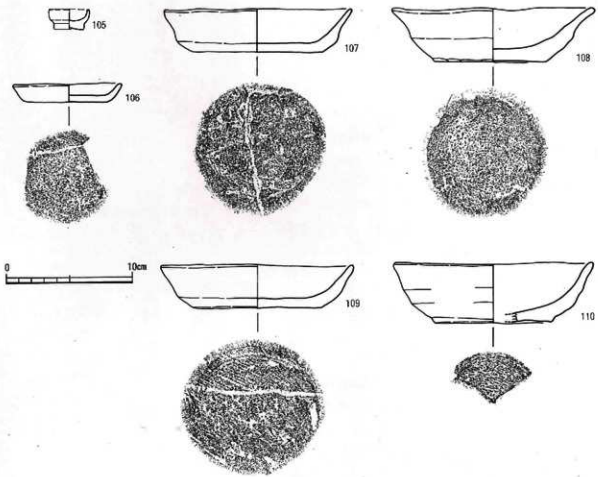
第43図　5号掘立柱建物跡実測図



第44図　6号掘立柱建物跡実測図

6号掘立柱建物跡出土遺物（遺物番号105～110）

105・106はP 61、107～109はP 62、110はP 63から出土した。105は白磁のミニチュアの坏（合子の中子の可能性がある）である。胎土は灰白色で、灰白色の釉が施されている。畳付及び高台内は無釉である。口径は2.8cm、器高は1.6cm、高台径は2.3cmである。106の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに明橙色である。口径は8.3cm、器高は1.4cm、底径は6.5cmである。107の胎土には角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。口径は14.8cm、器高は3.3cm、底径は10.4cmである。108の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。口径は16.0cm、器高は4.1cm、底径は9.0cmである。109の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに明橙色である。口径は15.2cm、器高は3.4cm、底径は10.0cmである。110の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに明橙色である。復元口径は15.8cm、器高は4.6cm、復元底径は9.2cmである。白磁ミニチュア坏は12世紀前半を中心とするする時期、土師質土器は13世紀前半と考えたい。



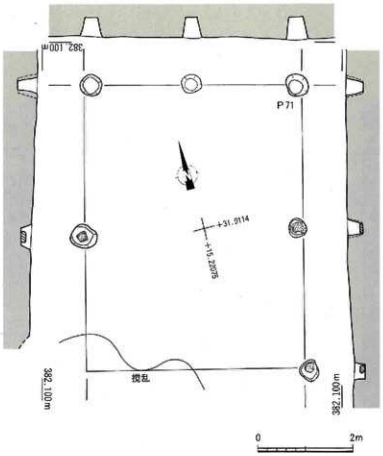
第45図　6号掘立柱建物跡出土遺物実測図

7号掘立柱建物跡

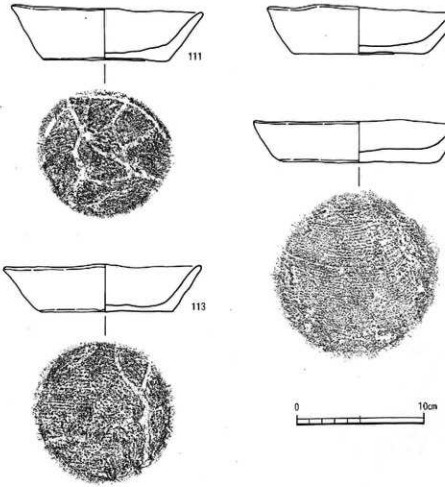
遺構はA区の中央部西側に位置する。平面プランは長方形で、規模は桁行6.01ｍ、梁行4.72ｍである。柱穴内には3箇所に根石を残しており、各柱穴の深さは20～40cm前後となるが、樹根のため南側梁行の柱穴2基を確認できない。

7号掘立柱建物跡出土遺物
（遺物番号 111 ～ 114）

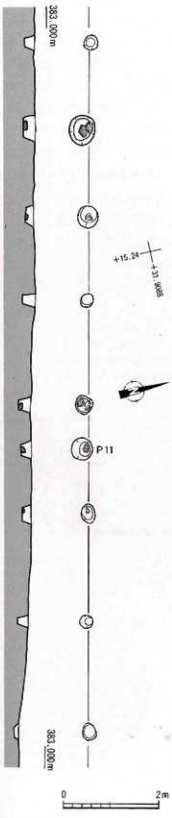
111 ～ 114 は土師質杯で、共にＰ 71 から出土した。111 の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれている。外面調整は回転横ナデと糸切り後、板状圧痕を残している。内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。口径は 15.2cm、器高は 4.3cm、底径は 10.0cmである。112 の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれている。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。口径は 15.2cm、器高は 3.7cm、底径は 10.2cmである。113 の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り後、板状圧痕を残している。内面調整は回転横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。口径は 15.2cm、器高は 3.8cm、底径は 10.5cmである。114 の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに明橙色である。口径は 16.2cm、器高は 3.3cm、底径は 12.6cmである。土師質土器は 13 世紀前半と考えたい。



第 46 図　7 号掘立柱建物跡実測図



第 47 図　7 号掘立柱建物跡出土遺物実測図



第48図　1号棚状遺構実測図

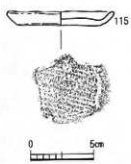
へ）棚状遺構

1号棚状遺構

遺構はA区の中央部から南西部にのびるものである。全長は14.68m、柱穴内には5箇所に根石を残しており、各柱穴の深さは10cm～30cm前後となる。

1号棚状遺構出土遺物（遺物番号115）

115は土師質小皿で、P11から出土した。胎土には長石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り後、板状圧痕を残している。内面調整は回転横ナデと指ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに明橙色である。復元口径は8.6cm、器高は1.0cm、復元底径は6.4cmである。遺物は13世紀前半と考えたい。



第49図　1号棚状遺構出土遺物実測図

2号棚状遺構

遺構はA区の中央部から北側（調査区外に続く可能性がある）にのびるものである。全長は8.98m以上、各柱穴の深さは15cm～40cm前後となる。遺物は出土していない。

3号棚状遺構

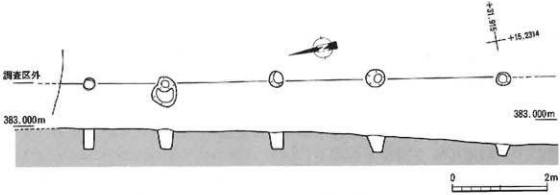
遺構はA区の南西端にのびるものである。全長は5.22m、各柱穴の深さは10cm～35cm前後となる。遺物は出土していない。

4号棚状遺構

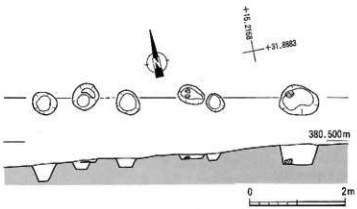
遺構はA区の南西隅にのびるものである。全長は7.16m、柱穴内には1箇所に根石を残しており、各柱穴の深さは20cm～30cm前後となる。遺物は出土していない。

5号棚状遺構

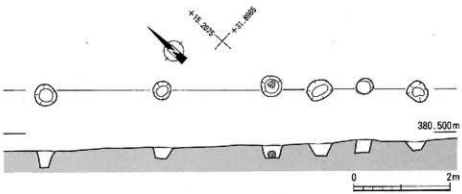
遺構はA区の西端にのびるものである。全長は7.74m、各柱穴の深さは20cm～40cm前後となる。遺物は出土していない。



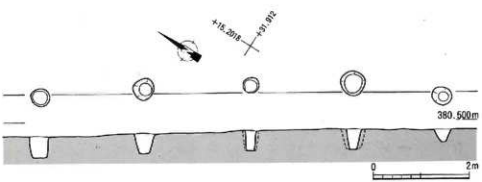
第 50 図　2 号樋状遺構実測図



第 51 図　3 号樋状遺構実測図



第 52 図　4 号樋状遺構実測図

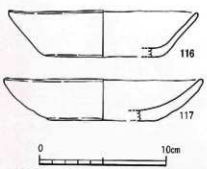


第 53 図　5 号樋状遺構実測図

ト）方形溝状遺構

1号方形溝状遺構

遺構は調査区の北東端から南下し、南西方向に向きを変え南西端の段落ちまでのびている。段落ちの手前約10mからは北西方向にのびる遺構が枝分かれしており調査区外にいたる。この溝状遺構に区画される範囲の規模は調査区内で50m×30m以上、最大幅7.15m、最大深35cmで、A区の所在する主部の規模から半町四方の区画が想定可能となる。区内北東隅の南北にのびる溝状遺構の部分は等高線及び曲輪A内に展開する段差にそって調査区外に続くものと推定される。さらに、枝分かれして南東から北西にのびる溝状遺構部分は等高線と並走する形態となっており、遺構の掘削に起因して段差が生じたものと推定できる。最後に、溝状遺構の規模を確認できた北東から南西にいたる溝状遺構の部分は、等高線とほぼ垂直に交わるかたちでのびている。数条の遺構がのびていることから、改修あるいは同時に溝状遺構が存在した可能性がある。



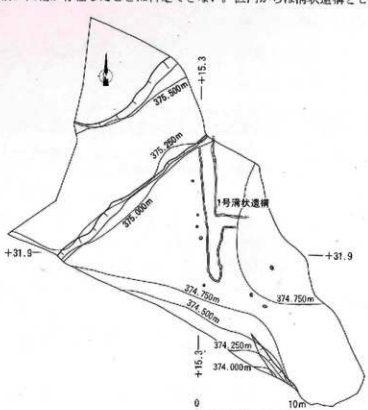
第54図　1号方形溝状遺構出土遺物実測図

1号方形溝状遺構出土遺物（遺物番号116・117）

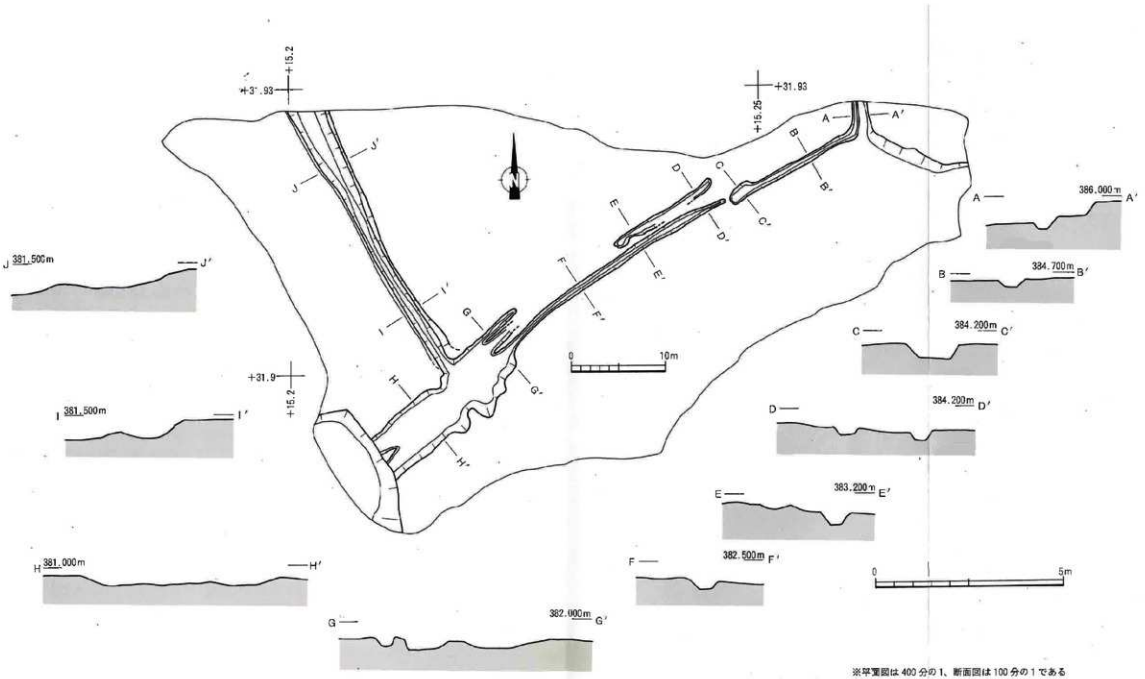
116・117は土師質坏である。116の胎土には長石、角閃石、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は15.0cm、器高は3.5cm、復元底径は9.0cmである。117の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は同転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は15.6cm、器高は3.2cm、復元底径は8.4cmである。遺物は13世紀前半と考えたい。

d．B区の調査

B区は前述したように水田に用いられており、他の曲輪より平坦面の形成が顕著である。遺構検出面（現代の水田層を除去するとただちに検出面となる）にも酸化鉄の沈着がみられることから、原状を止めていない可能性はあるが、水田開削前に曲輪が存在したことは否定できない。区内からは溝状遺構とピット群を確認した。



第55図　B区遺構配置図



第 56 図　1 号方形溝状遺構実測図

イ）溝状遺構

1号溝状遺構

調査区の中央を南北にのびており、ほぼ中央部で東側に枝分かれしている。全長は14.78 m、最大幅1.89 m、最大深5 cmである。遺構は出土遺物と同期に遡る可能性がある。溝状遺構の残存状態から当該区は水平に削平された可能性が極めて高いと考えられる。

1号溝状遺構出土遺物（遺物番号118）

118は唐津碗の底部片である。胎土は灰色で、淡灰緑色の釉が施されている。体部外面下半から底部は無釉である。遺物は1590～1610年の製品である。

第58図　1号溝状遺構出土遺物実測図

ロ）ピット群

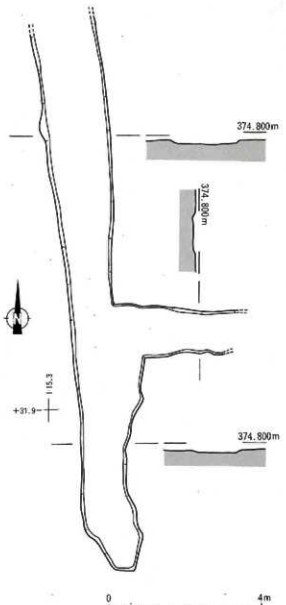
区内から8基確認された。検出面は水田床土直下であるが、遺物は出土していない。ピットの時期を特定するにはいたらなかった。

e．C区の調査

C区の土砂堆積状況は、薄い腐植土（厚さ15cm前後）を除去すると遺構検出面である凝灰岩盤が露出する。切岸・曲輪群はこの凝灰岩を掘削して設けられている。精査の結果、区内からは竪堀状遺構と石列を確認した。

イ）竪堀状遺構

1号竪堀状遺構



第57図　1号溝状遺構実測図

遺構は東西に走る曲輪C の東側に南北に掘られている。遺構は曲輪を完全に断ち切るものでなく、竪堀状遺構と切岸下端の間には1.5 m程の半地な空間がある。規模は全長7.08 m、最大幅1.38 m、最大深62cmである。遺構内には柱穴状の掘り方を10箇所に確認しており、柵状遺構を設けた可能性を指摘したい。

1号竪堀状遺構出土遺物

119～129は輸入磁器、130は須恵器系大甕、131・132は東播系擂鉢、133はフイゴ羽口、134～151は土師質小皿、152～157は土師質坏である。他にも鉄滓を出土しているが、細片のためここでは図示しない。

白磁碗（Ⅳ類：遺物番号119・120）

119・120は玉縁をもつ口縁部片である。119の胎土は灰白色で黒色粒が含まれる。釉は灰白色で厚めに施釉されている。120の胎土は灰白色で黒色粒が含まれる。釉は灰白色で厚めに施釉されている。体部外面下半は無釉である。

白磁碗（Ⅴ類－？：遺物番号121・122）

121の胎土は灰白色である。灰白色の釉が薄くかけられているが、体部外面下半は無釉である。復元口径は16.2cmである。122の胎土は灰白色で、灰白色の釉が薄くかけられている。復元口径は16.0cmである。

白磁碗（Ⅷ類－？：遺物番号 123・124）

123・124 は底部片である。123 の胎土は灰白色で黒色粒が含まれ、灰白色の釉が施されている。内底見込みの釉は輪状にカキ取られ、体部外面下半から高台内まで無釉である。復元高台径 6.8cmである。124 の胎土は灰白色で黒色粒が含まれ、灰白色の釉が施されている。内底見込みの釉は輪状にカキ取られ、体部外面下半から高台内まで無釉である。復元高台径 6.5cmである。

龍泉窯系青磁碗（Ⅰ類－１：遺物番号 125）

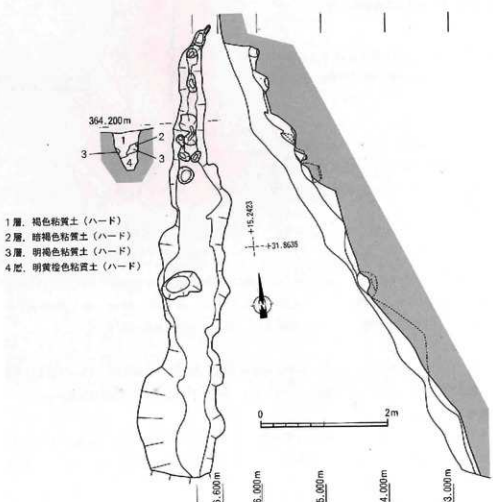
125 は底部片である。胎土は淡灰色で、体部外面下半から高台内は無釉である。釉の発色は青味がかった緑色である。内外面ともに無文である。高台径は 5.4cmである。

同安窯系青磁碗（Ⅰ類－１－ｂ：遺物番号 126）

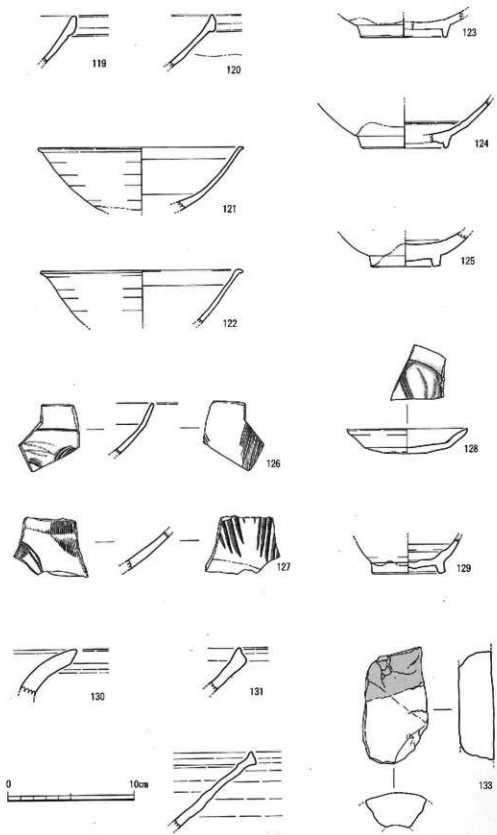
126 は口縁部片である。遺物の胎土は淡灰色で、釉色は黄色味の強い飴色ガラス質の釉である。体部上半で若干内側に屈曲しており、体部内面上半には浅い沈線を施している。内面は劃花文と櫛目、外面は櫛目を観察できる。

同安窯系青磁碗（Ⅲ類－１－ｃ：遺物番号 127）

127 は体部下半片である。胎土は淡灰色で、釉色は黄色味の強い飴色ガラス質の釉である。内面は櫛状の施文具、外面はヘラ状の施文具でそれぞれ花文を施している。



第 59 図　１号竪堀状遺構実測図



第 60 図　1 号竪穴状遺構出土遺物実測図（1）

同安窯系青磁皿（Ⅰ類－１－ｂ：遺物番号 128）

128 の胎土は淡灰色である。釉色は黄色味の強い飴色ガラス質の釉で、体部外面下半から底部は無釉である。内面は劃花文と櫛目、外面は無文である。復元口径は 9.4cm、器高は 2.0cmである。

白磁瓶類（分類不明：遺物番号 129）

129 の胎土は灰白色で黒色粒が含まれる。薄い灰白色の釉が施されているが、体部外面下半から高台内は無釉である。復元高台径は 5.8cmである。

須恵器系大甕（遺物番号 130）

130 は口縁部片である。内外面ともに回転ナデを施している。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰色である。

東播系擂鉢（遺物番号 131・132）

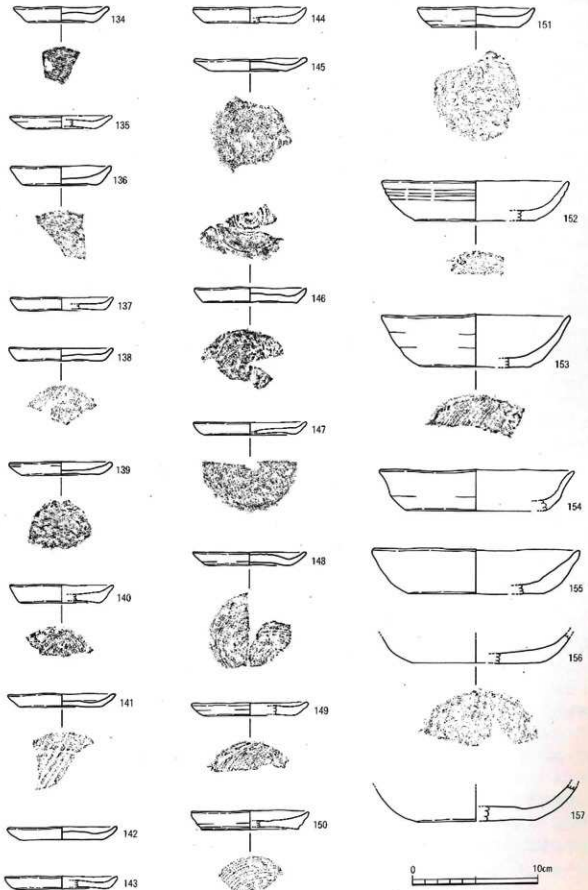
131 は口縁部片、132 は口縁部から体部にいたる部分である。131 は内外面ともに回転ナデを施している。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰色である。132 は内外面ともに回転ナデを施している。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色である。

フイゴ羽口（遺物番号 133）

133 は羽口片である。胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は不定方向ナデ、内面調整は不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面上半部に煤の沈着と変質がみられる。

土師質小皿（遺物番号 134 ～ 151）

134 の胎土には長石、金雲母、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。調整は外面底部に糸切り痕を残すほかは回転横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は 7.6cm、器高は 1.2cm、復元底径は 5.4cmである。135 の胎土には角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに明褐色である。復元口径 8.2cm、器高は 1.0cm、復元底径は 5.6cmである。136 の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに明褐色である。復元口径は 8.0cm、器高は 1.5cm、復元底径は 6.0cmである。137 の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデを残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに明褐褐色である。復元口径は 8.4cm、器高 1.0cm、復元底径は 6.8cmである。138 の胎土には長石、角閃石、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は 8.2cm、器高は 1.0cm、復元底径は 6.8cmである。139 の胎土には長石、白色砂粒、黒色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り後、板状圧痕を観察できる。内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は 8.2cm、器高は 1.1cm、復元底径は 6.0cmである。140 の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り後、板状圧痕である。内面調整は回転横ナデと指ナデを残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰褐色である。復元口径は 8.4cm、器高は 1.4cm、復元底径は 6.4cmである。141 の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り後、板状圧痕である。内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は 8.4cm、器高は 1.0cm、底径は 6.4cmである。142 の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り後、板状圧痕を残している。内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに明橙色である。口径は 8.7cm、器高は 1.0cm、底径は 6.6cmである。143 の胎土には角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙褐色である。復元口径は 9.0cm、器高は 1.0cm、復元底径は 7.2cmである。144 の胎土には角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は 9.0cm、器高は 1.2cm、復元底径は 7.0cmである。145



第 61 図　1 号竪堰状遺構出土遺物実測図（2）

の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれる。外面調整は同転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰褐色である。復元口径は9.0cm、器高は1.0cm、復元底径は6.0cmである。**146**の胎土には白色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は同転横ナデとロクロ目を残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は9.2cm、器高は1.2cm、復元底径は7.4cmである。**147**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は同転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。口径は9.0cm、器高は1.0cm、底径は7.1cmである。**148**の胎土には長石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は同転横ナデと糸切り痕、内面調整は同転横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は9.0cm、器高は1.0cm、復元底径は6.8cmである。**149**の胎土には角閃石が含まれる。外面調整は同転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。口縁部外面には煤が付着している。復元口径は9.2cm、器高は1.0cm、復元底径は7.2cmである。**150**の胎土には長石、角閃石が含まれる。外面調整は同転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は9.4cm、器高は1.4cm、復元底径は7.8cmである。**151**の胎土には長石、角閃石、金雲母、白色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。口径は9.3cm、器高は1.6cm、底径は7.0cmである。

土師質坏（遺物番号152～157）

152の胎土には角閃石、長石、白色砂粒が含まれる。外面調整は同転横ナデと糸切り痕、内面調整は同転横ナデを残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は14.8cm、器高は3.2cm、復元底径は9.6cmである。**153**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は同転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は14.8cm、器高は4.1cm、復元底径は8.6cmである。**154**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。調整は内外面ともに回転横ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は15.4cm、器高は3.2cm、復元底径は11.0cmである。**155**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は16.4cm、器高は3.5cm、復元底径は10.6cmである。**156**の胎土には角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は同転横ナデと糸切りの後、板状圧痕である。焼成は良好で、色調は内外面ともに明褐褐色である。復元底径は10.0cmである。**157**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は同転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデと指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元底径は9.4cmである。

輸入磁器は同安窯系青磁Ⅰ類が出現していることから12世紀後半を遡ることはない。土師質Ⅰ器は13世紀前半と考えられることから、遺物群の構成は同時期のものと考えられる。

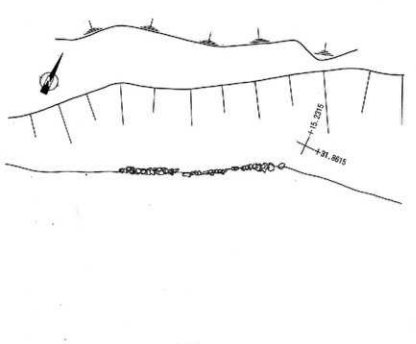
ロ）石列

1号石列

石列は曲輪Cのほぼ中央部に位置するもので、表土（腐植土）を取り除くと直ちに確認された。列は全長6.45mで、切岸下場にそうように設けられており凝灰岩盤直上に並べられていた。石材は岩盤と同質の凝灰岩角礫で、最大のもので30cm大、小さいものでも拳大である。石列に伴う遺物は出土していない。

f．D区の調査

D区は土砂堆積状況は、薄い腐植土（10cm前後）を除去すると遺構検出面である凝灰岩盤が露出する。曲輪群はこの凝灰岩を開削して設けられている。区内からは石積と土坑を確認した。



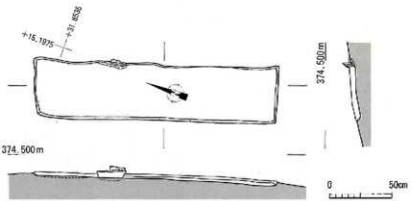
第62図　1号石列位置図

第63図　1号石列実測図

イ）石棺

1号石棺

石棺は曲輪Dの中央部に位置するものであるが、曲輪開削時に大きく削平されたものと推定される。残存するのは浅い掘り方及び棺材と思われる安山岩の割り石片である。掘り方の平面プランは長方形で、確認できる規模は1.91 m × 46cm、最大深6 cmである。時期を特定できる遺物は出土していない。北隣の尾根筋に広がる瀬戸墳墓群と1号石棺は主軸をあわせないが、D区尾根筋にも同様な墳墓群が存在した可能性は否定できない。



第 64 図　1 号石棺実測図

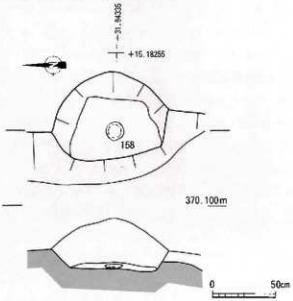
ロ）土坑

1 号土坑

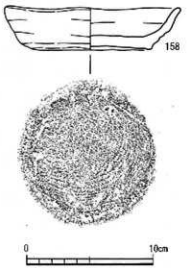
土坑は曲輪Dの東側切岸中央部の下場付近に設けられている。確認できる規模は 68cm× 95cm、最大深 40cmである。土坑掘削後切岸を設けたのか、切岸に土坑を掘り込んだかは不明である。

1 号土坑出土遺物（遺物番号 158）

158 は土師質坏である。胎土には長石、石英、角閃石、茶色砂粒が含まれている。外面調整は口縁部から体部が粗い回転横ナデ、底部には糸切り痕を明瞭に残している。内面調整は口縁部から体部が粗い横ナデ、底部は指ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに明橙色である。口径は 13.8cm、器高は 3.2cm、底径は 9.6cm である。遺物は 13 世紀中頃と考えたい。



第 65 図　1 号土坑実測図



第 66 図　1 号土坑出土遺物実測図

g．E 区の調査

E 区の土砂堆積状況は、薄い腐植土（厚さ 10cm前後）を除去すると曲輪掘削面である凝灰岩盤が露出する。区内から遺構・遺物は確認されていない。

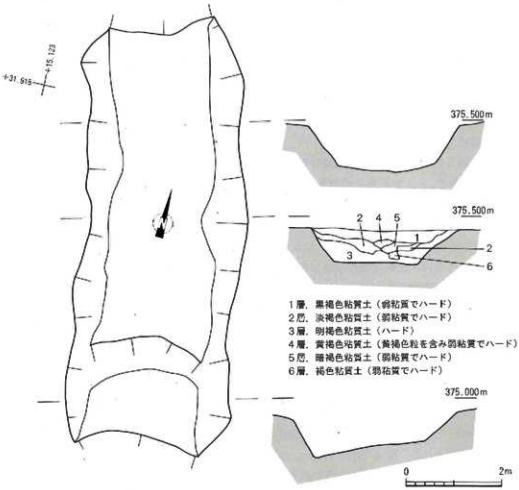
h．F 区の調査

F 区の土砂堆積状況は、腐植土（厚さ 20cm前後）を除去すると遺構検出面である地山粘土層が露出する。曲輪群はこの粘土層を掘削して設けられているが、形成は全体的に未熟で緩斜面をもって構成されている。区内からは堀切を確認している。

イ）堀切

1 号堀切

堀切は瀬戸遺跡の西端に位置するもので、遺構から西に 10 mすすむと瀬戸墳墓群となる。確認できる規模は全長 9.30 m、最大幅 3.34 m、最大深 98cmである。遺構南側には比高差 70cmの段差を有している。瀬戸墳墓群の残存状態から堀切以西の開削は最小限度のものと考えられる。遺構内から遺物は出土していない。



第 67 図　1 号掘切実測図

i．G区の調査

G区はの上砂堆積状況は，薄い腐植土（15cm前後）を除去すると整地層検出面と凝灰岩礫が岩盤状に露出する。整地層は馬蹄状地形内で確認されたもので，瀬戸墳墓群及び曲輪D・Eの尾根筋間の谷地形最深部にできた浅い谷部を整地したものと推定される。

イ）整地層

1 号整地層

整地層の確認には 1 号トレンチを設定して範囲の確定を実施した。第 68 図より 10 層・11 層が整地された層と推定され，ピット及び遺物を確認している。整地層の広がりは南北 35 m，東西 20 mの 700㎡程と推定される。このため，曲輪Gの範囲は縄張り図（第 1 図）より縮小する可能性がある。

1 号整地層出土遺物（遺物番号 159 ～ 178）

159 ～ **176** は輸入磁器，**177** はフイゴ羽口，**178** は石鍋である。遺物は共に 11 層（第 68 図）の下層から出土している。

同安窯系青磁碗（Ⅰ類－1－b：遺物番号 159）

159 は口縁部片である。胎土は淡灰色で，釉色は黄色味の強い鮎色ガラス質の釉である。体部上半で若干内側に屈曲しており，体部内面上半には浅い沈線を有している。外面には櫛目が確認できる。

龍泉窯系青磁碗（Ⅰ類－3：遺物番号 160）

160 の胎土は淡灰白色である。釉の発色は青味がかった緑色で，体部外面下半から高台内にかけては無釉である。内面にはヘラ状及び櫛状施文具で花文を施している。

龍泉窯系青磁碗（Ⅲ類－2：遺物番号 161）

161 の胎土は灰白色である。釉色は黄色味がかったくすんだ緑色で，外面には鎬蓮弁文を施している。

白磁碗（Ⅳ類－？：遺物番号 162・163）

162・163 は玉縁の口縁部片である。胎土は共に灰白色で黒色粒が含まれる。釉はそれぞれ灰白色で厚めに施釉されている。

白磁碗（Ⅴ類－？：遺物番号 164）

164 は口縁部片である。胎土は灰白色で、釉色はやや青味を帯びた灰白色（青磁的発色）である。体部内面上半には浅い沈線が確認できる。

白磁碗（Ⅴ類－３あるいはⅤ類－４：遺物番号 165）

165 は口縁部片である。胎土は灰白色で黒色粒が含まれる。釉色は灰白色で、内面体部上半には浅い沈線が確認できる。

白磁碗（Ⅴ類－４－ａ：遺物番号 166）

166 は口縁部から体部下半にいたる部分で、胎土は灰色である。釉色は灰白色で、体部外面下半は無釉である。内面には沈線が２条、外面には沈線４条が確認できる。復元口径は 16.8cmである。

白磁皿（Ⅵ類－１－？：遺物番号 167）

167 は体部下半から底部にいたる部分で、胎土は灰白色である。釉色は黄色味の強い白色で、外面体部下半から底部は無釉である。底径は 3.1cmである。

白磁皿（Ⅵ類－２－ｂ：遺物番号 168）

168 の胎土は淡灰色で黒色粒が含まれる。釉色は黄色味がかった白色で、外面底部が無釉である。内底見込みには草花文のスタンプがみられる。復元口径は 20.2cm、器高は 1.8cm、復元底径は 4.6cmである。

白磁皿（Ⅲ類－２：遺物番号 169・170）

169 の胎土は灰白色で黒色粒が含まれる。釉は黄色味がかった白色で体部外面下半から高台内は無釉である。内面には浅い沈線がみられる。復元口径は 10.0cm、器高は 3.0cm、高台径は 4.0cmである。170 の胎土は灰白色で黒色粒が含まれる。釉は黄色味がかった白色で体部外面下半から高台内は無釉である。復元口径は 14.1cm、器高は 2.6cm、高台径は 6.1cmである。

白磁碗（Ⅸ類－？：遺物番号 171・172）

171・172 は口縁部片である。それぞれ口縁端部の釉をカキ取る口禿のものである。共に胎土は灰白色で、釉は薄く空色を帯びた灰白色である。

白磁皿（Ⅸ類－？：遺物番号 173）

173 は口縁部片である。遺物は口縁端部の釉をカキ取る口禿のものである。胎土は灰白色である。釉はやや厚目にかかり、空色を帯びた白色である。

白磁皿（Ⅸ類－１－？：遺物番号 174）

174 は口縁端部の釉をカキ取る口禿のもので、内底見込みには劃花文がみられる。口縁部には輪花を確認できる。胎土は灰白色で、釉は薄く空色を帯びた白色である。復元口径は 8.5cm、器高は 1.3cm、復元底径は 6.0cmである。

白磁碗（分類不明：遺物番号 175・176）

175 は口縁部から体部下半にいたる部分である。胎土は灰白色で黒色粒が含まれる。釉色は黄色味がかった白色で、体部外面下半は無釉である。体部内面上半には浅い沈線がみられる。176 は体部下半から高台部にいたる部分である。胎土は灰白色で黒色粒が含まれる。釉色は黄色味がかった白色で、体部外面下半から高台部は無釉である。復元高台径は 4.8cmである。

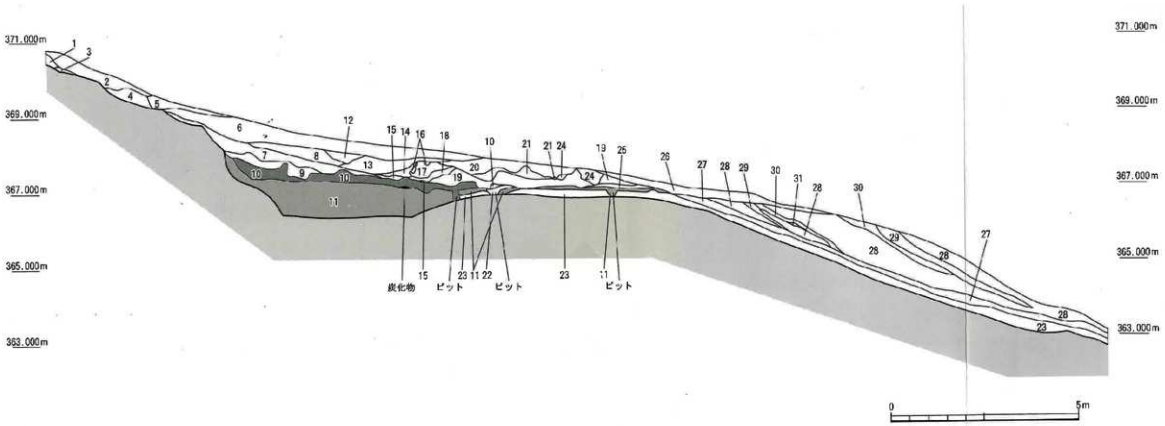
フイゴ羽口（遺物番号 177）

177 は羽口片である。胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は不定方向ナデ、内面調整は不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面上半部に煤の沈着と赤変がみられる。

石鍋（遺物番号 178）

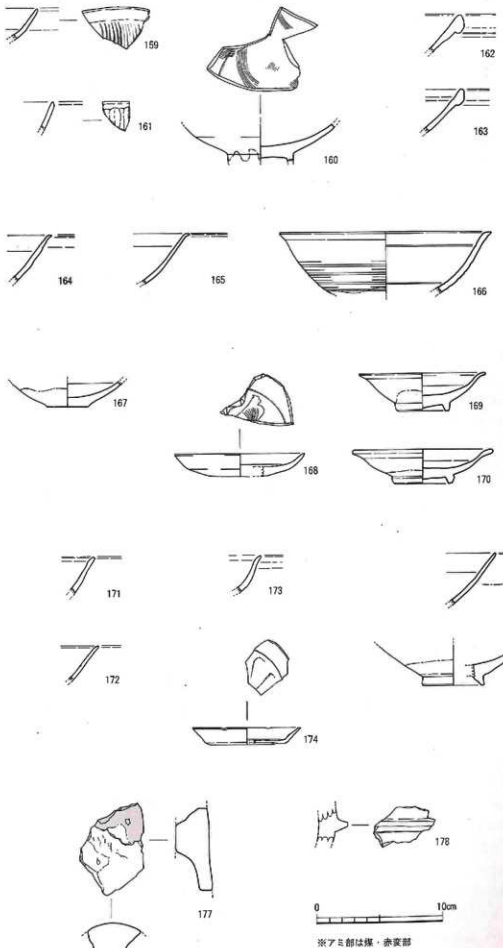
178 は滑石製で外面下半に煤の付着がみられる。

整地層（11 層）から出土した輸入磁器をみると龍泉窯系青磁碗Ⅲ類と白磁Ⅸ類が出現していることから、遺物群は 13 世紀中頃から 13 世紀後半の構成と考えたい。



1層．明黄褐色土　ハードな粘土質。
2層．暗褐色土　ハードな粘土質、土器細片（時期不明）と焼土粒を含む。
3層．灰褐色土　炭色砂粒を含む。
4層．暗褐色土　ハードな粘土質。
5層．明黄褐色土　粗い粘土。
6層．明赤褐色土　きめ細かくハードな粘土、土器細片（時期不明）が含まれる。
7層．黄褐色土　きめ細かい粘土。
8層．暗灰褐色土　粗い粘土で黒色の砂粒を含む。
9層．黄褐色土　7層よりきめ細かい粘土。
10層．淡黄褐色土　暗く脆い粘土層で、二回目の整地層と推定される。11層に掘り込まれたピットには10層が流れ込んでいることから、整地後掘り込みを行った可能性がある。
11層．暗黄褐色土　砂粒を含む粘土で最上面に炭化物が広がる。一回目の整地層と考えられる。23層に掘り込まれたピットには、11層が流れ込んでいることから、整地後掘り込みを行った可能性がある。
12層．灰褐色土　きめ細かくハードな粘土。
13層．黒褐色土　赤色粒を多量に含むきめ細かい粘土。
14層．黒色土　きめ細かくハードな粘土。
15層．橙色土　粗く脆い粘土。
16層．暗褐色土　きめ細かくハードな粘土。
17層．黄褐色土　粗く砂粒を含む粘土。
18層．明黄褐色土　きめ細かくハードな粘土。
19層．明褐色土　きめ細かく砂粒を含むハードな粘土。
20層．橙色土　きめ細かくハードな粘土で砂粒を僅かに含む。
21層．暗黄褐色土　きめ細かくハードな粘土で砂粒を僅かに含む。
22層．褐色土　きめ細かくハードな粘土。
23層．暗灰褐色土　きめ細かくハードな粘土。
24層．暗黄褐色土　きめ細かくハードな粘土。
25層．黄褐色土　きめ細かくハードな粘土。
26層．暗褐色土　きめ細かくハードな粘土、遺物（時期不明）を僅かに含む。
27層．黒色土　きめ細かくハードな粘土。
28層．明黄褐色土　きめ細かくハードな粘土、黄褐色粒を僅かに含む。
29層．黒褐色土　きめ細かくハードな粘土、黄褐色粒を僅かに含む。
30層．褐色土　きめ細かくハードな粘土、黄褐色粒を僅かに含む。
31層．黄褐色土　粗くハードな粘土。

第68図　1号整地層土層実測図



第 69 図　1 号整地層出土遺物実測図

j．表面採取遺物（遺物番号 179 ～ 193）

179 ～ 182 は土師質坏、183 ～ 188 は輸入磁器、189 は石鍋、190 は有舌尖頭器未製品あるいは天地を逆にして縦形石匙、191 ～ 193 は砥石である。

土師質坏（遺物番号 179 ～ 182）

遺物はともにC区の表土除去作業中に出土している。179 の胎土には角閃石、白色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は同転横ナデとロクロ目を残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。復元底径は 9.2cmである。180 の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は同転横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。復元口径は 14.8cm、器高は 2.8cm、復元底径は 10.0cmである。181 の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は同転横ナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元口径は 15.0cm、器高は 3.5cm、復元底径は 9.8cmである。182 の胎土には角閃石、白色砂粒が含まれる。外面調整は回転横ナデと糸切り痕、内面調整は回転横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。復元口径は 15.2cm、器高は 3.9cm、復元底径は 9.6cmである。遺物は 13 世紀前半と考えたい。

白磁碗（Ⅴ類－？：遺物番号 183）

183 の胎土は灰色で、灰白色の釉が薄くかけられている。口縁部は外反し、端部を水平にするものである。体部内には浅い沈線が 2 条みられる。遺物は 12 世紀前半に増加する遺物である。遺物はA区から採取している。

白磁碗（Ⅻ類－？：遺物番号 184）

184 は底部片である。遺物の胎土は灰白色で黒色粒が含まれ、灰白色の釉が施されている。内底見込みには浅い段を有しており、段内側の釉を輪状にカキ取っている。体部外面下半から高台内は無釉である。復元高台径は 6.7cmである。遺物は 12 世紀中頃から後半にかけて増加する遺物である。遺物はA区から採取している。

龍泉窯系青磁坏（Ⅲ類－？：遺物番号 185）

185 は口縁部片である。整地層トレンチ掘削時の廃土から出土したもので、遺構に伴う可能性がある。胎土は淡灰色で、釉の発色は青味を帯びた濃い緑色である。遺物は 13 世紀後半に増加する遺物である。

青白磁合子（遺物番号 186）

186 は蓋である。胎土は灰白色で、外面は淡青色透明釉がかけられているが、内面は無釉である。遺物はA区から採取している。

白磁合子（遺物番号 187）

187 は蓋である。胎土は灰白色で、内外面ともに淡灰白色の釉がかけられている。復元口径は 6.4cmである。遺物はA区から採取している。

染付（青花）碗（遺物番号 188）

188 は見込み部分が緩やかに盛り上がる饅頭心タイプの碗である。遺物は 16 世紀後半の製品である。遺物はD区から採取している。

石鍋（遺物番号：189）

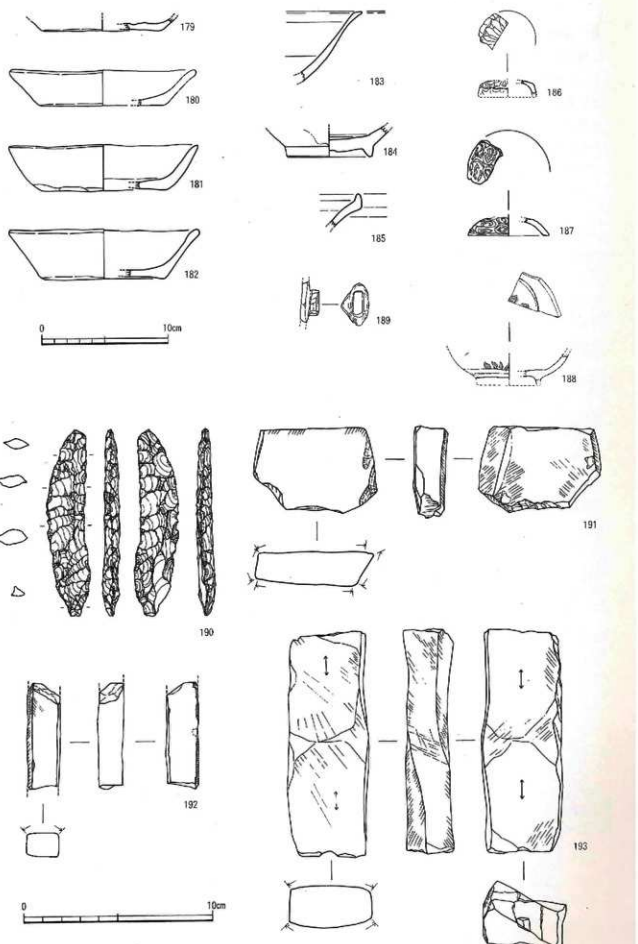
189 は滑石製で外面には煤が付着している。遺物はA区から採取している。

有舌尖頭器未製品あるいは縦形石匙（遺物番号 190）

190 は流紋岩製の有舌尖頭器未製品あるいは縦形石匙である。長さ 9.8cm、幅 1.9cm、厚さ 0.8cm、重さ 18.4 g である。遺物はA区 3 号掘状遺構精査中に出土した遺物である。

砥石（遺物番号 191 ～ 193）

191 は頁岩製である。長さ 4.4cm、幅 6.4cm、厚さ 1.8cm、重さ 78.6 g である。192 は頁岩製である。長さ 5.6cm、幅 1.8cm、厚さ 1.2cm、重さ 15.1 g である。193 は頁岩製である。長さ 11.8cm、幅 4.3cm、厚さ 2.2cm、重さ 183.2 g である。遺物は共にA区から採取している。

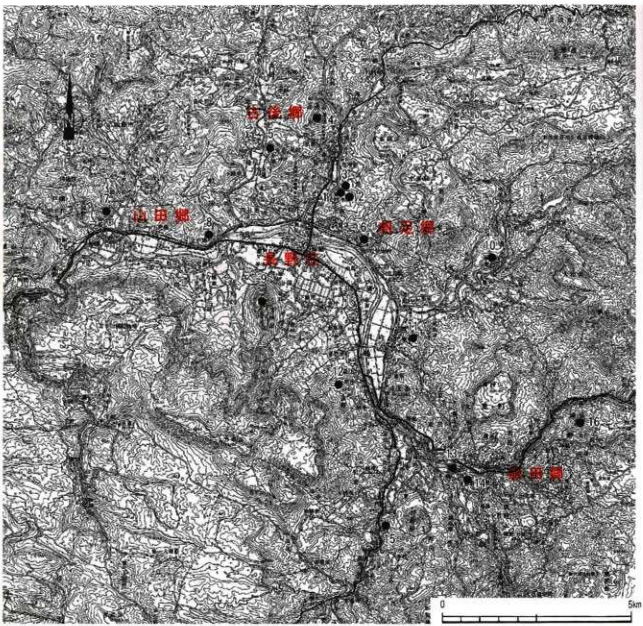


第 70 図　表面採取遺物実測図

3．小結

瀬戸遺跡A区より確認された弥生時代の住居群は、前述したように住居主軸方位をほぼそろえることから中期末から後期初頭[1]を中心とした時期に営まれていたとした。注目されるのは2号竪穴住居跡から出土した石庖丁と木の実の組合せで、水田以外にも牛業が存在した可能性を示唆している。さらに水田について考えてみると、陣ケ台遺跡で想定された低湿な谷部に水田が展開[2]したとする考察から、瀬戸遺跡東側には現状でも沖積谷に低湿な谷部が随所に存在しており、同域に水田が設けられた可能性が高いといえる。また、治別当遺跡でも谷部に水田開発[3]の可能性を指摘していることから、谷部の水田開発が盛んであった様子が窺える。

瀬戸遺跡で確認された弥生時代の遺構・遺物は1号～3号竪穴住居跡から出土した遺物のほかは確認されてい



1．瀬戸遺跡　2．帆足城跡　3．平田山土塁　4．角牟礼城
5．古後城　6．岩窟墓　7．魚返城　8．野田城
9．玖珠城　10．松木城　11．恵良城　12．向城
13．釘野城　14．野上城　15．岐部城　16．野上山城

第71図　玖珠盆地内主要城郭分布図

ない。古墳時代になると瀬戸墳墓群残存状況及び住田跡とD区1号石棺の検出をみる。その後は中世を中心とした時期以降に当該地区は開削がすすんだものと推定される。以上の様に削平のため断定的なことには言及できないが、D区1号石棺の存在から瀬戸墳墓群と同様の埴墓群がD区に存在した可能性は否定できない。

中世を中心とした時期の遺構についてみると、遺構主軸方位が北を意識した遺構群（A区1号～7号掘立柱建物跡、A区1号～3号柵状遺構、A区1号大型竪穴、C区1号竪堀状遺構（束に10度前後偏るが、前記した遺構群よりは東への偏りが少ない））があげられる。遺構群は出土遺物から12世紀後半から13世紀前半を中心とした時期に成立したと考えられる。つづいて、D区1号土坑は出土遺物から13世紀中頃を中心とした時期に設けられたものと考えられ、同期にはA区よりつづく尾根（D区）にも開発がすすんでいた可能性を窺わせる。また、G区整地層は出土遺物から13世紀後半以降に設けられたと考えられる。以上の様に13世紀代を通じて瀬戸遺跡の拡充[4]がすすめられたと考えられる。また、主郭Aの切岸面と遺構主軸方位が一致する遺構群（1号方形溝状遺構、1号・2号竪穴、4号・5号柵状遺構）は切岸が成立した時期に設けられたものと推定され、瀬戸遺跡は同期には現状に近いものになったと推察される。その後、拡大してきた瀬戸遺跡は土塁を擁した前述の平田山土塁や後述の帆足城跡の整備・拡充をすすめていくのではないだろうか。調査区から出土した遺物についてみるとそのほとんどが北を意識した遺構群から確認されている。遺物の種類をみると輸入陶磁器、土師質坏、土師質小皿、東播系片口鉢・擂鉢、土師質土鍋、石鍋、須恵器系大甕、フイゴ羽口などその構成は、日常生活具を中心とするものであり、一般的な山城に比べて遺物の出土量が多いことは防御よりも居住を目的とした施設（北を意識した遺構群）がまず成立したものと考えられる[5]。

瀬戸遺跡及びその周辺で確認された城郭は、地名から帆足氏に関係するものとして広く周知されている[6]が、玖珠町内において発掘調査の成果から同期の遺構・遺物を確認しているのは筏株山城跡、小出遺跡群、陣ケ台遺跡と数少ない。しかしながら陣ケ台遺跡の濠跡[7]から当時の丘陵や台地上には大規模に手が加えられていった様子が窺い知れる。現存する主要な城郭をみても玖珠盆地あるいはそれに流れこむ小河川がつくりだす沖積谷を見下ろすことができる丘陵、台地上にそれぞれ城跡が確認されていることから、各時代を通して盛んに丘陵及び台地を利用したものと考えられる。

このような沖積谷を見下ろす城郭のなかには瀬戸遺跡に類似（主郭を切岸及び帯曲輪と堀切で防御するタイプ）するものがいくつか確認されている。九重町の恵良城発掘調査[8]から同城は12世紀後半から13世紀前半及び16世紀代に利用されたものとして報告された。この他、発掘調査は実施されていないが玖珠町の古後城と魚返城も類似した城郭としてあげられ、恵良城と同様に12世紀後半から13世紀前半に成立し戦国期まで用いられた可能性を持つ。また、九重町の岐部城・松木城、玖珠町の角牟礼城には中世及び戦国期の縄張りを認めることができる。以上の様に、玖珠盆地内にみられる城の起源は12世紀後半から13世紀前半に遡り、戦国期にいたるまで整備・拡充されたものが相当数存在するようである。

盆地内に城が成立した平安時代末期から鎌倉時代初期にかけては、豊後清原一族が玖珠郡の実質的な支配権を握り、下地を支配していた。しかしながら、弘安8年（1285年）の『豊後国図田帳』にみえる豊後清原一族の小田・横尾・魚返（以上山田郷）、古後・長野・平井・志津里・原口・今村（以上古後郷）、帆足・森・片平田・岩室（以上帆足郷）諸氏の名は鎌倉～室町～戦国期を通じて一部が文献上に登場するものの、おのおのの実態については充分に把握しきれていないのが実情である。この諸氏の乱立について清原氏の分割相続制[9]と推定する考えに基づいて、玖珠盆地内に分布する城郭に諸氏が係わり沖積谷ごとに城跡が出現したとする考えは、城跡の所在する各地名からも素直に理解できるものである。

瀬戸遺跡においては清原氏の分割相続制を契機に北を意識した遺構群が出現し、つづいてD区、G区、切岸を設けた城郭として拡大していき、これを中心に平田山土塁、帆足城跡を整備・拡充し一体の城郭として用いていたのではないかと考えたい。築城については帆足氏単独によることも考えられるが、玖珠町の玖珠城の縄張りを鑑み一つの主体によって築城されたのではなく、帆足氏と同等規模の玖珠郡衆の諸氏が連合して一つの城域を形成するような縄張りの可能性を指摘したい[10]。

以上の様に限られた発掘調査の成果をもとに既存の研究・発掘調査の成果を参考に推測することしかできないが、瀬戸遺跡・平田山土塁・帆足城跡の形態をきっかけとして、僅かながら当地域の諸相を解きあかす機会が与えられたようである。真相は今後の考究によるものとしたい。

註)

(1) 坂本嘉弘 『神ケ倉遺跡』 玖珠町教育委員会 1999 の 108～114 頁で試された「玖珠盆地とその周辺の弥生時代から古墳時代の土器編年」によれば、瀬戸遺跡A区1号竪穴住居跡の出土遺物1～4は弥生時代小期末から後期初頭に比定されよう。

(2) 註1で弥生時代の環濠住居群を確認している。また、同書 116 頁では「平地の低湿地や、山麓から流れだす谷川沿い、台地間の小さな谷間など、湧水が安易な箇所に対して、積極的な水田開発を行い、その結果として、弥生時代後期の集落の拡大につながった」としている。瀬戸遺跡内側の森川沼湿原に水田開発は想定しにくいが、東側の沖積谷は現在でも随所に湧水点があり前訳の水田開発の条件にあてはまる。

(3) 染矢孔憲 『治別当遺跡』 大分県教育委員会 1999 の 51 頁で「B区北側断面区外の谷部に起因したプラント・オパール のポジティブな反応」とし古墳時代前期初頭以前の水田が谷部に開発された可能性を指摘している。

(4) 前述した瀬戸堰遺跡からも 13 世紀代の土師質土器（本書 24 頁第9図：遺物番号 15・16）が採取されており、同時期に溝草群周辺にも開発が及んでいたことを確わめる。

(5) 玉永光洋 「大分県の城郭研究メモ1－城郭から見た大友権力と玖珠－」『大分縣地方史』第 157 号 大分県地方史研究会 1995 4～6頁で瀬戸遺跡は紹介されており、本郷においても各件で遺跡の詳細について同氏の御教示をいただいた。

(6) 暮 義雄 「中世山城跡（10）菅城」『玖珠郡史談』第 11 号 玖珠郡史談会 1984

(7) 渋谷忠章他 『伐株山城跡』 玖珠町教育委員会 1984

(8) 清水宗昭他 『小出遺跡群』I 玖珠町教育委員会 1987

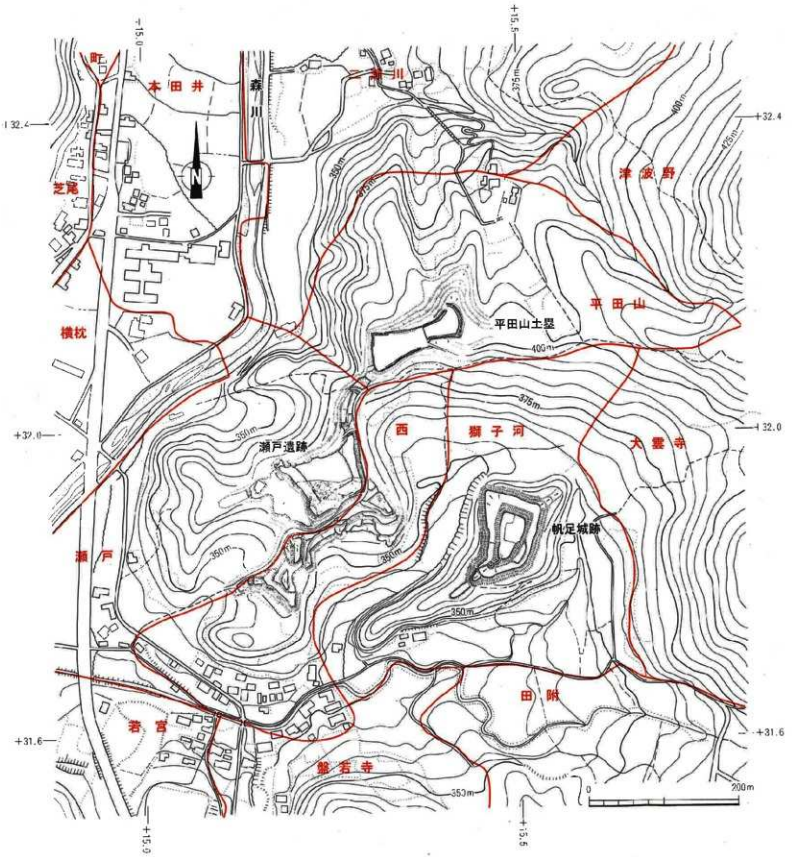
(9) 註1の 74・75 頁で 12 世紀後半から 13 世紀前半の遺物を伴う溝跡を確認している。溝は伐採山よりつづく尾根筋上に設けられているもので、全長は 80 m、幅 3.5～5 m、深さ 0.8～1.2 mである。この溝に関連する遺構として溝の内側と想定される部分に盛地面とその東側に浅い溝を確認しており、浅い溝の堆積状態から土手を築いた可能性を示している。

(10) 竹岩孝一郎 『恵良城跡－宅地造成工事に伴う発掘調査概報－』 九重町教育委員会 1993 13 頁

(11) 渡辺遵夫 「豊後玖珠郡の荘園化と領開－特に郡司の立券と解体について－」『大分縣地方史』第 115 号 大分県地方史研究会 1984 19 頁

(12) 註5の9頁で玖珠盆地の各谷戸に城館が次々に成立していく背景に平安末から鎌倉初期にかけて行なわれた豊後清原氏による下地の分割相続にその契機を求めている。

(13) 註5の 14 頁で玖珠町に所在する玖珠城の縄張りについて「ついし四つの主体が並立しそれぞれに関連する曲輪が連合して一つの城郭を形成するような縄張りと言えよう。別言すれば、戦国期の玖珠城は一つの強力な権力主体によって築城されたのではなく、同等規模の氏族の連合によると考えられる。」としている。



第 72 図　瀬戸遺跡・帆足城跡・平田山土塁縄張図及び周辺字図

写　真　図　版

瀬戸遺跡遠景
（北から）

瀬戸遺跡遠景
（南から）

瀬戸遺跡Ａ区全景（垂直）

図 版　4

瀬戸遺跡A区・D区遠景
（西から）

瀬戸遺跡D区・E区遠景
（西から）

瀬戸遺跡E区遠景
（西から）

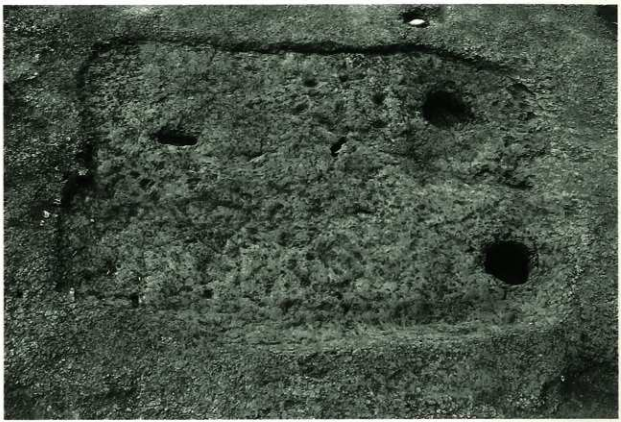
瀬戸遺跡B区帯曲輪（西から）

瀬戸遺跡G区整地層（東から）

図 版 6

瀬戸遺跡A区遠景（東から）

瀬戸遺跡A区遠景（北から）



瀬戸遺跡Ａ区１号竪穴住居跡

瀬戸遺跡Ａ区２号竪穴住居跡

瀬戸遺跡A区2号竪穴住居跡石包丁出土状況

瀬戸遺跡A区3号竪穴住居跡

瀬戸遺跡Ａ区１号大型竪穴

瀬戸遺跡Ａ区１号・２号竪穴

瀬戸遺跡B区1号溝状遺構

瀬戸遺跡C区竪掘状遺構

瀬戸遺跡D区東側切岸・帯曲輪

瀬戸遺跡D区西側切岸

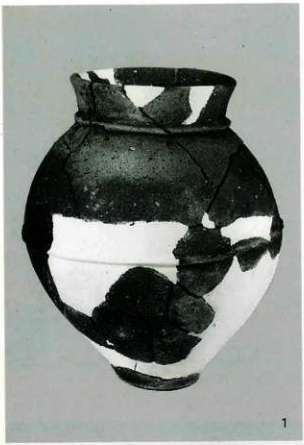
瀬戸遺跡D区１号土坑遺物出土状況

瀬戸遺跡E区全景

瀬戸遺跡Ｆ区掘切（東から）

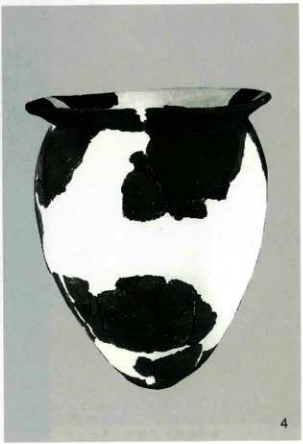
瀬戸遺跡Ｆ区掘切（南から）

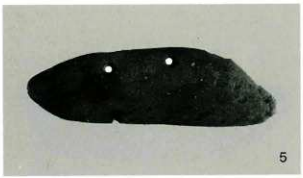
図 版 14

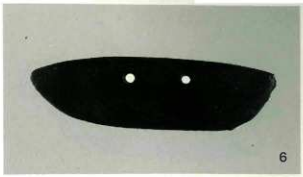

1

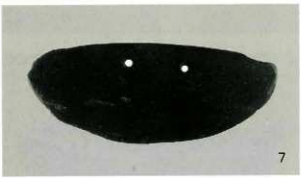
2

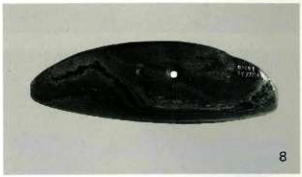
3

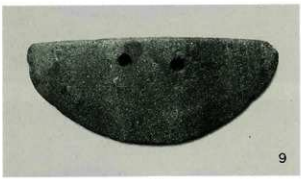

4

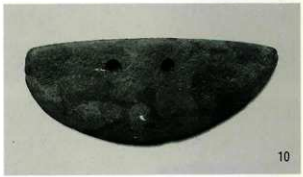

5

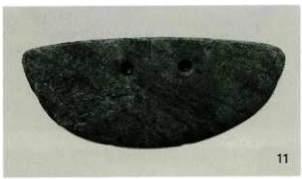

6


7


8


9


10


11

12

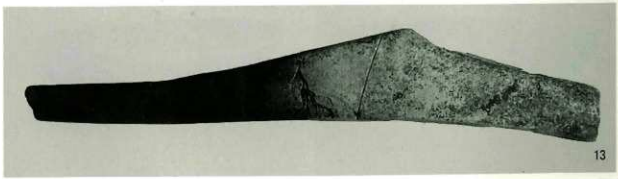
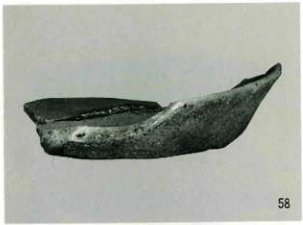
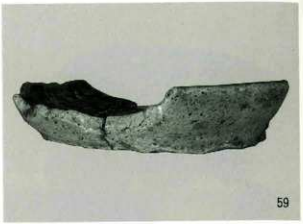
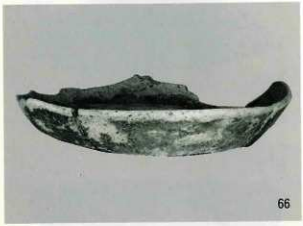
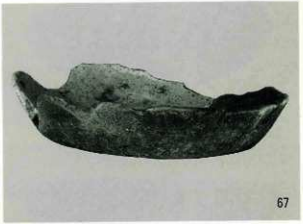

13

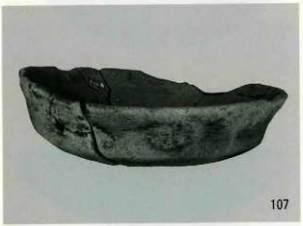
図 版 16

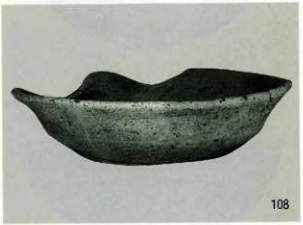

58

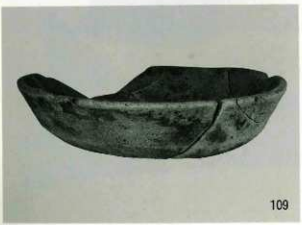

59


66

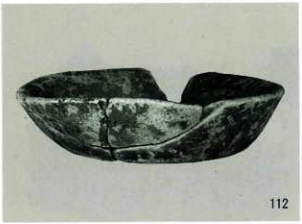

67

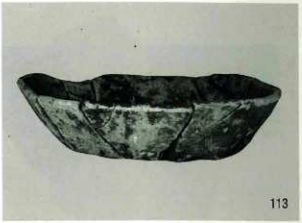

107


108

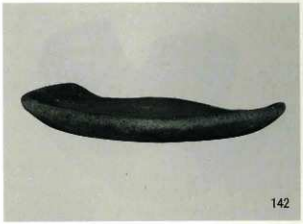

109

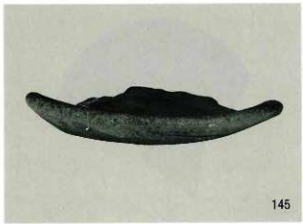
111

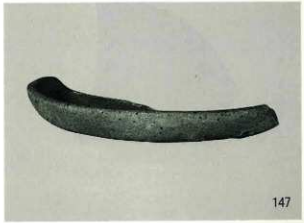

112


113

114


142


145


147

148

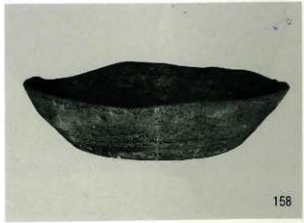
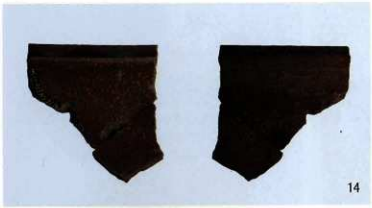

158

図 版 18

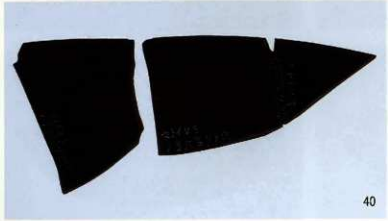

14

16

23

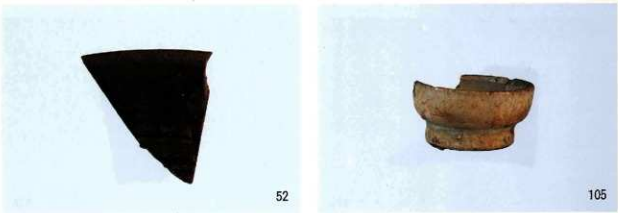
24

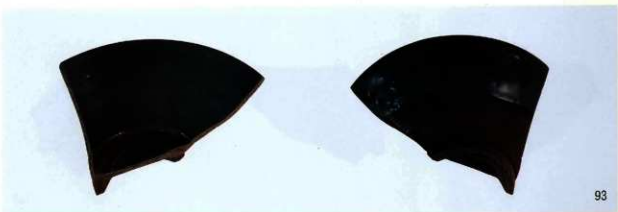
31

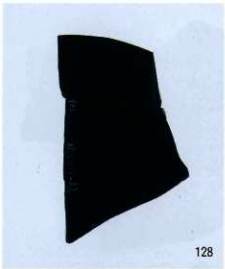

40

42

44
46


52
105


93


128

129

168

169

173

174

185

188

帆　足　城　跡

Ⅴ．帆足城跡

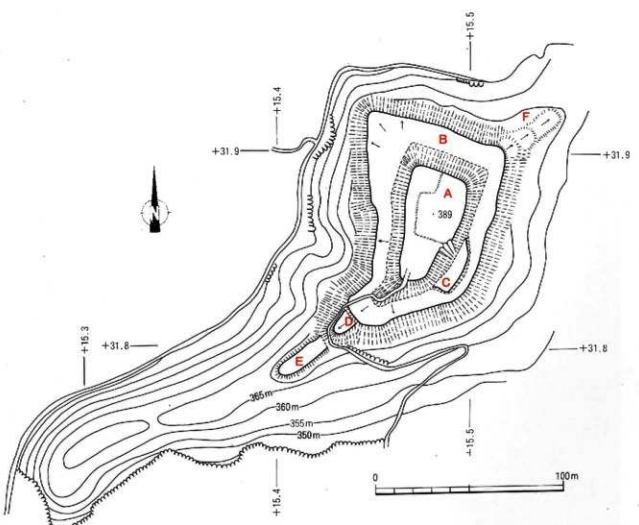
1．調査の概要

遺跡（「伝帆足城＜帆足居館跡＞」あるいは「西城」として周知されている）は大分県玖珠郡玖珠町大字帆足字獅子河に所在するもので，調査期間は平成３年８月５日から平成５年３月30日である。調査区は確認された城跡全域をおおうものであり，現状は雑木林及び茶地（最高所）に用いられていた。調査は茶地移動の後に雑木を伐採・撤去し，重機を用い試掘トレンチ15条を以て遺構・遺物の確認を行なった。調査区内の土砂堆積状況は，腐植土（現代の表土）を除去すると直ちに地山の粘土層或は凝灰岩盤が露出する。試掘調査の結果，曲輪内からは遺物等の出土はなかったが，切岸，腰曲輪等の施設が残存していたため，空中写真撮影測量図化を実施した。当該区に係る伝承等は前記した「西の城ン越し」のみである。

2．調査の成果

調査の結果，空中写真撮影測量図化から明瞭な縄張を確認するにいたった。第１図（帆足城跡縄張図）は空中写真撮影測量図及び垂直写真を参考に再現した縄張図である。城跡は独立丘陵上に確認されたもので，北東－南西は約200 m，北西－南東は約110 m，丘陵周辺に広がる谷部との比高差は50 m前後の規模となる。城跡南側には現集落から前記した墓所へ続く里道がのびている。

主郭と考えられるＡは平坦面が形成されており，中央部から北東隅にかけて一段高く（１mほどの段差がある）



第１図　帆足城跡縄張図

なっており、上段の最高所は標高約389 m、下段が標高387 m～388 m前後となる。Aの南北長は約60 m、東西長は約33 mである。Aを取り巻く腰曲輪Bの標高は375 mから378 m程である。A－Bの比高差は最小で約7 m、最大で約13 m、勾配は最小で約50度、最大で約60度となる。腰曲輪Bは西側から南側にかけて西下がり及び南下がりの緩斜面となるが、北側と東側は平坦面を残している。東側には張り出し部C（Bに対して1 m程高く、平坦面の形成は未熟でマウンド状となる）が設けられている。腰曲輪B南西端からは曲輪D・Eが南西方向にのびるが、曲輪平坦面の整形は未熟で、マウンド状に盛り上がっている。B－Dの比高差は約1 m、D－Eの比高差は3 m程である。腰曲輪B北東隅からのびるFは緩斜面状になっている。

3．小結

帆足城跡は帆足居館跡あるいは西城として地域では周知されており、現近世墓と中世の石造物が最高所に存在していたようである。調査時はすでに現近世墓及び中世の石造物の大部分は調査区北西側（九州横断自動車道用地外）に移転済みであった。前述したように調査区内に設定したトレンチからは遺構・遺物ともに確認されておらず、城が用いられた時期を確定するにはいたっていない。縄張りをみると主郭と考えられるAを取り巻くかたちで腰曲輪Bが設けられているタイプである。主郭を曲輪で取り囲む縄張りは玖珠盆地内では九重町の野上城があげられるが、主郭を帯曲輪で幾重にも取り囲む縄張りとなっており、帆足城跡とはかなり異なった縄張りとなっている。現段階において玖珠盆地内で知られている城郭のなかには類例を確認することはできない。

瀬戸遺跡の小結でも取り上げたように、城跡群は瀬戸遺跡を起点に帆足城跡、平田山土壇を整備・拡充していくものとした。しかしながら帆足城跡の調査においては縄張りを確認することができたのみで、遺跡の性格の把握には達していない。今後、玖珠盆地及び大分県内における城館調査の進展に伴う類例の発見・増加を期待して、帆足城跡の精妙なる位置付けを待ちたい。

参考文献
轟　義禮　「中世山城跡（10）西城」『玖珠郡史談』第11号 玖珠郡史談会 1984

帆足城跡遠景（西から）

フリガナ	セトフンボグン　セトイセキ　ホアシジョウアト
書名	瀬戸墳墓群　瀬戸遺跡　帆足城跡
副書名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（17）
巻次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編著者	金幸賢　田中良之　村上久和　原田昭一　染矢和徳
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870－0021 大分県大分市府内町3－10－1
発行年月日	2000年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
セトフンボグン 瀬戸墳墓群	オオイタケンスガグン 大分県玖珠郡 クスマチ 玖珠町 オオアザホアシ 大字帆足 ソベセ 字瀬戸	44462	068	33°17′15″	131°9′45″	19910805 ｜ 19930330	2700㎡	九州横断道建設
セイセキ 瀬戸遺跡	オオイタケンスガグン 大分県玖珠郡 クスマチ 玖珠町 オオアザホアシ 大字帆足 アザセト・ニシ 字瀬戸・西	44462	066	33°17′15″	131°9′47″	19910805 ｜ 19930330	11000㎡	九州横断道建設
ホアシジョウアト 帆足城跡	オオイタケンスガグン 大分県玖珠郡 クスマチ 玖珠町 イオアザホアシ 大字帆足 ノマシシガワ 字獅子河	44462	067	33°17′13″	131°9′55″	19910805 ｜ 19930330	22000㎡	九州横断道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瀬戸墳墓群	墳墓	古墳	竪穴式石室　石棺　土壙墓 土坑　ピット	土師器　鉄剣　鉄鏃　刀子 勾玉　ガラス小玉　管玉 滦文鏡　人骨	
瀬戸遺跡	館跡	中世	竪穴住居跡　切岸　帯曲輪 掘切　溝状遺構 掘立柱建物跡　柵状遺構 大型竪穴	弥生土器　石庖丁 輸入陶磁器　土師質土器	
帆足城跡	城跡	中世	切岸　腰曲輪	なし	

瀬戸墳墓群
瀬戸遺跡
帆足城跡

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書(17)

平成12年3月31日

編集　大分県教育庁文化課（文化財資料室）
〒870-0021
大分市中判田1977－1
TEL　097（597）5675
発行　大分県教育委員会
〒870 8503
大分市府内町3丁目10番1号
TEL　097（536）1111
印刷　明治印刷株式会社